

はじめに

サルトロ・カンリ遠征隊長

四手井 綱彦

1962年7月24日サルトロカンリ(Saltoro Kangri)の登頂はなしとげられた。思えば、サルトロ・カンリへの道はながかった。この峯へ登頂しようという計画は随分古くから AACK で温められていた。1935年のハント(J. Hunt)の試登報告は、山岳雑誌ケルンだったと思うが、鈴木信君がそのほん訳を載せている。これがサルトロ・カンリが注目されたはじめてであろう。アンナプルナ遠征隊が帰国して以後、いつの計画にも、この峯が話題にのぼらなかつたことはない。アンナプルナ再挙の計画のときにもこの山の話はでていたし、チョゴリサ行を論議したときにもこの山は有力な候補であった。

サルトロへのアプローチとしては、ハントの通ったリカ(Likha)氷河の道は問題外とするも、5500米のビラフォンド・ラ(Bilafond La)を越えて、シアチェン氷河へ一度下るか、ビラフォンドウォールを突破するかである。どの登路をとってもアプローチがながく、トランスポートに相当の困難がある。この山はもう少しカラコラムでの経験を得てからにしよう、という考えがあった。チョゴリザ隊が帰ってからも、せめてサルトロ川(Saltoro River)あたりだけでも偵察してくればよかったというような話もでていた。この次はサルトロへということは、一致した考えであった。この間、私達はワークマン(Workman)の著書を度々読み返していたし、あの本についていたシアチェン流域の地図は、重要なよりどころとして、会議の席上にも度々持ちだされていたものである。

AACKの30周年遠征計画をたてる時、サルトロ・カンリへというのは論議を要しなかつた。1959年6月にパキスタン政府に登山許可を申請するとともに、実行段階に入った。募金活動はそれ以前から活発に行なわれた。9月が終っても許可はこない。10月中にはと期待してテント等装備等の発註を10月迄おさえて待ったが許可は下りない。11月に入って、たしか中旬頃であったと思うが、許可の前提であると解釈できる文書——隊員名その他を通知せよというような内容だったと思う——がパキスタン側から来た。しかし、その後情勢は一転して12月初旬には、不許可の通知を受取った。当時 K₁₂ を計画していた英国インピリアル・カレッジ(Imperial College)のミラー(K.J. Miller)からも正月に手紙が来て、彼等の計画にもパキス

タン政府当局はウンともスンともいってこない。われわれの計画はおさき真暗だといってきた。英国でもそうならわれわれの計画不許可も止むを得ないと、いささかなぐさめていたが、彼等はその後許可をとってシアチェンに入っている。英国には一目おいてるらしい。

その後1960年も許可が得られず、1961年の夏には御承知のように、私と高村君とがパキスタンに渡航した。これは今度もむずかしそうだという日本大使館からの情報で、最後の現地交渉にでかけたわけである。遠征もカラコラム・クラブとの合同遠征という形式にした。この時万一の場合を考えて、第2候補クンヤン・キッシュ(Kunyang Kish)、第3にガッシャーⅢ(Gasherbrum III)をもっていった。私達も必要なときは、ヒスパー氷河からクンヤンを見てこようと、その準備もしていった。その後長期にわたる高村君のねばりと折からの池田首相の訪バを機に事情は急転直下解決し、我々の積年の希望の許可が得られたことはすでに御承知の通りである。一方日本大使館の援助もわすれることはできない。特に牧内書記官には終始協力指導をいただいた。また、本隊のいったとき牧内さんは往路はスカルドまで同行、帰路はピンデイまで出迎えていただき、御迷惑のかけばなしで、お礼の申しようもない。

シアチェン氷河とピーク36氷河の合流点付近にベースキャンプをおくとしたときに、ベースキャンプ入りを何日に想定するかは、一つの問題であった。1961年の夏カラコラム・クラブとの打合せのときも、この期日は論争的であった。ベグ(Beg)教授は7月10日以後15日頃を主張したが、結局6月25日から月末頃までということにして帰ってきた。AACKでも両論があった。7月に入れば快晴の日が期待できることは一致した見解である。問題は深い積雪の時期にビラフォンド・ラを越えるか、雪が解けてから越えるかにある。おそらく行けば雪は解けるが、登頂への行動日数が少なくなる。私達は早いめの計画ででかけ、7月1日、シアチェン氷河との合流から少しピーク36氷河を上ったアドバンスドベースキャンプ(Advanced Base Camp 所謂 ABC)に集結した。ほぼ予定の通りである。当時はまだ天候は充分よくなりず、7月に予見していた夏型の快晴つづきの日は、今年は少しおくれ

て、7月2日以後にやって来た。登頂のあと毎日毎日快晴で、帰路氷河は見進める程歩き易かった。天候に関する限りはおそく行ってもよかったようである。しかし、早いめにかけたことはいろいろの点で好都合であった。たしかにシアチェンに入ってから雪が深く、先発隊は大分難行した。ピラフォンド越えの偵察も少々悪天候の中を強行しなければならなかったこともある。一方、日数に余裕があったので、途中のキャラバンをのんびりやれたし、ピラフォンド越えのトランスポートも順調に進行した。

今度の隊では、誰が登頂隊員になってもよいという程、隊員一同調子がよかった。これは一度 5500 米の峠をこえているので、高度順応がよかったこと、食料係りの努力で栄養がよかったこと、ドクターの健康管理が適切であったことが、好い結果を導いたのであろう。しかし、全行程を通じて余裕のある行動ができたことも見のがすことにはできない要因である。山へ入ってから体重のふえた隊員もあったし、私なども、でかける前にはなんとなく胃の調子がわるいように思ったが、山ですっかり元気になってしまった。

緒言を終るにあたって、この機会に遠征隊に対して好意ある御援助御指導をいただいた多くの方々に、心から御礼申し上げるとともに、隊員諸氏の労苦に感謝の意をささげる。

サルトロ・カンリ登頂を終えて

副隊長 加藤 泰 安

前記：この文は先に現地より内地新聞原稿として投稿されたが、都合でけい載されなかったものをここに再生したものである。内容的に、前文の「はじめに」と重複する点もあるが御勘弁願いたい。 —編集者—

7月24日正午、私は6000mのキャンプで登頂をさせる斎藤隊員のはずんだ声を無線機の奥に茫然ときいていた。そしてよるごびにおどりまわる三人のポータ達を眺めながら、長かったこのサルトロ・カンリ計画をいつしか静かに思いかえしていた。

1953年秋、京大アンナプルナ登山隊の帰国をむかえた夜だった。数人の仲間とこの次の目標について語りあっているうちに、誰かの手にあったサルトロ・カンリの東北面の写真に皆の眼がすいよせられていた。

1935年、エベレスト登頂に成功した英国隊の隊長サー・ジョン・ハント (Sir John Hunt) が25歳のときこの山にむかった記録である。彼はこのとき、中途にして空しく撃退されている。考えてみると彼と私はおなじ年である。彼がサルトロ・カンリに挑戦したころ、

私は日本の山や蒙古の草原を、他日のヒマラヤを期してうろついていた。

1953年、彼がエベレストの登頂に成功したころ、私はマナスルの第一次隊員として彼の成功をベースキャンプでさいていたのである。

大登山家である彼にはとうていかなわぬまでも、やはり一登山家として彼に一矢をむくいたい気持は多分にある。それ以来この山は私とは離れがたいものとなってしまった。しかしその当時のわれわれの会の力ではこの山は登るどころか近づくことさえむづかしかった。しかし、その夜、1959年にむかえるわれわれの会の三十周年事業として必ずこの山に登ろうと誓いあったのだった。その後1955年にカラコラム、ヒンズークシ探検、56年にパンジャブ・ヒマラヤ、57年にスワート・ヒマラヤと調査隊を派遣し、58年にはチョゴリザ登頂と、われわれの遠征はつづいた。59年いよいよ三十周年の前年、この山の登山許可をパキスタン政府に提出したが、中国ならびにインドとの国境問題の故を以て許可を得ることはできなかった。60年、61年と許可申請は続けられたが、一向に許可の見通しは得られない。しかしこの山に対するわれわれの執念は衰えず、60年にはアフガニスタンの最高峰ノジャック登頂に成功し、仲間の経験はさらにつままれていった。61年には今回の隊長四手井教授と高村隊員がパ国に渡航し、必死に奔走したが、その見通しは更に暗かった。しかしわれわれの懸命の努力は遂に在日日本大使館の強力な援助を得られるに至り、時あたかも池田首相訪パの機会に急転直下の計画の許可が得られることになったのである。最初の誓いより八年目、計画決定より四年目、遂にわれわれはこの久恋の山に近づくことを得たのである。

この間この山の唯一の登路である東北面の写真は、私のデスクの上から一刻もはなれなかった。またこの山の付近にたち入った各国隊の記録は常に私とともにあった。そしてこの山の真のむづかしさがどこにあるかは十分に理解していたし、昨年のくれ、会より副隊長を命じられたときには、すでに私には私なりの作戦が決っていたのである。すなわち5500mの峠を越え、5000m前後の無人の氷河を月余にわたる輸送の問題と、60度をこえる常になだれの危険にさらされている比高2300mの氷壁の登攀を如何に安全に行なうかの問題である。このカラコラムの名山が今日まで25年間、各国隊によって試みられなかったのも、この二つの難かしい面をもっているからに他ならない。隊員の選定にはずい分仲間の中にも意見がわかれた。有能な気のきいた隊員を以て前者を解決しようとする意見、若い元気な優秀なクライマーを以て後者をのりきろうとする意見、さまざまであった。しかし私はそのいずれもとらなかつた。辺境に住む多くの異邦人を長期に

サルトロ・カンリ遠征概記

四手井 綱彦

前記：—この文は、当時現地より内地新聞用に書かれたものが、都合によりけい載されなかったものをここに再生したものである。話のちの平井氏の「キャラバン」とだぶるところもかなり多いがこの両文をあわせ読まれて往路の行動の概略を知って戴ければ幸いである。 —編集者—

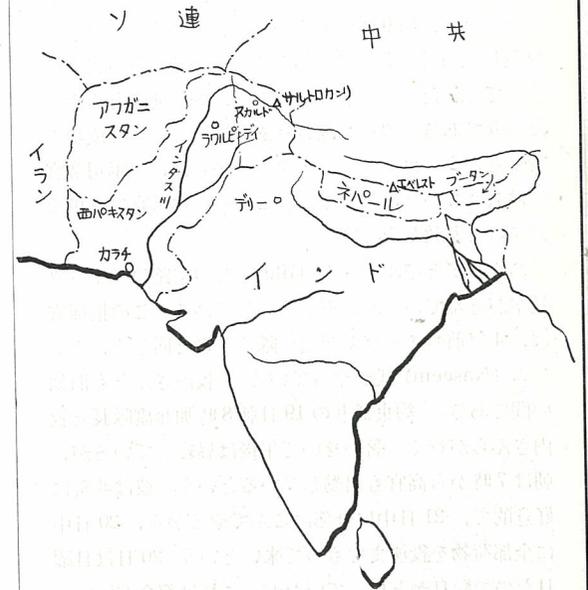
1) カラチからラワルピンディへ

5月11日夜、予定通りカラチ空港につく。大使館の米田さん、先着の林以下の隊員、連絡将校のバシール大尉 (Capt. Bashir) 等にむかえられる。バシール大尉は28歳、早くからカラチに来て出発準備をよく手伝ってくれた由。大使館の一方ならぬ援助と先着隊員の活動とで殆んど準備が完了している。船でもって来た荷も2台のトラックでラワルピンディ (Rawalpindi) に向い、上尾隊員の乗った車はもう先着している。平井隊員の車はエンジン故障で立往生中、暑さでやられねばよいが。

昨年来、この遠征隊に献身的な援助をしていただいた大使館の牧内書記官がホテルに現われる。隊に同行していただくことになっている。感謝の外はない。

翌日は土曜日である。午前中は大きいそぎであいざつまわり、夜は大使館に招かれて心づくしの御馳走になる。みんな昨夏以来の旧知なので、おそくまでくつろぐ。平井隊員の乗った車も20時間おくれてピンディ着、日本語、英語、ウルドゥ語まじりの電報がくる。これで安心。

去年出した申請書と隊員を変更したことが、外務省



わたって駆使することが、気のきいた口先のできることであろうか。ヒマラヤ登山に成れた有名な外国隊でこの故に反感をかい、ストライキを起こされ、隊が危険にさらされた例を私はいくつか知っている。またこの巨大な山が若さと一、二のクライマーの技術によって登りおせるものだろうか。幾多、外国の優秀なクライマーがその技術のゆえにゴリアテの犠牲となつてあたら若い生命をヒマラヤに散らした例も知っている。多少気はきかなくても、技術はやや劣るとも、誠実でお互いの心をかばい合う仲間こそ、この巨大な山に挑み得る最大の要件であると信じていた。そしてこれが私の作戦の根本であった。この点、会が選定した若い隊員については完全に私は満足していたし、これが今回の成功の根本でもあったと信じている。事実この気のきかない凡々たる登山者達は見事に悪名高いパルティスタン人夫を駆使して困難な輸送をやりおおせ、また危険な氷壁の登攀にも、悪天候にも、深い雪にもお互いの心をかばいあつて見事にその高さのうちかつたのである。如何なる困難も彼等の顔から笑いを消すことはできなかった。私は、いまこの若い仲間を心から尊敬すると共に誇りに思っている。

今回の登山はパ国のカラコラム・クラブとの合同登山であつて、こうした経験のないわれわれはかなりやりにくい面もあつた。事実登攀に参加した二人のバ国隊員は殆んど経験もなく、登山技術については初心者に近かつた。彼等はこの二人をよくいたわり、教え、遂にはそのひとりをも自分たちの登頂を犠牲にして、頂上にまで立たしめたのである。これはなみなみならぬ努力と言わねばならない。勿論登頂したバ国隊員バシール (Bashir) 君は、精神的にも体力的にもすばらしい青年であつた。この異国のこのすばらしい新進登山者を友達に得たことは、われわれにとってこの上ないよるごびである。

われわれのなしとげた行為は一つの山登りという取るにたらないものであるかも知れない。しかし、若者が困難な未知の世界に敢然として挑む心の多少には、やはり民族の消長を思わざるを得ないのである。

夕日に美しいカラコラムの高峯は、今回は頂きをゆづつたがこの次にはきつと辛い目にあわせてやるぞといわんばかりに空を圧して連なっている。しかし私はこの峯々に次のように答えながら、たのしい帰路をたどつたのであつた。

「それは君たち、カラコラムの山々は高いだろう。しかし決して人の心よりは高くはない。」

× × × ×
× × × ×

で一寸ひっかかっていた。これも14日には解決して許可が出る。15日早朝ラホール(Lahore)に発つ。芥藤、谷、岩坪の3隊員は、ピンディに直行する。

ラホールの空港からの路は何度通っても美しい広いみどりの森と芝生の中を走る。日本にもこんな路がほしい。今日はお祭りの休日で夕方からにしてほしいとベグ(Beg)教授は言う。教授はカラコラム・クラブの副会長で、この遠征隊のパキスタン側隊長である。ラホールへ来たのは教授と打合せのためである。今日はイスラムの大きいお祭りであることを承知で来たのだから致し方ない。官庁も事務所も今日は休みである。カラコラム・クラブの準備はまだ充分できていない。ベグ教授等3人は6月15日に発つ。それ以前には立てないという。それではと日本隊のみ予定通り先行することになる。去年から約束してあった軍の飛行機をスカルド行きに借用する件も、20日以後でないと成否はわからぬという。とにかく18日に空軍司令官に接触するよう約束する。ここで始めてパキスタン側の若手隊員ペルベツ(Pervez)に紹介される。パンジャブ(Punjab)大学の学生で好青年である。5日に試験がすみ次第、日本隊のあとを追いたいという。昨秋から留学している前小屋は病院に入っている。彼も近く退院してあとからくることになる。2日間の打合せを終って、16日の夕方ピンディにとぶ。1ヶ月半振りで全隊員が集結した。皆それぞれ大活動して少々疲れ気味である。ピンディでの主な仕事は、カシミール省でカシミール入りの許可をとりつけること、スカルドへの空輸計画をたてること、現地調達物資と食料の買付である。21日ピンディ発が予定される。

まずカシミール省に出頭し、ケイ・エッチ・カーン(K. H. Khan)課長に会う。外務省から連絡が来ているから許可を出すことは間違いないが、今日は局長がいないから、明9時にもう一度来いという。翌日また出頭して局長にあいさつして待っていると許可書をつくってくれた。これがあればあとは飛行便をとらえるばかりである。カーン課長は玄関までおきて成功を祈るという。カラコラム・クラブからは、空軍司令官には会えないといってくる。こちらで輸送官に直接交渉するより致し方ない。

スカルドとギルギット(Gilgit)行の空路はパキスタ航空がとんでいるが、軍が管理している。この指揮官は、4年前のチョゴリザ遠征隊のときと同じく、ナセーム(Naseem)氏がやっている。牧内さんとも旧知の間である。約束通りの19日朝8時加藤副隊長と牧内さんらが行く。暑いせいで午後は昼寝しているが、朝は7時から高官も出動しているという。彼は非常に好意的で、21日中に全部はこんでやるから、20日中に全部荷物を役所までもって来いという。20日は日曜日なので駄目かと思っていたが、これは都合がいい、

トラックも世話してやるという。ただし、飛行機の運賃は負けられぬと言う。目方をごまかすと過重になって危険だとのこと、もっともな話で致し方ない。

この日は忙しい日だった。10時から文部次官のお茶によばれていた。大統領に会うことは残念ながら何うに時間がなく帰路になる。若手隊員は物資の買付、地図の取得等、バザールから官庁へと走りまわる。

ピンディでは、パキスタン側の若手隊員第2号が現われた。バシール(R. Bashir)(24歳)という。ホテルの中のパキスタン航空の事務所につとめている。カレッジを出て中学の先生をしぱらくしたこともある。今の勤めはアルバイトで秋には大学へ入りたいと言っている。日本隊と同行することになる。

同じホテルに、ナンガ・パルバット(Nanga Parbat)を試みるドイツ隊が泊っていた。ヘルリヒコッハー博士(Dr. Herrligkoffer)を隊長としている。時々食堂で見かけたが、遂に会談の機会を得なかった。若い女性隊員が一人いたので、若手の連中も残念がる。

2) スカルド(Skardu)へ

5月21日、スカルドに飛ぶ日である。昨夜は築山さんのパーティに一同招かれてよくねむってしまった。加藤副隊長におこされる。時計を見るともう出発の時間である。5時15分前に空港につくことになっている。副隊長は少々あわてている。車もまだ来ないし、牧内さんの室をノックしても電話してもでてこない。

幸いにも今朝は快晴である。これなら今日は飛べる。この飛行は天候次第である。雲があると欠航になるし、飛び出しても目的地直前から引き返すことが度々ある。昨夏もギルギット行で2日間待たされた。この飛行はナンガ・パルバットに続く5000m級の山脈をとびこえ、ギルギットやスカルドは、インダス川のせまい谷間の飛行場に着陸しなければならない。翼が岩山に引っかけられないかと思わずヒヤリとさせられる。

空港では、昨日はこんでおいた荷物の積込中であった。飛行機はフォッカーの双発フレンドシップ。ギルギット行のDC-3と比べて新鋭である。朝食代りに食堂でお茶をのむ。早くおこされたせいか皆少々食欲がない。予定より少しおくれて6時とびたつ。昨日大統領が出席して完成の式典が行なわれたという新しい首都の水源地が水を満々とたたえているの見える。パキスタンの軽井沢ともいべき山上の街マリー(Murree)を右に見て、機は山岳地帯に入る。雪の山が美しい。昨夏ジープで行ったカガンバレー(Kaghan Valley)の氷河湖のあたりも雪の中にあり初期のカラコラム探険隊がキャラバンを組んで越えていったバブサル峠(Babusar Pass)もまだ雪にとざされている。

ナンガ・パルバットもはやくからひとときわ高く見えてくる。峠を越えると、インダスの溪谷である。谷をかこんで荒々しい岩山がそびえている。飛行は快調である。昨年のようにゆれることもない。ところどころに緑のオアシスが見える。やがて右にナンガ・パルバットがま近に見える。ヘルマンブールが一人で往復した長い稜線、マンメリーはじめ多数の犠牲者をのんだ氷の斜面が静かに輝いている。だれかが写真の通りだと叫ぶ。左の窓からははじめて見るあこがれのカラコラムの秀峯が立ちならんでいる。

岩山の間をとぶことしばし、翼から車輪がとび出した。もうスカルドにきたのである。砂けむりを立てて機は広い河原の飛行場に着陸する。軒の低い建物がならんだ簡素な飛行場である。われわれ6人がおると、荷物が次々とおろされた。私達は二つ立っているビーチパラソルの下にひと休み。若手隊員は荷物の管理に忙しい。これで暑い平原の都会からもわかれ、文化圏からも遠く離れて、未開の地カラコラムに入ったのである。

宿舎であるレストハウスに向う。柳がところどころ茂っている砂道をトラックで走る。道端に小さいあやめが花をつけている。高いポプラが立っている。インダスの河原は白々と輝いている。レストハウスに着くと人ばかりである。フンザ帽をかぶりうすよごれた布をまとった人々がむれてる。チョゴリザ遠征隊の隊員であった、加藤、平井、岩坪、高村の四人には当時のクーリーやポーターだった人々が早速かけよって握手している。中にはだきついて涙を流しているものもある。バラサーブにも握手してくるものもある。桑原バラサーブと間違えているのかもしれない。スカルドは今西隊も来ているので日本人を知っている連中も多い。

天候は午後くずれて雲が出て来たが、一便の貨物機を含めて3便の飛行で全隊員と荷物は全部空輸できた。誠に幸運であった。

どこからききつけてくるのか、高所ポーターの経験をもった連中がうすよごれた証明書をもって、ぼつぼつ志願してくる。チョゴリザへいったイスマイルは、もうポーター顔で荷物の世話をしている。レストハウスの芝生に荷物を集積し、テントを張る。荷物を飛行場に運び残したので心配していると、警官が2人夜中見張りをしてくれるという。レストハウスにも警官が2人来て見張りをしてくれる。この警官はとうとう11日間庭にベッドをもち込んで24時間ぶとうして、警戒に立ってくれた。

3) スカルドからカパルー(Khapalu)へ

スカルドでの第1の仕事は、奥地への装備の輸送計画を立てることと、こく暑の中で走りまわったために

多少疲れの出た隊員に休養をとらせることである。まず翌日から、輸送計画の検討がはじまる。方法は三通りある。一つはクーリーをやとってここからキャラバンを組織することである。この方法は従来からとられている方法で、チョゴリザのときもここでキャラバンを組んで谷をさかのぼっていった。第2の方法はロバや馬をやとって、荷物を輸送すること。第3の方法はここから上流約60マイルのカパルーまでジープを利用することである。クーリーをやとうことはさして困難でない。毎日朝からクーリー志願者がレストハウスのまわりに多数すわりこんでいる。しかし、クーリー賃が上っているの、なるだけ外貨を節約しなければならない。ロバや馬は山におい上げてあるので、集めるのに4~5日かかる。これは経済的には最も安上りであるが、いろいろ問題が多い。最後に残るのはジープ輸送であるが、約12~13回の往復を要することになる。クーリーをやとって歩いてゆけば、4日でゆけるのに、これでは一週間以上もかかる。しかし、早く出てきたので、日数には余ゆがある。経済第一の立場でジープをとることにする。遠征隊がジープを使うのは、これが始めてである。今後の先例にもなる。スカルドには、タクシ・ジープ(Taxi Jeep)は2台しかない。ほかには、この地域を統轄する政務長官ともいべきP.A. (Political Agent) と呼ばれているもの下におかれている。ラワルピンディから日本大使館名で遠征隊への援助を依頼する電報を打ってもらってあったのだが、あいにくP.A.もA.P.A. (Assistant P.A.)も不在で、28~29日頃にならないとかえって来ないという。P.A.がすべての権力をにぎっているの、彼が不在では、P.A.のジープを借りる訳にはいかないし、タクシー業者にも交渉がしにくい。足元を見て高いこと吹きかけてくる。牧内さんと連絡将校の努力でやっと一台だけ交渉がまとまり、23日から輸送することを契約する。

23日の朝、約束通りジープがやって来たが、荷物を積むためにホロをはずせというと帰ってしまった。一回いくらの約束なので荷物を積みたがらない。「これがパキスタンだ」と見せられたような気がする。連絡将校の知人がタクシー業者の経営者をしているというので、再度の交渉する。今度は輸送重量によって支払うことに約束が出来る。カサの高い荷物が多いのでこの方が結局はこちらにとっては都合がいい。

24日早朝から輸送をはじめる。門前の柳の木からつるしたバネ秤りで一個一個計量してつんでゆく。周りには6時というのに見物人がつめかけている。エキスペディションには経験の多い岩坪とパキスタン側隊員のバシールが、一番乗りをする。今までこの辺境地帯では、人の肩か、ポニーか、ラクダ位しか貨物輸送の方法はなかった。最近この地方でジープ道路が開発され

つつある。バブサル峠を越えてギルギットまでジープ道路が通じている。ギルギットからスカルドまでの路も、現在建設中である。天候に左右されて、何日も待たねばならない飛行機輸送にジープがとって代る日もくるにちがいない。昨年も貨物を満載してぞくぞくと峠を越えてゆくジープを見て、ジープの文化的価値を見直した。しかし、この道路は、車一台分の巾しかない。それが急峻な岩壁にぎざまれている。しかも急な登り下りがある。キモをつぶしたことも度々であった。カバルーへの路もどんなであろうか。昨年高村が一度通ってはいる。無事につけばいいが。

途中でもう一台の業者も2往復、P.A.の小型トラックも借りることができた。結局10往復で、隊員12名と貨物6.5トンばかり輸送が完了した。もう5月も終りである。

スカルドのレストハウスは広大なインダス川の段丘の端にある雪をいただいた4000~5000mの山にかこまれている。気候も日中は日射しが強いが朝夕ははだ寒い。午後になると風が出て、砂嵐が吹いてくる。これはどうにもならない。どこも砂まみれになり、山も曇って見えた。毎朝ジープを見送ってしまうと、朝食になる。ユデ玉子とチャパティとミルクのたっぷり入った紅茶がでる。11時頃にまたお茶をのむ。パキスタンの紅茶は世界一だと連絡将校は自慢する。いや日本のお茶が世界一だと誰かがまげかえす。日本からもって来た玉露を彼はよくのまない。パキスタン人は甘いものか、辛いものしか分らんのではないかと誰かがいう。味の素のよさもわからぬようである。2時頃にランチ、夜食は8時になる。ひると夜は、羊の骨付肉の入ったカレー汁、チャパティそれにボソボソしたパキスタン米の御飯、時たまニワトリが出る。野菜がないので皆閉口する。もうトウの立った道端の菜種の花をつんで来て菜の花漬けをつくる。仲々おいしい。大根の塩漬をコックにおしえたりする。

加藤副隊長は毎朝夜明け前につりざおをかついて、河原に下りてゆく。若手の隊員が一人二人ついてゆくのが皆素人である。仲々獲物がかからない。遂に最後の日に十数尾をあげて貫禄を示す。隊長は毎日日本からの海外放送を捕えようとして遂に成功した。合わせて老人の執念だと若手がいう。

快晴の一日、はるばるもって来たゴムボートを浮かべる。仲々快適である。釣りをたのしむものもある。子供達が寄って来て、ボートにのせてもらう。どこへいっても子供達は可愛いものである。写真機を向けると逃げ出す子もいる。のどかなスカルドの休日。

貨物をジープで送ることがはじまると、クーリー志願の門前の連中も日に日に減ってくる。カバルーでやとわれるつもりで行ったにちがいない。高所ポーターの志願者も内定した。連中はあいさつをしてカバルー

に向っていく。裸一貫であるから気楽なものである。

サーダー(ポーター頭)は、スカルドで決定した。隊員と共にジープでカバルーへ先行する。パキスタンにはネパールのように、シェルバはいない。インドから連れてくることもできない。現地人で探検隊にクーリーとして参加したものが経験を積んで高所ポーターになる。彼等は参加した隊からのお墨付をもっている。サーダーになれる資格の持主は余りいない。サーダーにしたグラム・ラスールは見たとく仲々紳士である。赤いチェックのワイシャツ等着込んでいる。靴もちゃんとはいっているズボンもあのだぶだぶのパキスタン風ではない。彼はラダック(Ladakh)の出で軍隊にもいたという。57年以来5回のエキスペディションに参加している。60年のアメリカ隊に参加してマッシュャブルム(Masherbrum)に登っているし、去年はオーストリア隊とгент(Ghent)にいつている。

28日にP.A.が帰ってきた。早速面会を申し込む。今日は白いワイシャツに背広という第一装でゆく。お茶を御馳走になり、歓談する。帰路の援助をたのむ。彼は全く紳士である。

スカルドからカバルーまでのジープの旅は天気がよければ快適である。私の通った29日はあいにく天気が悪く、時々冷雨に見舞われて困難した。広河原を行く、広い砂原もあれば大きい岩石の乱立したところを右に左にぬってゆくようなところもある。奥に行くに従って、岩壁をへつって行くところもあり、時には岩山の急な傾斜をジクザグで越えてゆく。岩壁の中程に巧みに水路を開いて、思いの外豊かなオアシスができている。変化があって面白い。あの水は山上の万年雪から出てくるのか、雲がかかって見えない。

人々の顔立ちも何んとも東洋人的なものを感じる。女性もちらほら見える。逃げかくれはしない。みな物めずらしそうに見送っている。手製の下駄をはいている男に2度ばかり出会った。日本の下駄と違って左右がある。大多数はやはりはだしである。ドライバーの運転は極めて慎重である。とうとう6時間かかって、カバルーの川岸につく。たちまち住民にとりかこまれる。迎える隊員は向う岸からザークで渡ってくる。水の流れは毎日増水しているというが、まだ100m足らずである。流れを渡って砂の川原を横断30分、古いモレーン(Moraine)のかげの芝生にあるテントに迎えられる。気持ちいいテント地である。いよいよエキスペディションに来たという感が深い。

翌31日には総員カバルーに集結。6月2日出発とさめる。昨日の雨は山上は雪だったのか、4000m以上は新雪に美しい。サーダーのラスールの他6人のハイ・ポーター(High Altitude Porter)を採用する。イスマイル、バクリー、石の地藏さん(オラム)、シワと4人のチョゴリザ組が入っている。本名よりアダ名の

方が覚え易い。みんな服装を支給されて、見違えるようになる。

午後は流しの芸人がやって来て、テント地のそばでおどりがはじまる。おどり手は群集の中からでる。〇〇やれというような声がかかる。伴奏はフェとタイコ、おどりも日本のおどりになんとなく似ている。音楽もお神楽みたいである。このおどりは夜っぴて行なわれたらしい。キャンプ地の後の林から眺をつけるころまでタイコの音がきこえていた。翌日は荷物はこびのクーリーを200人程やとい入れて出発準備を完了する。

4) サルトロの谷へ

5月31日、全隊員はカバルー(Khapalu)の対岸サリン(Saling)のテント地に集結を終った。カバルーには、このあたり一帯を支配するラジャーがいる。先着の隊員はお土産をもって挨拶の訪問をしているが川を渡って行かねばならぬので、隊長の訪問は帰路にした。この地方のバルチスタン語と日本語との単語の中に同じものがあると上気嫌だったそうである。

明日の出発を前にして、6月1日クーリーの雇入れをする。毎日テント地の西側にはクーリー志願者が200人程終日すわり込んでいたが、今日は早朝から400人以上もつめかけてくる。例のダブダブのズボンに毛布のような布を肩からかけている。帽子はフンザ帽がうんと減って、丸い羊毛でつくったオワン帽を被っているものが多い。この帽子は水飲みにも使える。

この大群の中から約170人をえらぶのである。連絡将校とサーダーが主役で、警官が一人立合う。

志願者達はこの流域の村々から集ったもので、中には4~5日かかる谷からもきている。まず地域別に代表格のもの10人余りをえらぶ。つぎに各グループ毎に一段と低い芝生に座らせる。これが一騒動である。鞭をつかって整列させて選定がはじまる。経験者を中心にえらんでゆく。以前に外国隊に雇われた証明書を差し出すものもいる。えらんだ者を上段に座らせる。バスール隊員も言葉が通じるので活躍している。一寸油断していると下段から上段の列へ飛び込んでくるものがある。鞭で追い返されるもの、座り込んでつまみ出されるもの、大き過ぎである。現金収入が得られるまたとない機会であるからみんな必死である。5時間ばかりかかって172人を雇入れる。落選した人々も去りがたく、番号符をわたされる人々を見ている。

いよいよキャラバンが始まる前夜というので、盛大なキャンプファイアをたく。紫がかかった焰が上る。アンスの木だという。歌声の絶え間にカジカの声がきこえる。村にはタベのお祈りが今日もこだましている。星空が美しい。

6月2日、山には少々雲がかかっていたが、新雪に

朝日がかがやいている。

6時、6つのグループに分れて、ポーターの指揮の下にクーリーの一群一群が、色とりどりの荷物をせおってサリンの村に入ってゆく。隊員は先頭・中央・後部の三つに分れて隊列に入る。隊長、副隊長等一隊は三頭の白馬にまたがって中央を行く。村はずれのとある家の窓が開く。女性の顔が見える。バラの花束が差し出される。よい香りがする。胸にさしてゆく。前途を祝福してくれるのかこのあたり野生のバラは時に見かけるが一重である。八重のバラはどこに咲いているのか。クーリーもポーターもバラをさしているのを見る。上流になると柳の白い花をさしている。オアシスの緑の外は荒涼たる地域である。色彩を愛しているのかと思ったが香りであるらしい。このあたりはショウク(Shyok)河に、フーシェ(Hushe)とサルトロ(Saltoro)の二つの支流が合するところで、3~4哩もある広い河原である。真白い川砂がひかりかがやく。私達の行先はサルトロの谷であるが、橋はかかっているし、川は雪解けで増水している。サルトロ川の合流点を右に見ながら、北へフーシェの谷に入る。雪の合間にマッシュャブルム(Masherbrum)の秀峯が見える。アメリカ隊が登っている。よく登ったものだ。

約5哩谷をさかのぼり橋を渡って左岸にとりつく。右岸には村々がつづいてしたが、左岸には橋を渡ったところのパラゴン(Baregon)以外には村がない、ガラガラ石の台地や急傾斜をへつって道がついている。今日の泊りはサルトロ川の入口フルディ(Huldi)の村である。村はずれの丘陵地の芝生にテントを張る。ここでは谷がせまく谷の水は巨石の間を流れ、一寸日本の谷のようである。水は白くにごっている。

第2日はまた広くなった川原を右に見ながら右岸に行く。左岸にも道がある。午前中にチノ(Chino)につき河原に宿営。林の後には巨大な岩壁がつづき、林の緑との対照が美しい。齊藤ドクターが村人の診療をはじめる。

第3日も再び河原の台地を行く。明らかに氷河の削痕と思われる赤ちゃけた花崗岩がころがっている。3時間足らずでコンダス川(Kondus)の出合につく。サルトロ川はここでコンダスとダンサム(Dansam)と二つの谷に分れる。コンダスの谷は上流に大きい氷河をもち、シア・ラ(Sia La)をへてシアチェン氷河につづいている。またサルトロ・カンリの東南面を氷河ではいる上流もある。約30年前ハント(J. Hunt)はこの谷奥のドンドン(Dong Dong)氷河をへて、サルトロ・カンリの登頂を試みている。この登路は最短路ではあるが荷物の輸送がより困難と判断して、われわれはビラフォン峠(Bilafond La)を越えてシアチェン氷河への道をとる。

コンダスの出合では、昨日連絡してあったので、ダ

ンサムの人達達が橋をかけてくれている。私達乗馬組はその下流を渡る。村人は乗馬はお手のもので、何回か流れを横ぎって隊員を渡してくれる。この村を過ぎると道はダンサム川の左岸にうつる。ここには橋がある。谷はこのあたりからせまく、兩岸は絶壁つづき、畑をつくる余地もなく、泊り場もない。今日は強行軍である。夕方谷がひらけてマンディク (Mandik) の村をすぎたところで泊り場を見つかる。ポログランドにでも使うのか。川原沿いの広い芝生である。星が日本の10倍もかがやいている。

キャラバン第4日は再び開けた広い河原と畑地の中を行く。大快晴雲一片も見当らない。昨日の入れ合せで今日は半日行程で最奥の村ゴマ (Goma) につく。村に入る前、右岸にはじめて氷河を真近に見る。アイスフォールが岩壁の間に青白くかがやいている。ゴマには二三日滞在して食糧の補充とクーリーの雇入れをする予定である。

この四日間、多くの村々を通り過ぎた。どの村も豊かな水にめぐまれて畑に麦がのびはじめている。石垣づみの段々畑である。長い柄のついた小さなスコップで、無造作に水を自分の畑に引いている。水争いもなさそうである。村には柳、アンズ、リンゴがしげってその下に石積の二階家が密集している。階下は家畜の住家らしい。大きな家では石垣を広くめぐらしている。石・石・石である。村中の通路はせまく、迷路のようである。やっと一人が通れるくらい。村人はめずらしそうに一行を見に集ってくる。中にはラーシー (乳製品) をすすめてくれる老人もいる。容器がいつ洗ったか分からないので一寸辟易するが、なかなか美味しい。ニワトリ、玉子を売りにくる。羊肉とともにこれらが毎日の食料になる。キャラバン中は現地食である。野菜がないのが閉口である。畑に咲いている菜の花をつままして花漬をつくる。ノビルのような野草の塩漬をもって来る。ピリッとして風味がある。日本人は何んでも食べるとポーター達は感心している。

谷をさかのぼるにしたがって女性が開放的になってくる。村を通ると赤ん坊を抱いた婦人連が集まって見ている。写真を撮っても町のように逃げかくれはしない。齊藤ドクターの診療にもマンディクやゴマでは母親が子供をつれてくる。女性の一団がテントの近くでながめている。このあたり家畜の放牧は主として女性の役目ときく。女性が解放的なのは宗教的な相違からかも知れないが、女性の労働力が大きい地位を占めているからではなかろうか。隊員の奥さんそっくりの女性に会ったという報告もある。東洋的な顔立ちが多い。

ダンサムから谷に入るとサルトロ川の流域に比べて風景が一変する。ここではアンズもリンゴも生えていない。段々畑のところどころに柳が淋しげに立っ

るばかり、畑の作物も麦がへってエンドウがふえてくる。ソバが芽を切ったばかりである。カナガラが黄色い花をつけている。高山植物らしいのがところどころに咲いている。荒々しい風土が人の心にも影をおとすのか、マンディクでもゴマでも、泊地では村人とトラブルが起った。ここは高度3000mを越えているのだ。よくもこんなに住みついているものだ。

5) ビラフォンド氷河へ

6月5日に最終の村、ゴマについて、ここを出発するのは9日になってしまった。村の代表達はクーリー200人を全部入れかえないとアタもキャンプ地の燃料も供給しないと出ず。連絡将校が大奮闘する。彼の権力と弁舌とは仲々解決しない。すぐ下流のガガル (Gagalu) の村人が協力することになって、ゴマの人々も急に折れてくる。出発予定を1日延期して1トンのアタが調達される。カプルーから荷物をついで来た人々の中、35人が希望退職してかえってゆく。新たに50人を雇い入れて、キャラバンは約220人となる。高所ポーターも二人を補充する。

この四日間、テント村ではエンジンがうなり出し、高所医学のため隊員とポーターの心電図がとられる。日照計、気圧計、風速計が動き出す。隊員は思い思いに調査にでかける。谷の奥から午後4時を過ぎているのに雪崩の音がきこえる。夕方になると流れがにぎり、水量が急に増してくる。山の雪線も晴天続きで大分上ったようだ。きのうまであった橋が一夜のうちに流されている。現地雇入れのクーリー達が流れた橋木をどこからか拾ってきてかけ直す。手なれたものである。

今日はビラフォンド氷河の末端にあるギャリ (Ghyari) までである。6時に出発して10時にはキャンプ地に着いてしまう。下の村から家畜を追い上げている牧場である。広いけれども乏しい草地に羊・山羊・牛・ヤク等が放牧されている。牧人の住居と家畜の囲いが石積でつくってある。氷河の末端付近までは白い広い河原である。兩岸には柳・バラ・ジュニパーの林が茂り、その中を氷河の水が流れる。谷は典型的なU字谷で、花崗岩の巨峯が兩岸にそびえている。右岸の岩峯の間からも所々小さな氷河が押し出している。

アイベックスだ。その声に双眼鏡を向けると、岩壁の下に5頭のアイベックスが見える。村人の眼の好いにおどろく。われわれも村人も、武器をもたない。アイベックス、スリーピングとポータがいう。このあたりは狐や狼もいるらしい、獣や小鳥の楽園である。

6月10日いよいよ今日は氷河にとりつく、左岸からチュミック (Chumik) 氷河が合流して広大な末端をつくっている。左岸を登る。見たところ高さ150m位に見えた。モレーン (Moraine) のガラガラ石は行けど

も行けどもつきない。いたるところ氷壁に囲まれた池がある。美しい青氷の柱が立っている池もあるが、美しい池だとはいえない。モレーンからとけ出すどろ水をたたえている。モレーンの山を越え、氷の池を廻り、巨岩の間を行く。今日もアイベックスが二頭間近く走り去る。クタクタになって右岸の泊り場につく。クーリー達は岩の下に石を積んで泊り場をつくる。今日は午後から大分雲が出た。4日以来の大快晴もこれとずれるのではない。風が寒い。

6月11日ビラフォンド氷河も上流らしい形態を現わしてきた。広い雪面上に五筋ばかりのモレーンの流れが走っている。右岸寄りのモレーンを伝ってゆく。今はモレーンの山も小さく歩き易い。右からも左からもアイスフォールをつくって氷河が合流している。中々壯観である。雪面の部分が多くなり、クーリーから雪眼鏡の要求がでる。今日も行程は短く、午前中に本流のアイスフォールの直下につく。慎重にテント地を選定する。モレーンの山を一つ越えた中央のモレーン上にキャンプ地も定める。かくれたクレバスが多いので初めてロープを出してクーリー達を渡す。氷の面をピッケルで平にしてテントを張る。賃金の支払いで一悶着あったけれども、ビラフォンド峠越えの要員70人を残してクーリー達も帰ってゆく。下流の方に悪い雲がでている。

6月12日ベースキャンプ地の整理がはじまる。荷物を集積して快適な食堂ができ、その近くに調理場の赤いテントができ上る。テントをつなぐ道路をつくる。4800mのモレーン上に基地ができ上る。午後から小雪が降る。ガスの中にパキスタンと日本の国旗 AACK の会旗がはためいている。峠は曇って見えない。明日からビラフォンド峠越えの作戦にかかる。

6) 作 戦 開 始

7月に入ればカラコラムでは快晴がつづく、というのが私達の予想だった。はたして7月の4日雲一片も見られない大快晴の日が来た。しかしこの快晴も8日までだった。その後は日は照っても山には雲がかかり時には雪が降る。とくにサルトロ・カンリはいつもその南側のリカ氷河から吹き上げてくる雲に中腹以上とざされている。

5日に前進キャンプへ出発した林隊、7日に後をおった加藤隊は、幸いにもこの悪天候の中にも予定の計画を進めることができた。19日、20日と降雪をともなう悪天候のあとをうけて待望の快晴がやってきた。23日早朝第一登頂隊は、第五キャンプを出発する。午後になって天候は依然快晴であるにもかかわらず、登頂隊との連絡がとだえてしまった。

サイトウ隊、感あれば応答せよ……アタック隊感あれば応答せよ……。C₄ から、C₃ から、C₂ からのトラ

ンシーバーの発信に何の応答もない。夜になっても連絡はとだえたままである。どこかに露営しているにちがいない。アタック隊長の齊藤君は、はじめての遠征とはいえ、多年の冬山の経験を持ち、在学時代は山岳部のリーダーであった。信頼できる岳人である。この遠征隊でも食糧係、医療係をつとめ、ビラフォンド峠越えの困難な荷物輸送をよく計画通りやってのけた男である。つづく高村隊員は先年のチョゴリザ遠征隊員であり、昨年は単身少数のポーターを連れて、リカ氷河よりサルトロ・カンリへの道をさがした男である。パキスタン側のバシール隊員は経験も浅く、多少の不安がないでもない。しかし2人がついていいるから心配はない。しかし一まつの不安はこのころ。

24日朝になっても連絡はない。C₄ に上っていた林隊が迎えに登高する。12時の交信時間になった。こちらはアタック隊、こちらはアタック隊……10.45登頂しました……これから下山にかかります……。元気な声が私のC₂ できいていたトランシーバーに入ってくる。いつも不安そうに遠くから私のトランシーバーをながめていたポーター達も、いつの間にか私の周囲に集っている。登頂成功の報に彼等の顔も輝いている。丁度C₂ に上って来ていたカラコラム・クラブ副会長のベク (Beg) 教授も、バシール隊員の登頂にひとしおのよろこび、これはわがクラブのみならず、全パキスタンの喜びであると握手を求めてくる。

もうあとは下降のみである。天候もまだ崩れない。午後5時25分C₃ のある稜線上に豆つぶ程の3人の姿が現われる。これで登頂は完成した。

こうして世界最大の山岳氷河ンファチェン、その流域の主峯、サルトロ・カンリは1962年7月24日われわれによって登られたのである。

キャラバン

平 井 一 正

カラチ (Karachi)

カラチには5月6日の昼着いた。神戸を出てからちょうど1ヶ月。飛行機で先発した隊員の林、高村が船まで迎えに来てくれた。着岸してもなかなかおろさないタラップに業をにやした林さんが下からどなる。

—何故タラップをおろさないのだ。—

—着岸したらすぐおろしますよ。—

—ナンダトオ、船長みたいなこと言うな。—

カラチの土を踏まないうちに早速どなられた。

船に積んでいた荷物をおろすのはまだ2、3日かかる。ひとまずタージ・ホテル (Taji Hotel) におちつ

く。荷物の個数は全部で約 200、重量は約 6 トンであった。

5 月 9 日にこれらの荷物が船から運び出された。荷物が全部集ったのを見るのはこれが初めてであった。日本大使館は荷物の無税通関について実によく世話をしてくれた。私たちはすべての荷物を、チャーターした 2 台のトラックでラワルピンディ (Rawalpindi) まで運ぶことにした。事実それがいちばん確実に早いのである。しかし、かけがえのない遠征隊の荷物であるだけに、このトラックには隊員が 1 人ずつ乗って行くことにした。上尾と私が選ばれ 5 月 9 日の午後 9 時、トラックでカラチを出発した。他の隊員はカラチ、ラホール (Lahore) で用事をすませて、飛行機でラワルピンディに飛ぶ予定である。

トラック旅行

カラチからラワルピンディまではおよそ下関から青森ほどの距離である。トラックは 5 トン積程度。1 台について正運転手の外に助手がつき、交代で車を運転する。9 日の夜は雨でつぶれたというガタガタの砂漠の道をつっぱしり、3 時間程道ばたでござ寝する。大陸の夜は暗黒で得体の知れぬ恐怖に迫められる感じがした。

暑い日だった。2 日目の午後 1 時ごろ、1 台のトラックが故障してしまった。給油ポンプが折れていることに気がついたのは 2 時間もしてからだった。ここでは修理はできない。クワイヤルプール (Khairpur) まで他の 1 台にひっぱってもらい、ここで別れた。私が故障の車に残った。

ここはサッカ (Sukkur), ローリ (Rhor) と並んでパキスタンで一番暑い所だそうである。事実トラックがついたのは夕方 6 時だったが、太陽は砂煙りのためか丁度霧を通して眺めるようにかすんでおり、熱気はむんむんとしていた。たまたぬくらしい暑さであった。

羊肉とチャパティのばんめしを食って、郵便局に事の次第をカラチに知らせるべく電報をうちに行く。トラックの運転席に横になってウトウトしようとするが、修理屋がガンガンとやっけてとても寝られたものでない。

5 月 11 日

トラックの運転手は 40 歳ぐらい、名前はミンナ、助手はアクバルといい、26 歳。彼等は実に親切にしてくれる。ゆうべは郵便局へ馬車でつれていってくれるし食事はすべてミンナがおごる。そして今朝はめし屋のうらへつれて行き、タライ 1 杯の水を用意してくれてこれで体を洗えという。昨日から 40°C を越す砂漠の中を走り続けてきたので皮膚はかさかさで砂まみれである。これ程うれしかったことはない。体を洗ったら実に気分そうかいになった。

ミンナとバザール(市場)に行きパイプの溶接をたのむ。このバザールは大きく一応大がいのものはある。病院もある。しかし照りつける太陽の強烈さには参った。すべてはかさかさに乾いている。半そでにポロシャツという私のスタイルはここでは通用しない。巾の広い長ズボンと袖の長いシャツで出来るだけ皮膚の露出部分を少なくしなくてはならない。

余り水のみすぎたためかひるめしの羊肉とチャパティには食欲がなかった。ミンナが心配して何か好きなものをいえという。ムルギ(ニワトリ)はないかとさくといという。"あしたは着くさ"と慰めてくれる。何度もめしを食いに来て顔なじみになっためし屋の番頭マンズール・フセインがこの界わいでの唯一の英語使いだ。20 歳のこの青二才は親切にしてくれるが、すぐ帽子をくれたの万年筆をくれたのやかましい。そして私が 30 歳だということ目を丸くして、それからというものはこのめし屋に立ちよるトラック運転手仲間にさかんに私の年を宣伝する。まるでいいの見世物である。しかし運転手の中にはこのジャパニ・サーブに握手を求めにくるものもあり、戦争中のことについて語ったのもいた。皆すごい体格で私の少なくとも 3 倍はめしを平げる。マンズール・フセインという。ミンナはグレート・マンド。偉大な紳士である、と。たしかに彼はパキスタンには珍らしい人間だ。乞食にはおめぐみをする。横でみている子供にめしをおごってやる。

午後 2 時ごろ寒暖計は 45°C を示す。熱風にふかれると気が狂いそうになる。万年筆の金具、時計の金具がさわれない程あつい。めし屋にいと熱風にふかれてたまらないので、トラックの中に移る。トラックは野天だが、しかし少しはましだ。アクバルがコップに水を入れてきてこれで手拭いをぬらせという。よく気がつく奴だ。ビショビショにした手拭いがカラカラに乾くのに 15 分とかからない。

ミンナとアクバルは小さな小屋の中で職人あい手に何かゴソゴソやっている。前部を分解したトラックをみていると果して今日出発できるのかあやしくなる。無数のハエだ。このまちを歩きまわってもつまらないのでじっと時間がすぎるのを待つ。いろいろとやったが結局この修理屋は自分の手におえないと悟った。別の修理屋から応援をよんできた。そしてどうやらメドがついたらしい。5、6 人でばんめしも食わずにがんばっている。熱気がこもるまちを再び馬車で郵便局まで電報をうちに行く。午後 11 時半ごろやっと修理が完成する。調整に 1 時間程かかり出発したのは夜中の 1 時近かった。このまちには 30 時間程滞在したわけだが、いろいろな人間としゃべってぼくは彼等の人となりを知り、暑さで苦しんだわりにはその印象はよかった。

5 月 12 日

ランタンをつけてラクダの隊商が夜の街道を進んでいく。トラックは今までのおくれをとりもどそうと夜中走りつづけた。やっと南の砂漠地帯をぬけて北のパンジャブ (Punjab) 沃野に入ったらしい。道の両側に木の緑が流れる。道はムゾフォガル (Muzohorgal) で 2 つに別れる。右へ行けばラホール経由でピンディへ。左へ行けばピンディに直行する。直行ルートは砂漠の中のいやになる程真直な道だ。道標はアラビア文字だけと変わった。余り外人は通らないのだろう。午後 3 時砂漠の中で雷がなり、雨がふる。2 時間降ったか。雨あがりの砂漠はうそのように寒い。昨日の暑さが夢のようだ。セータがほしい程。

毛をぬくかそるかの話からがぜん話は急転直下。私のつたないウルドゥ語も大いに活躍。どうやらこういう話は世界各国共通らしい。バースコントロールの話からサックの説明(ウルドゥ語でこれをわからせるのは実に大変手間がかかった)。その他 Y さんがよるこびそうな話多数。

5 月 13 日

気持のいい朝だった。ピンディまでやっと 2 ケタのマイル数になってきた。道に無数のいなごが死んでいる。死がいを食べに集まったいなごがひかれてその上へその上へと重なって死んでいくのである。

ラワルピンディには午前 9 時に到着した。積んでいた荷物は連絡将校の友人のカリッド・カマル (Khalid Khamal) 少尉の家の倉庫にあずかってもらうように手配してあった。上尾の車は一昨日到着したようだ。荷物をチェックし少尉に礼を言って、トラックでホテルまで送ってもらう。私は別れの最後の瞬間にミンナが「ボクシス」(チップ) と言いはしないかと心配していた。何も金が惜しいのぢゃない、私が彼に対してもつイメージが破れるのをおそれたのである。しかし、彼は何も言わなかった。私はむしろにうれしかった。ルピー札を出して彼に握らせた。しかし彼は手をふって言った。

—ボクシスはいらぬ、サーブお元気で……—

—せめて道中の私のめし代でも払わせてくれ、ミンナー—

私はあわててポケットをさぐった。仁丹が 2 ケとメソソレが 1 ケ、それに私のサングラスを与えた。

「すべてのパキスタン人は金をめあてて人に親切にするから気をつけた方がいい」とはよくきかされて、そういうパキスタン人のイメージを作ってしまったが私はこの小柄な、色の浅黒いトラックの運転手を思い出すとそれを否定することにしている。どこの国でもすばらしい人間はいるものである。残念なことは私のパキスタンへの 2 回の遠征を通じて彼程の人間をみたのはこれが最初で最後であったことだ。しかし幸福なこととはそういう人間もパキスタンにいるということ

体験したことである。でなければ私はまだ「すべてのパキスタン人は金をめあてて……」の文句を頭から信じていたであろうから。

ラワルピンディからスカルド (Skardu)

斎藤、岩坪、谷が 5 月 15 日カラチから飛行機で到着。16 日にはラホールでカラコロム・クラブとの接衝をすませて、四手井、加藤、林、高村、連絡将校それに日本大使館の好意でスカルドまで色々の交渉のために同行して下さる牧内氏の 6 名が到着した。やっと全員が集結したのである。ただ、前小屋は肝臓をわるくして今ラホールの病院に入院中とのこと。この日のために留学していたのに残念なことだろう。しかしまもなく退院出来るそうで、退院次第われわれをおいかけると約束。林ドクターもそれを許した。

カラコロム・クラブ側が顔をそろえたのは 5 月 18 日の夕方だった。ラホールからバスでやって来た。ベグ (Beg) 隊長、ハイヤット (Hyat), それに若手のバシール (Bashir), ペルベツ (Pervez)。この二人は 24 歳と 20 歳。しかし結構ひねてみえる。彼等にとってわれわれの年は全くわからぬらしい。曰くタイアン 30 歳、ポコ 18 歳。

カラコロム・クラブには若いアクティブメンバーがいなくて今度の隊員の選定にはかなり苦労したらしい。新聞広告までしたが集らず、やっとこの 2 人をつかまえたという。我々がラホールに行つてはじめて 2 人の名前、サイズが知らされた。彼等の装備ことに靴はサイズが合わずそのやりくりで装備係は苦労した。19 日の朝、日・バ・サルトロ遠征隊の全メンバーが文部次官のお茶に招待をうける。どうしてもこういう席になると英語の力のない日本側はパ側に比べてひげ目を感じる。

パ側隊員は都合でバシール以外は約半月おくれるという。それはお互いに全く都合だった。バシールが 1 番幸運だった。彼は 1 人だけ我々と行を共にしたおかげで早く日本食になれ、後に頂上の栄をつかんだからである。

5 月 21 日午前 6 時、ラワルピンディを發ち、スカルドに飛ぶ。ナンガバルバット (Nanga Parbat), ハラムシ (Haramosh), ラカポシ (Rakaposhi), そして遠くに K₂, やがてなつかしいスカルド飛行場に到着した。まるで条件反射のように加藤さんは腹痛を訴える。加藤さんの腹痛といい、飛行場の建物といい四年前と全然変っていない。

レストハウスについては 8 時をまわっていた。群衆の中からイスマイルがとびだして来た。加藤さんにだきつき、高村に、そして私に抱きつく。黒い顔をクシクシにしてそして彼はうれし涙を流していた。

やがて第 2 陣が到着した。全隊員が一日でスカルドに集結できたことは何と言っても非常な幸運といわね

ばならない。

続々とハイポータ (High Altitude Porter) 志願者がつめかけてくる。その中にまじってなつかしい顔がみえる。シワも、バクリも、オラムもそしてチョビヒゲも。彼等のうちのあるものは荷物の整理をまめまめしく手伝っている。チョゴリザのときウルドカスまで一緒に行ったポリスが乾アンズをもって挨拶にくる。午後になると相変らずのサンド・ストーム。すべてがなつかしく、私は帰ってきたという感じを強くした。

スカルドからインダス川沿い60マイル程上流にカパルー (Khapalu) という部落がある。歩けば3日かかるがジープだと5、6時間で行ける。われわれはすべての荷物、隊員をジープでカパルーまで輸送することに決定した。しかし使えるジープは1台しかない。あとでP.A.のジープが借りられたが、ジープに乗る荷物はせいぜいで700kg 足らず、人間も2人しか運べない。運転手も毎日ぶっつけでは1日の休息も必要とあってスカルドを最後に出発した私とキャプテンにとっては実に10日の滞在となってしまった。

24日、岩坪とバシールがまず荷物とともにジープで出発。残りのものは荷物の整理と魚つり。大体毎日こういう日課である。心配していた前小屋は28日元気な姿をみせた。

連絡将校バシール大尉 (Capt. Bashir) は連日精力的に外交交渉に当る。彼は28歳、独身。熱心な愛国者でパキスタンの軍隊は日本の軍隊を除けば世界で最強という。次がドイツ軍だとがんばる。アメリカはどうかときくと顔をしかめる。日本軍を深く尊敬しており、世界最強はともかくとして実によく研究している。乃木、東郷から山下将軍、はては浅沼刺殺の山口乙矢まで深く興味をもっている。何故日本は軍備をもたぬかと所謂戸籍論を展開してわれわれを煙にまいた。彼は好んで議論をぶっつける。あるときは酒の害について、またあるときは女性の美について。

“ぜったいお前の妹を高村に紹介するな。彼はヘビードランカーだ。ヘビードランカーという者はな。彼は声をひそめて或日私にささやいた。金は浪費する。クレイジーになる。そしてもう1つ悪いことはキスをするとき口がくさくて嫌われる。世界のどんな女性もそのような男を好きになるはずがない。”(ここで反論して私はひどい目に会った。この話は別に斉藤が書くだろう。)

カパルーについて連中はどんどんと運ばれる荷物を対岸のサリン (Saling) にザークを使ってピストン輸送していた。

5月31日、いろいろとお世話になった牧内さんはカパルー行きを断念してピンディに発った。キャプテンと私はスカルドを引き払ってカパルーへ。谷とバシールが出むかえてくれる。サンドストームの中をザーク

で河を渡ってサリンへ到着した。そしてこれではじめて登山隊の全員が揃ったのだ。ハイポータも支給の服にきかえて勢ぞろいしている。チョゴリザ以来のイスマイル、オラム、シワ、バクリに加えてゴリラ、アブドラヒーム、それに彼等の長たるサーダー、コックのタキ。

キャラバン

6月1日は隊員全部にとって忙しい日だった。人夫の採用と、人夫がかつぐようにすべての荷を30キロに分配する仕事だ。今年は大きな遠征隊がこの地方を通らない。人夫志願者にとってここで人夫になれるかなれないかは1年分の生活費がかかっているから彼等も必死だ。採用者側グループに横からもぐりこもうとする奴、それを棒をふりあげて追い払うキャプテンやハイポータ。ようやく採用が終ったのはひるに近かった。もぐり込みにも成功したラッキーボーイもいる。人夫の数は172人。

荷物の整理も順調にいった。一番重たい荷物は発電機であった。約40キロあり、高処で心電図をとるための設備なのだ。分解できないので1人分の荷とし、ボタンスをはずむことにする。それから厄介なのは2米のスキー、標しき用の竹であった。

夕食後、大きなかがり火を囲んでうたをうたう。キャプテンもバシールも全然うたをうたわない。彼等にエンヤラヤのうたを教える。エンヤラヤの大合唱。

6月2日、サルトロへの前進が始まった。時刻は午前6時半。人夫の統率はすべてサーダーにまかせられるのでサーブは大いに助かる。ハイポータもしっかりしてきたものだ。

マチュル (Machilu) を過ぎる頃から正面にマッシュャーブルム (Masherbrum) が見えてきた。ここからみると屏風をたてたような雪と岩の絶壁だ。アメリカ隊はどこにルートをとったのであろうか。大きなアンズ、桑の木でかこまれたタリス部落をすぎる。村の女がむらがってわれわれが通るのをまるでこわいものを見るようにおそるおそるみている。その中に斉藤夫人にそっくりなのみつけて皆よろこぶこと。

フルディ (Huldi) についてのは2時半だった。空はどんよりとしていた。先着の連中はすでに芝生の上にテントをはりはじめている。コックのタキは火をおこし始めていた。着いてから30分もしないうちにニワトリのスープとチャパティができた。こんなに早くできるのはチョゴリザのときと比べるとゆめゆめである。私は概して彼の料理は良かったと思っている。ハイポータの食料とサーブのそれとははつきりとけじめをつけたし、紅茶の欠乏という事態に当面してもなんとかそれをうまくこなしていった。もさとしており丁度穴ぐらから出てきた狸という感じがする男だったが、時にはタキギの値段のことから村人とケンカをは

じめる戦闘的なところもあった。彼はいつもキャンプ地へ先行して紅茶の用意をして待っていた。彼のすぐれた才能はお菓子とアイスクリームが作れることで、ベースキャンプでひまになってから好んでそのうでを發揮した。岩坪のおふくろさんの名前と同じ名前なので彼はこのときとばかり好んでタキノとよんだ。

フルディからチノ (Chino) へは1日分としては距離は短かったが、それ以上となると長すぎるので6月3日はチノまでであった。午前11時半にはわれわれはチノの河原のテントの中でくつろぐことができた。暑い日だった。食事はフライシートとスベアポールで作った日よけの下でした。ジャムの缶を前小屋がひとり $\frac{1}{2}$ 平げる。これは肝臓の病気のあとでは生理的に要求しているとの林ドクターの言いで以後彼には甘いものは特別にお目にみてやることにした。

わが隊には医者が林、斉藤と2人いる。キャプテンに言わせるとドクター斉藤は practical doctor で林さんは theoretical だという。もっぱら現住民の診療は斉藤ドクターが当たった。今日の午後も村人に囲まれて彼は仕事を始めた。ドクターの英語をキャプテンがウルドウ語に、そのウルドウ語をハイポータのひとりがバルティ語にするのでかなり時間がかかる。夕方寒い風が吹き、あかりがつくまで診療を続けたのでキャプテンはすっかり感激してしまった。その前からキャプテンはドクター斉藤は great man であり、すばらしい gentleman だといっていたが、今日はいよいよすっかり頭にきて叫んだ。“おれはが政府に正式に書類を出して感謝状を出させる”。しかしそれはあとで実現しなかったが……。

今般はいつものチャパティとニワトリのスープの他にたくさんごちそうがあった。ネギをさつとゆでてリノールサラダ油とショウ油につけたもの。なの花と大根のつけもの。それにデザートとしてタキが腕をふるった卵と牛乳のお菓子。

翌日は一番長い日だった。それもダンサム (Dansam) をすぎてサルトロ川に入ってから村1つない荒涼とした道だ。ガラガラ道をあがったり、さがたりしていくと突然目の前がひらけて雪山が展開する。それは疲れを忘れさせるのに充分だった。

キャンプ地には5時ついた。マンディク (Mandik) の村はずれの芝地だ。高度3100m。マンディクからゴマ (Goma) までは4時間足らずだった。1番短い日である。ビラフォン (Bilafond) 谷の出合の河原にテントをはった。この部落が人の住む最後の部落であり、峠越えの人夫の食料その他はここで調達しなければならぬ。翌日はそのため1日滞在とぎめて午後はゆっくりと洗たくやらポーカールやら。はてはトイトイバクチまで。

ゴマと近接してガガル (Gagalu) という部落がある

が両村がとりきめてアタ (メリケンコ) の値段を1セル2ルビーとふっかけてきた。ダンサムでは1セル1ルビーだった。きっと足もとをみているにちがいない。それならこちらもち持久戦、少し情勢待ちと行く。

ひるごろ発電機を働かせてサーブ、ポータの心電図をとる。午後はうらの山、ビラフォン谷とか思い思いに散歩にでかける。

7日、8日もゴマに滞在した。その間荷物の整理、人夫の再整理。アタも1セル1ルビー10アンナとなった。ハイポータ2人新たに雇入れる。ジジイとタゴール。タゴールは30年前ハントについてビラフォン峠に行ったことがあるという。経歴は立派だが山では要領よく立ちまわって我々の期待には応えなかった。

6月9日、225人にふくれあがった人夫がビラフォン谷を登っていった。谷の両側は水で浸蝕された岩肌がてらと輝いている。このうちの一つでも日本にもってきたらたちまちハーケン^{アイ}の巣となるだろう針^キ峰がわれわれを見下してそびえていた。柳の木の下をきれいな水が流れる気持ちのいい所をすぎると今日の泊場ギャリ (Ghyari) だった。午前10時半に到着は早いようだが、自由な時間が多いのはたのしかった。午後は柳の木の下に赤いグランドシートをひいて野だてする。それが終わったら高村と五郎は赤いグランドシートで闘牛ごっこをやっている。高村のうしろからタイアンが頭からつかむ。谷が走る羊をおいかけている。

翌日、われわれははじめて氷河をふんだ。氷河のツング (Zunge) は柳、白楊、ジュニパの林で気持ちいい。鳥も多い。この氷河はバルトロのようにふみあとがしっかりしていなく、石がごろごろとして歩きづら

い。この日は大失敗をやってしまった。ハイポータに率いられたクーリーと、サーブ連が氷河の右と左のルート^{アイ}を別々にとって結局キャンプを別々に張らなくてはならぬようになってしまったことだ。クーリー達は左岸を通してナラム (Naram) へ直行し、サーブ達は右岸を通してナラムの100m程下の気持ちいいキャンプサイトでクーリーのくるのを待っていたのだ。タキがこちらにいるので一晩ぐらいはなんとかなる。しかしタイアンの雷がおちた。“AACK ともあろうものが、このザマは何だ……。お前達は隊行動を考えているのか。”一同スマセンとあやまる。

前小屋と五郎は風邪がこじれて熱があり、お説教がすむとすぐ六人用テントで横になった。このキャラバン中風邪がはやり、皆多かれ少なかれ風邪を引いた。ゴマでは私が熱を出したし、バシールも水バナを出している。一度も風邪を引かなかったのは、四手井、加藤、斉藤、それにキャプテンの4名だけだった。

ナラムをすぎるともう緑はない。氷河のまわりに立ち並ぶ峰々は鋭くたがって、そのカミソリのような薄い山稜はとうてい人をよせつけようとしな。事実これらの山々を見ているともうそれだけでたくさんで登ろうという気はなくなってしま。モレーンが右に曲っているあたりから私の心の中で次第に興奮が高まってくるのが感じられた。そしてとうとうピラフォン峠が見えた。あの真白い高い峠を5トン近くの荷が越さねばならないのだ。見ている限りでは困難な仕事である。クーリー達はもう雪めがねをくれと要求しだした。まだモレーンの上じゃないか。しかし一応全員に配ってやる。真中のモレーンから右側のモレーンに渡るときに雪が深くて人夫が大混乱をしている。9ミリの赤ザイル200mでフィックスして人夫を渡す。人夫たちはじゅくじゅくの雪の中をはだして渡った。雪が深くアリブランザ(Ali Brangsa)までは到底行けそうにない。時間的にも無理である。止むなくこのモレーンの上にB.C.を設けることにする。モレーンは狭く平地はないがウナギの寝床みたいに1列に並んでテントを張った。クーリー達は50人残して残りは解雇する。支払い金額が少なすぎたことからクーリー達は大きい怒りもう金はいらぬ、帰ってスカルドでP.A.に訴えるまでだ」と支払に当たったキャプテンにかみつかんばかり。そして人夫一同帰りはじめ、結局キャプテンが折れた。1日10ルビーという規定賃金で支払って彼等を帰したのは6時を過ぎていた。残ったのは50人のクーリーとハイポーター、サーブで約80人足らず。しかしせまいモレーン上の人口密度から言えば世男一だろう。クーリー達にはテント、グランジを貸し与える。こうしたゴタゴタのために夕食は8時すぎとなった。しかし、ともかく峠越えのベースキャンプはできあがった。あとは如何にうまく50人のクーリーと10人のハイポーターを使って荷をシアチェン(Siachén)氷河に運ぶかにある。この荷物のトランスポートは実にこのサルトロ・カンリ登頂の大きなヤマ場であった。気温はまだかなり低く、雪は深い。人夫たちは寒いとふるえている。

登頂の前後

高村 泰雄

第5キャンプ

頂上攻撃のためのアタック・キャンプをどの高さまで進めるか？アタックの方法は？アドヴァンス・ベースキャンプではサルトロの正面を遠くに眺めつつ

幾度も討論が繰り返された。日本を出発するまでに出していた結論は、できるだけ高くアタック・キャンプを進める。約7200mの肩のあたりがよかろう。そのためには、6500m付近にわれわれの第4キャンプができたとして、さらにもうひとつ7000m近くに第5キャンプをたて、その上で7200mにアタック・キャンプをということになる。文字どおりオーソドックスにポーラーメソッドを採用するならばこれが妥当な線だと考えられた。ところが、さてサルトロの正面を眼の前にしてみるとこれをもう一度考え直す必要がでて来たのだ。5500mのとりつきから6000mのプラトールに出るルートが思いがけず悪い。その上の斜面は雪崩が牙をむき出して獲物を待っている。そういうところを幾度も上下して、当初の計画どおり沢山のテントをあげてがっちり足場をかためつつポーラーメソッドを展開することが果して許されるかどうか。第3キャンプをプラトールに建設しても、高所人夫が辛うじて使えるのはそこまでだ。荷上げ能力にも限度がある。「第3キャンプから上のキャンプの数は極力少なくして、高所キャンプでの滞在人員、日数を最低限におさえよう。雪崩の危険も大きい。こんなところあたり前のポーラーメソッドを採ったのでは生命がいくつあっても足らぬ。この山はラッシュで登る山だ。それで試みて駄目ならばこの山は放棄だ。ラッシュ・タクティクスで突っ走らない限りこの山は登れないぞ！」加藤副隊長がいろいろ考えた末、全員にこう話した。たしかにその通りだと思う。しかし、若い隊員である私たちの胸中には何だか割り切れぬものが少し残された。私たちは、今度のサルトロは、できるだけ余裕をもって願わくば全員登頂をやりたいという風に考えていたのだ。その上、突撃戦法をとって再びハント(J. Hunt)の二の舞をしたくはないという気もあった。ハントがサルトロに挑んだとき、かれらの最前進キャンプは、高度6700m足らずの地点にあった。最初第7キャンプまでつくる予定だったが、頂上までの距離を誤算し、頂上はそこ第6キャンプから討てると考えたのだ。不幸にして高度計が狂っており、第6キャンプの高度を実際よりも300m高く7000mと誤解していたせいもある。悪化した天候のため登頂を断念し、ハントがガスの中にみえかくれる頂上を無念のまなざしで見つめながら引返した地点は実はようやくサルトロの肩をすぎた辺りだった。頂上まであと高度差200mばかりとかれらは報告しているが、実はもっと低いところまで達したにすぎなかったのではないか。たとえ頂上攻撃がラッシュ戦法の気持で行なわれるにしても、アタック・キャンプは7000m以上のところに欲しい。そのためには、基本的にやはりポーラーメソッドでがっちり荷上げしなくてはならぬのじゃないか。そういう疑問が湧く。ハントの隊のプラン・メーカ

一、ジェイムス・ウォラー(James Waller)も、当初は全員登頂を考えて7000m以上にキャンプを進めるつもりではあったのだが、天候悪化がすべてをふいにしてしまった。「充分な時間的余裕と好天候に恵まれればわれわれの次に来る者は必ず登頂に成功しよう。ただし、この山で7000m以下の地点から頂上攻撃するのは賢明でない。エベレストの経験が示したように、問題は高度差だけでなく、頂上までのたいへん長い水平距離だ。このことをよく考えておかねばならぬ。」ハントの報告はこう結ばれている。

ハント隊がこの山に挑んでから27年後の7月22日、われわれはサルトロの、高度まさに7000mの地点にアタック・キャンプを設営した。第5キャンプ。林登攀隊長はじめ多くの強力な仲間によってつながれたフィクスト・ラインの終着点。そして頂上への最後の出発点。そこまで押し上げられた齊藤・高村・バシールの胸の中はこれからはじまる大詰めの幕開きを前にして、責任とサポート隊に対する感謝の気持で一杯になる。6500mの第4キャンプから上の斜面はいぜんとして雪が深かった。かたちはポーラーメソッドのようではあるがとにかく第5キャンプを一日のうちに出来るだけ高いところまで押し上げようと、重荷を負ったサポート隊の苦闘は午後4時までつづいた。すでにラッシュ・タクティクスがくりひろげられていたといってもいいようにおもう。肩につづく広大な斜面の一角、ほんとうに猫のひたいのような一寸した平坦な地が氷塔のかけにある。あたりは乳色のガスでおおわれ、視界は悪く、この広大な斜面の上部がはたしてどんな具合にひらけているのかよくわからない。もう時間も遅い。林登攀隊長以下サポートのため頑張ってくれた谷、上尾も疲れている。いっそのことここに全員、少し無理してでも泊って、サポートをさらにつづけようかという意見がちょっぴりとび出した。しかし、ツェルトの準備もあるとはいえ、テントはもともと2人用だ。食糧も乏しい。もし悪天候にでもなったら共倒れは必定。われわれを心配してくれる好意はありがたいが、やっぱり方針どおり3人だけでやってみよう。林さんが別れぎわにわれわれにとって貴重なはなむけの言葉を残して呉れた。「大切なアタックの日に寝坊するなよ！」。握手を交し、ひとりひとりと静かにガスの中に沈んでゆく。重いサポートの荷を肩からおろしたとはいうものの、登攀隊長としての気苦労がその肩にどっかとのっかっているようにみえる林さん。谷、上尾は高度とともに食欲が増し7000mのラッセルも日本の冬山のラッセルと同じ調子でやってのけた連中だ。うす汚なく陽が射したかれらの顔が笑っている。「まあ高村、できるだけやれよ。あかんかったら僕らがすぐ応援に行ってやるからなあ。」

かれらがまだ完全に視界を去らぬうちにテントは張り終えた。その頃、私は突然、胸にむかつきを覚え、雪の上に茶色っぽい液体を少し吐き出してしまった。かくさずに言えば、サポート隊がすでに相当遠のいていたことを私はありがたいと思った。すぐにテントに入り、夕食の準備にゆっくり時間をかける。リプトンのトマトスープにサラダ油、肉、野菜を入れ、別にアルファ米を煮る。ストーブは、フランス製のキャンピング・ガス(Camping Gaz)。その夜の日記には、「かんたんなオカネを作り、喰う。食欲普通」とある。エアーマットを2つ並べて敷くとテントは一杯になった。その上に羽毛服を着て羽毛ボボンをはき3人並んで横になり、たった一枚のシュラフザックを拡げてかけた。眼覚し時計は2時に合わせる。いよいよ登頂前夜だ。Yさんといろいろ話したい気もするが、バシールの奴が飯を喰ったらもう用はないとばかり眠ってしまったので、少しでも暖かいうちに眠ることにした。バシールは暇さえあれば眠っている。これはひとつには日本人ばかりのうちにかれバキスタン人が1人という環境のせいもあるだろう。しかし、だいたいキャラバン中からそうだった。われわれにとって、たださえ面倒くさい英語を高い山の上で頭を痛めながらしゃべるのは決してありがたいことではない。かれにしたところで、われわれとまだるっこしい、舌足らずの会話をするのは面白くないだろう。飯を喰ったり道を歩いているあいだに交わす言葉は単純でお互いに疲れない。そういう際に意志の疎通がもし少々欠けたとしても、大したことでもあるまい。たとえば、食事のときに味の素と塩とを間違えて手渡してやるくらいのものだ。ところが食事のあとでゆっくりと交わす会話はそうはゆかない。われわれ同志の何気ない会話にしたところで、これをかれに伝えようとすると言葉を探すのにひと苦労、それを待つかれもまたひと苦労するにちがいない。平地でならともかく、ここ酸素の稀薄な上空では、かれのとった策はまことに賢明であったといえよう。ただし、かれがはつきり意識してそうしていたのかどうか疑わしい節もある。なぜなら、後日、アタックを終っての帰途、とすれば雪面に尻をつけたくなるのを我慢して歩いている私に、かれはうしろからそっと声をかけたものだ。それも英語とウルドゥ語のちゃんぽんで。「ワイズマン、アラーム・ガロ(賢者は休養をとるもんだよ。)」

いろいろ考え討議されていた第5キャンプも7000mの地に根をおろした。あとはとにかくここから突っ走ることだ。しかしどうもまだ頂上までの距離、立体的に組み込まれた距離がどうもピンと来ない。もうひとつキャンプが要りはしないか？ここから上は技術的困難よりも、むしろ単調で長い雪の道だろう。われわれ3人はとにかくまあやってみると、ここにほうり出

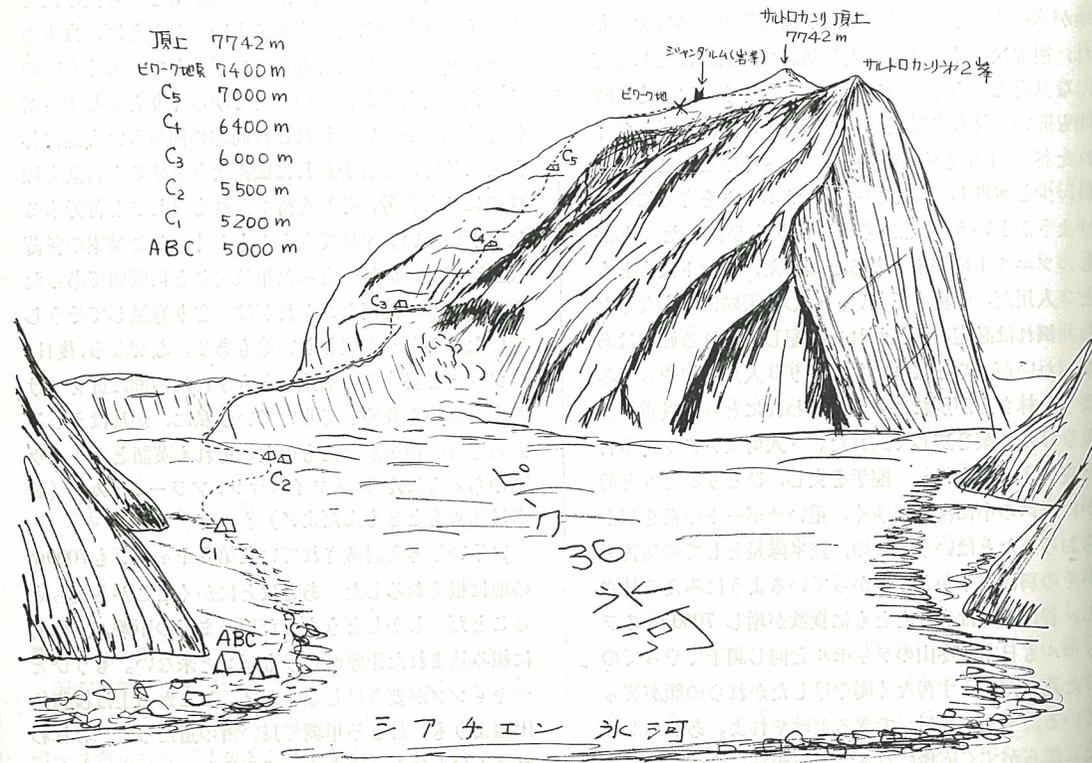
された前走者だ。平井・岩坪という 7000m 以上でのギャランティーをもった男たちも控えている。谷・上尾はもとより林さんも上向きの意欲にうずうずしている人たちだ。けれどもできればわれわれ3人で頂上まで突き上げたい。頂上にでかけるときは単なる非常用としてだけでなく、予想されるビバークのためツェルトそのほかの装備・食糧を持つべきだろう。しかし、正直いって出発前にはビバークということこそそれほど切実に考えていたわけではなかった。いつもの日と同じように第5キャンプの夜は静かにすぎわれわれは深い眠りについた。

第5キャンプをあとに

全く同じ傾斜でつづいているようにみえた第5キャンプから上の斜面も足を踏み入れてみると、わずかながら緩急があった。第5キャンプからかぞえてふたつめのやや緩い斜面にさしかかったとき、深かった雪が消えて、シュカブラとなった。午前10時。テントをあとにしてから5時間半は歩いた。高度は200mもかせいでいたであろうか。眼覚し時計の世話にもならず1時半頃起き出して、例によって雑炊で腹をつくり、ツェルトとキャンピング・ガスそれに極く僅かの非常食をサブザックにつめ、いちどは4時前に出発した。しかし、雪が深いので、アイゼンの上にワカンをつけ、快晴のあけがたの空を仰ぎつつ今度は本当にテントをあとにしたのはすでに4時を少しすぎていた。全員コンディションは良好。乾燥粉雪にずいぶん悩ま

れ、ラッセルを交互にくりかえしながらただひとすじに登って来た。ワカンを脱ぎ捨てもう背負ってゆく気がしないので雪面におく。アイゼンだけで再び登攀をはじめたところ、またしても突然胸にむかつきを覚えた。前をゆくパシールに合図を送ると同時に私は雪面に手をついて吐いていた。あわててザックを外そうとしたら、運悪く、これがすると手から離れて雪の上を転がり落ちて行ってしまった。さいわい、ここは斜面の下がスリパチの底のようにゆるく、カールボーデンのようになっていたので、ザックはとまった。へばっているつもりはなかったけれども、また立上ってザックを追う勇気もなかった。Yさんが私の様子を見て黙ってひとりザイルをはなれ、ゆっくりもと来たルートでザックの方へ下ってゆく。高度差は50mくらいかもしれぬが距離は長い。Yさんには済まない気持ちでいっぱいだ。ビバークに必要なものも入っている。帰りに拾うというわけにもゆくまい。平地に近いところならばなんでもない管の自分とザックのあいだの距離が実に遠く思われた。Yさんは全く元気だ。しかしこんなところでつまらぬ消耗をするのは決して愉快ではあるまい。私としたところでここで、Yさんの好意に甘えているのは何とも情ない気持ちであった。これではまるでスキー場でスキーの片方を流し、ボーイフレンドに拾って来てもらうのを待っている女の子みたいなものだ。しかし、私の気持は女の子のようにしあわせではなかった。私はチョゴリザのときも6000mの第

- 頂上 7742 m
- ピナクル 7400 m
- C₅ 7000 m
- C₄ 6400 m
- C₃ 6000 m
- C₂ 5500 m
- C₁ 5200 m
- ABC 5000 m



4キャンプでひっくりかえっている。あのときは腹具合がおかしくて、その上いささか生ガスを吸って、意識モローとしてしまったものだ。あれ以来、私は自分の高度に対する適応性に疑問を抱くようになった。他人が何と慰めてくれようと、私は高度に負かされたという印象はぬぐえなかった。と同時に、若し許されるならば、もういちど高度に挑んでみたいという大それた気持も、もちづけて来た。ところが今、私はここで完全に負かされているのではない。サルトロにやって来てからは6000m近くで一度頭痛を覚えた。6500mの第4キャンプでは、食欲が必ずしも充分ではなかった。無理をして飯のお代りをし、それを食べ切ることができなかった上、隣のテントにとんで帰り、ふうっと吐息をついたのを誰かは気付いていたにちがいない。私はアタック隊に入ることを辞退すべきだったろうか？ 自分の力を知って、いさぎよく能力の範囲内にとどまるべきだったろうか？ 強力メンバーがうんとこさ控えているこの隊ではへばりながら頂上にむかう奴が許されるはずはない。だが、私は頂上に行って来ますと出かけて来た。日本を離れる前の精密検査でも別段どこにも異常はないとの診断をえている。昨日、今日と嘔吐はしているが、他に自分で気のつくような故障はでていない。現に今こうして吐いてしまうと、あとはもうさっぱりしている。吐くときの苦しさでうっすらとにじみ出た涙をどうしてみるシアチエンの山々はいつもと変らぬ感動を私に呼びますし、眼の前の斜面を登り切ればサルトロの頂上が見えるのではないかという期待に心臓もちゃんと高鳴る。そう、これはひとつの保障作用だ。吐かなければもっと悪い状態になったかもしれないが吐いたためにちゃんと気分もよくなったではないか。私のひげづらのボーイ・フレンドが拾ったサブザックを肩に、もうすぐそこまで帰って来てくれた。「大丈夫か」と心配顔のYさんの問いに、私は「大丈夫です。」と答える。ウエファースを二・三枚食べ終ると、パシールが「サイコウ」とYさんの真似をした。ザックを落してからすでに30分が経過していた。

午前11時。頂上稜線上のピナクルがみえはじめた。それはまさに「かにはさみ」のようなかたちで突立つ黒い岩峰であった。ハントのいうジャンダルムである。最初はそのはさみの先端がちょっぴりみえ、登るにつれて少しずつ基部の方がみえはじめた。小さな岩だと思っていたのにこれは馬鹿でかいピナクルだ。その上、全貌がみえてからは仲々大きくなって来ないところをみると距離もだいぶんはなれていることがわかる。頂上の左肩のドームはいつのまにか左側をトラバース気味に登ってすでに通りすぎている。左下へと流れる斜面はすでにリカ(Likha)氷河の上部斜面だ。雪がまた軟らかくなった。もぐりは始める。サル

トロの頂上がみえる。頂上からこちら側にのびる南東稜も今は全ぼうをあらわした。どうしてどうして頂上まではまだまだだ。午後1時。雪はますます深くなり、ピッチは遅くなる。しまった、ワカンジキをどうして捨てて来たのだ。だが、われわれの歩行は一步進むのに数度呼吸をしてというほどひどい状態ではない。歩いている本人は、これでも休みなく歩いているつもりなのだ。雪はとうとうヒザを没するようになった。その上、南東稜末端へとつづく肩の雪原に入ったとみえ、傾斜はゆるく高度は全くかせげない。もう何時間も会話らしい会話はしていないように思う。ただ一步一步ザイルにつながれて歩いているだけだ。ひと息入れたあとにしたところで、人間さまが歩き出すより前に、ザイルがさきにおみこしを上げてわれわれをひきずってゆくようなものだ。この不思議なロープのとりもつ縁で3人の男たちは一緒にピナクルの基部まであと1kmくらいというところまでやって来た。はじめてふとわれにかえる。そういうことがなかったら、われわれはいつまでも腰を没するふかふかの雪の中をあと何時間も歩きつづけていたかもしれない。Yさんと言葉を交すが、お互いになんのためらいもなくビバークという言葉を出す。高度は約7400mか。ハントの引返し点は過ぎたようだ。それにしても朝から10時間近くかかって高度400mを登っただけか。普通なら1時間余りで登れる高度差だ。いらだたしさは感じない。われわれは高度差ただか400mを登っただけだが、その間、絶対高度の高さを充分満喫しつつ一分ずつを噛みしめて来た。右手にみえる頂上南東稜のつらなりと真正面のジャンダルムのあいだは大きく切れている。頂稜の末端部は赤茶けた岩で、そのガリーには氷がはりつめてみるとみえ青光りしている。これがルートになるだろうか。それとも頂上南東稜線の手前側に広がっている高所雪原をラッセルし、頂上に真正面からとりつか。いずれにしても今日は無理だ。このピッチでは、またこの雪の深さと頂上までの距離ではわれわれが今日、陽のあるうちに頂上に到着できる見込みは到底ない。執念深くラッセルをしようと立ち上ったパシールも10mばかり雪と格闘したもののあきらめて引き返して来た。しかし、あと3時間もあれば頂上だとかれが言う。私たちはいう。「ノー。モア・ザン・ファイブ・アワーズ。」

ビバークの夜

ビバークの夜のことを順を追ってたどってみても所詮は退屈なことだ。しかし、ビバークの夜というのは不思議なことが起る。普通私たちは眠ることを退屈と考えない。しかし、ビバークの夜だけは退屈しながら眠っている。つまるところ、一刻もはやく夜が明けてほしいという気持ちが、幾度めざめてのぞいてみてみてもいこうに動こうとしない時計の針をみては失望し、退

屈を感じるということになるのか。比較的気温は高かったとはいえ、ろくすっぽ整地もしない雪の中にツェルトをかむって、エアマットもなく坐りこんでいる身体には寒気が込みこんで来る。上体よりも下肢が寒い。羽毛服を着ているかぎり余りつくはないけれども、靴をとおして来る寒気がたまらない。Yさんとバシールは靴のまま、またオーバーシューズをつけたまま。私は靴を脱いでオーバーシューズを下に敷いて足をその上にのせている。これは賢明な策ではなかった。せまいツェルト・ザックの中に大男のバシールが身体を「く」の字にして横たわる。Yさんと私は坐っていることに耐えられるが、かれには生活様式のちがいがからかこれはかなわないらしい。勿論、私たちもときおり身体を横たえてみたり、坐りなおしてみたり、とにかく安定した楽な姿勢を求めて3人3様にしばしばゴソゴソと動き廻っている。眼がさめるたびに3人の相対的位置が変わっているのに気がつく。とうとうビバークをやったか。しかし、登頂前のビバークはどうだろう。さいわい決定がはやかったのでまだ陽のあるうちに夕方までの約3時間、ぐっすり眠り込んだので身体の状態は全員快調のようだ。7400mの高さでは体力の回復というものは余り期待できないだろうけれども、呼吸がこんなに楽であるところをみると決して疲労の一途をたどるということもあるまい。かりにこのビバーク地の近くまでアタック・キャンプをもち上げた場合を考えてみると、それは隊員全体に一律に激しい疲労を要求するだろう。高所人夫を一人も使えない今、あるていど余力を蓄えつつ頂上を討つ方法はやはりこのビバーク方式以外にはなかったのではないか。私はそう考える。勿論時間をかけ、時おり5500mの第2キャンプあたりまで休養に下りつつ計画を進めることができるならば話は別だ。だが今のところみごとな3~4日周期で繰り返されている好天候と悪天候の循環もいつまでつづくものかわからない。幾度もキャンプ間を上下するうちには条件の悪いときに危険な地域を通らねばならぬ機会も増えよう。オーソドックスなポーラー・メソッドを捨てたのもそういう危険を最小限にするためだ。とするとこのビバークはサルトロを討つために取られた基本方針の上にちゃんと乗っかっているとはいえないか。

第5キャンプの夜とちがって頂上を眼の前にしているだけに、ビバークの夜は頂上のことが頭の中にしじゅう浮かんだ。いよいよ明日には、と期待と不安が入り混じる。この登頂隊を送り出してくれた下のキャンプの人達が心配してくれているにちがいない。だがトランシーバーによる交信には成功しなかった。到達距離からすると、交信できる可能性はある。それは明日試みってみることにしよう。出来れば頂上から。一日くらい連絡がないとしてもそこは一応われわれを

信頼してもらいより仕方あるまい。隊員のだれかれの顔が眼の前に浮かぶ。多分第4キャンプで頑張っている平井、チョゴリザで驚異的な馬力を発揮したかれが来ていてもやはりここでビバークしていたらどうか。ノジャクをつわもの岩坪のやりかただったら、やはりここでビバークしたのではないか。それにしても3人だけで、少々寒いけれども頂上のすぐ近くでこうしてのうとうと眠っておれるというのはしあわせな奴等だと思ふ。けれども、かりにわれわれが明日頂上に到達できたとすれば、他の連中は頂上だけでは満足できず、サルトロ第Ⅱ峰への縦走をやるなんて言い出さないと限らない。いずれにしろ第2登頂はおろか第3登頂までメンバーは豊富だ。とにかく一足お先ぎにゆくことを許してもらおう。不思議に頂上には間違いなく登れるという気持が強い。ヘドを吐いた私にしてもそうなのだから、Yさん、バシールも勿論そう思ったにちがいない。バシールにつれづれなるままにきいてみる。「頂上に登ったら次はどこに転進したい?」「とんでもない。僕はもうひどいホームシックにかかっている。一目散に帰途につくよ。」欲がないのか本当にホームシックがひどいのか。われわれは日本からはるばる出かけて来た。来るだけに何ヶ月もかけているし、計画の当初から起算すればもう何年もということになる。そしてとうとう念願になってインダスの源流地に来て来て、できるだけ広く歩き、新しい未知の土地を探りたい気持でどん欲に眼を光らせている。ところがバシールの場合はどうやらそういうことではないらしい。自分の国の北辺地域に来て来たのは山登りという本来の自分の生活とは無縁のゲームを楽しむにきているということにでもなるのだろうか。われわれは、自分たちの生活の中で、日頃、もっとも好ましいと望みつつかちの生活を求めてここまでやって来ている。その生活を手の中に収めた今、これをどうしてむざむざと簡単に手離せるものか。私はそれ以上バシールと山のことを話すのは止した。「僕の家にはすばらしいリンゴの樹がある。緑に囲まれた僕の家の楽しい生活が恋しいよ。」バシールのはなしには、それでもふとひかれる。眠ってはめざめ、時計を眺めてはうんざり、これを幾度繰り返したのか。時計をもたないバシールがうるさいほど時間を聞く。Yさんにしきりにタバコをくれと頼む。かれが最も多くタバコを吸った。高度に強いということになるか。マッチの火つきが悪いのは高度のせいだけではなくて、ツェルトの中が湿っばいからでもあろう。硫黄の強いにおいがせまいツェルトの中らかなか消えない。フカフカの雪をすくいとって、ガスに火をつけ、薄いコンデンスミルクを飲む。夜の食事にはカンパンを少しかじり、主としてウエファースを食べた。これは実によくのどを通る。私のみた限り、3人とも積極的な食

欲はないが来るものは拒まないというところか。靴をはいのままの足が冷えると思え、Yさんとバシールはしきりと足をとんとん踏んでいる。私は靴下だけになっているので足をこすり合わせて暖をとる。だがこれはいっこうに効果がない。その上、靴下に少し雪がついたりするので、しめっぽくて具合が悪い。しかし、今更冷えきった靴をはくのは却って逆効果になるのではないか。行動直前まではそのままにしていることにした。アタックを目前にして、なにか気のきいた話か、愉快な話でもと思うけれど、つまるところは半睡半醒のビバーク。口をきくのが面倒で、つい黙りこくったまま座っている。バシールが退屈まぎれに二度目のミルクを湧かしているのをうとうとしながら知っていたが、私はまた眠りにおちて出来上ったミルクを飲む意欲を失っていた。「サーブ。ボクシーン(旦那、チップを)。」バシールが人夫たちの真似をしてYさんにタバコをせびっている。面倒くさがらずにそのたびにタバコを差し出してやるYさん。パキスタンの賢青年を含むこの3人のメンバーシップは、もう殆んど日本人同志の場合とかわらぬくらい完璧だ。それにしても余り経験がないに拘らず、さしたる不安顔もせずにビバークにつきあっているバシールという奴はこれは大したものだと思う。第2キャンプでカラコラム・クラブ側の要請により日バ合同という大義名分の上からだれかひとりにはパキスタンメンバーを頂上へということになったとき、四手井隊長はもとより加藤さんは強硬に反対したものだ。若手隊員の中でも勿論反対があった。パキスタン人だからということだけで、お荷物になるのがわかっていながら登頂隊に加えるというのはけしからん。そんなことで頂上が討てるものか。だいたい少しは山を歩いているベグ(Beg)教授まで、合同遠征だ、それにふさわしくぜひパキスタン隊員も頂上へと強く懇望するとは、山のことを知らなさすぎる。とにかく国籍のいかに問わず、上に登れる奴だけが上に行くのだから、今からパキスタンメンバーを必ず頂上に連れてゆくという約束はできない。われわれとしては、若し能力があるとわかれば勿論、喜んでパキスタン側メンバーにも頂上を踏んでもらうつもりだというのが結論となっていた。そしてさいわい、バシールが選ばれることになったわけである。日本側全隊員とフランクにつき合っていたバシールが、結局憎めない、いい男だったことと、体力的にすぐれ、また技術的にも飲み込みが割合はやく、使いものになるという希望がみえたので、最終的には第4キャンプで林登攀隊長が、かれを登頂隊員に入れることを決定したのである。それをきいたときのかれの嬉しさをおし殺した神妙な顔は忘れられない。バシールを登頂隊に入れたことは、林登攀隊長の英断であったと私は称賛したい。と同時に、かれを一応登らせてみようとした隊全

体のゆとりというものに改めて思い至る気がする。自画自賛、八百長めいた言い方だとけなす人は、つまるところカラコラム 7000m級の山というのは素人でも登れるところなんだと皮肉をいうかもしれぬ。ところがそうではない。たしかにチョゴリザに於ても、全く山の素人だった今川、潮田両氏が、加藤さんのリードを得てコンダス・ピーク(Kondus peak)の初登をやっている。けれどもかりにバシールが10人いたとしても、かれらだけではやはりサルトロは絶対陥ちなかったということはここであらためていう必要もあるまい。それはさておき、とにかくバシールという男は、パキスタン人として、さらに回教徒としては全くめずらしく柔軟性に富んでいたことが強く印象に残っている。われわれのつきあった彼国の連中のなかで、かれのような青年は極くまれのようにおもう。せまい交友範囲の中で、そういう友を得ることができたということはしあわせであった。やがてかれらの力がわれわれの眼からみて何事につけても停滞的だと思われるパキスタンの未来を変革するエネルギーとして作用する日が来ることを他人事ながら祈らずにはおれぬ。間違っても、あの太っちょの、酒も飲まず、口を開けばすぐお説教めいた物言いをする退屈この上ないパキスタンの旦那衆にはなってくれるな。

真夜中をすぎ寒気はきびしくなった。Yさんが、衣類が凍って尻のところべったり喰つくような感じだという。身体を動かすとたしかにそんな感じだ。夕方頃に少し出していた風も今は収まり、あたりは全く静かで、さいわい晴れている。休養は充分ではないがとにかく疲れも少しはとれた。頭が冴えて来るとこんな星明かり雪明かりの中で無理をしてじっと座っているのが馬鹿らしい気がして来た。午前1時すぎ、そろそろ歩き始めようかとYさんがいう。またしても異存はない。ウエファースとカンパンだけで、水は殆んどとらない食事。思い切りよく、ツェルトをはぐり、アイゼンはつけないで明け方にはまだ少し間のある夜の中へおどり出る。午前2時半。粉雪は腰を没する。バシールが一寸不服そうにいう。「あの快適なツェルトの中からぼくたちはどうして慌てて飛び出してしまったんだろう。」

頂上に立つ

夜明けの薄光が雪原をほのかに照らしはじめる。われわれは頂上南東稜線と殆んど平行に頂上直下の大雪原を西に向って泳ぐように進んでいた。今朝になってみるともうわれわれはルートの撰択について相談する必要さえなかった。南東稜末端の氷のへばりついたガリーを登り、稜線に出てから三つほどピークを越えて頂上に向かうより、少し雪がもぐったとしても稜線に抱かれたように広がる大雪原を横切り、頂上直下に達してから雪のルンゼを突き上げて、直接頂上に出よ

う。Yさんが相変わらず力強いラッセルを精力的につづける。バシールは細長い足をすり合わせるようにしてやはり黙々とラッセルをする。みんな代るがわるラッセルを続けるが、歩数を数えてみると50歩から100歩でひと息入れたくなっている。1歩1歩はもちろんひじょうにゆっくり踏み出す。殆んど無言のまま。何だか自分がラッセルをしている時間が短くて、しかも能率が悪く、Yさんがラッセルするときが一番長くて、かつ距離もよく伸びているという気がしてならない。日本の冬山のラッセルに比べてとくにつらいとも思わないのだが、ピッチがなかなかあがらないのをみているとやはりだいがへばっているのだなと気がつく。頂上直下にはり出したこの雪原は東西に約3キロ、南北に約1キロはあろうとおもわれた。雪原の北の端はサルトロ正面岩壁上で雪の断がいになって終る。そぎ落としたような二千メートルの大岩壁の上にこんなに広大なスノーレックがあるとは。腰まで雪に埋まりながら前方を眺めるとサルトロの純白の頂ぎがまるで果てない平原のはるか彼方にあるようにみえる。その実、頂ぎの直下まではもう1キロとははなれていないのだが、はたしてあそこまで行けるだろうか。と一寸気が遠くなりそうなおもいをする。プールがひとりたどったナンガバルバット頂上への遠い道のことを思い出す。「歩いていけばいつかは着くよ。」Yさんがいう。たとえ何時間かかろうと、それがどんなに退屈な行程であろうとわれわれはひるまない。けれどももう少し変化があってくれたって良さそうなのだ。ビバーク地を出てからすでに5時間ばかり歩いた。だが深雪のラッセルと高度のため距離は2キロほどしか進んでいない。殆んど傾斜のなかった雪面も頂上直下に近づくにつれ、次第に勾配をつよめて来た。さいわい雪は浅くなった。完全に晴れ渡った空の中に東にはK₁₂の山容が青光りしてみえている。そしてそれをとりまく氷河群、いわゆるK₁₂の内院と呼ばれる雪原もはっきり指摘できる。しばしば休憩しつつ、澄み切った大気の中で深く呼吸をする。のどは余り渴かない。タバコも余り吸いたくない。腹は減っているのかどうかももうひとつわからぬ。しかし、この7600mの雪原のただ中をまるで漂うように歩いていることに身体は完全に適応しているようだ。K₁₂の北西方、アプサラサス(Apsarasas)、テラムカンリ(Teram Kangri)の山群もすでにわれわれの眼の高さより低いところにその連なりをみせている。傾斜のきついテラムシェール氷河が太く白いひとつの線になってそれら山群の前を横切って強いアクセントをつけたのち、まるで空に吸いこまれるかとおもうくらいのところまでつづいている。その向こうは中共領チャンタンの辺りだという。ああ、われわれは今アジア大陸の屋根を登っているのだという感激がこみ上げる。雲海はわれわれの高

さより低いところで安定している。ふと、チョゴリザで、藤平・平井の登頂隊がガスの切れ間を見えかくれしながら頂上に一寸刻みで近づいてゆくのを下から眺めていたときのことが脳裏をかすめる。ちっぽけな2つの人影がべらぼうに大きい巨人のような白い壁にあくまで喰っついてはなれないようにみえたあの光景。そこに何か人間の尊厳といったものをみる気がしたのを覚えている。なかだるみなく連続していた巨大な雪壁をかれらは營々と登りつめていた。時折湧き立ってはかれらをかくすガスの流れの早さはかれらが風の中にいることを示していたし、一寸刻みに高みえと歩むかれらのピッチは、雪が深く、傾斜が強いこと、さらには多分酸素も切れてしまったらしいことを示していた。しかしかれらはたった二人で風と岩と雪と氷の世界を切り開いて登っていたのだ。私はときおり考えたものだ。チョゴリザの本当に未知な部分がかれら二人にしかわかっていないのだ、と。そしてかれらが感じたであろう心の高まりを私はいろいろと想像してみたものである。ところが頂上への最後の内濠を無事渡り終えて、頂上稜線につき上げる氷の斜面のとりつきに達した今、われわれの心は案外平静だ。忍耐を要しはしたが、闘争というにはいささか単調な雪原上の歩みがそうしたのかもしれぬ。稜線までは高度差100mばかり。稜線に出しまえばあとは屋根づたいに高度差30~40mも登れば、そこが頂上だ。

午前九時。大休止をとって、アイゼンを着ける。いよいよかんじんのところにさしかかるのに万が一のことがあってはと腹ごしらえとビタミンの補給をするため兵糧丸を噛む。「メデイシン、メデイシン、アンドメデイシン。」日本人はくすりかむやみに好きなのだ。バシールが笑っている。気温は高くなり、バシールは羽毛服の上に着ていたヤッケをすでに脱いでいた。ハイゼックスの水筒から茶を少し飲む。手をすべらせて水筒の栓がころころともものうい転がり方をして斜面を落ちて行った。さあ、いよいよ頂上はこちらのものと立ち上がる。肩にするサブザックはいずれも3~4キロでいどで苦にならない。酸素ボンベなどという荷やっかいなものをもって来なかったことはさいわいだ。見上げる斜面はところどころ氷が光っていて、傾斜は30度ばかり。バシールを中にして、私が先行する。雪面にがちり喰い込むアイゼンが快くよい。頂上稜線部分はこちら側すなわち稜線の北側に巨大な雪庇をはり出している。だがわれわれの登る頂上部分はさいわい雪庇が出ていない。一步一步、コンティニアスのまま近づき、稜線にとび出すところだけワン・アト・ア・タイムで乗り切る。稜線だ。南側の光景が眼下にひろがる。コンダス溪谷が南に屈曲しながら流れている。サルトロを眺めるため昨夏、ひとり訪ずれたこの谷。緑のオアシス、村落らしいものがみえる。コルコ

ンダス(Khorkondus)の村か。リカ(Likah)氷河の偵察を終え村はずれの熱い温泉で疲れをいやしながらシェルピ(Sherpi)氷河の景観を楽しんだときのことを思い出す。われわれは今、コンダス側からみえたサルトロ・カンリのあの赤茶けた、3000mを一気になぎ落ちて大岩壁の上につ立っているのだ。感激よりも、嬉しさの余り、何か夢をみているのではないかというような気がする。稜線上に3人が並んで立った。頂上に向かおう。頂上は眼の前にある小さな雪のドームをひとつ越せばよいはずだ。雪が堅くしまっている。ゆっくりアイゼンをきかせつつ最後の登りにかかった。微風、地平線はいずれも雲で飾られてはいるが、まったくおだやかな天候であった。ドームの頂上に着いた。その上は平坦ですぐ眼と鼻の先に本当の頂上らしいのが乗っかっていることがわかった。Yさんが私に声をかける。「頂上はバシールに先に踏ませてやろうな。」正直のところ、私は頂上に立つ順番ということをして重要視するつもりはなかった。けれども同じことなら、国そのものも、山登り若しくは探検もようやく興期にあるパキスタンで、その国の一人の青年が未踏峰の頂ぎにまず立ったということが少しでも意味をもちうるとすれば……。Yさんの言葉に何のためらいもなく賛成したとき、私の心の中には七面倒な理くつではなくて、さしたる経験があるわけでもないのに、われわれとよく行動を共にしておせて7742mに至った1人のパキスタン青年に、「花」をもたせてやりたいという気持があった。

いよいよ頂上にさしかかった。ところが、右側、サルトロ正面岩壁側に張り出した雪庇を恐れて稜線のやや左よりに歩いて来た私の眼の前に、はたして雪庇なのか頂上なのか見当のつかない高さ2mばかりの突起があらわれた。突起の向こう側がみえないため、これがはたして頂上かどうか一寸見当がつかない「Yさん、ちょっと確かめてみてからにしますよ。」と突起の左をトラバースし、約5mばかり進んでみる。そこで私は、この屋根が足元からサルトロ・カンリ第II峰とのコルに向かって、一挙に切れ落ちているのを見た。すぐさま戻って、Yさんに伝える。「これが間違いなく頂上です。」Yさんはバシールに手渡すために、ピッケルにパキスタンの国旗、日の丸の旗、そしてわが学生山岳会旗をとりつける。準備はできた。「バシール、この山はきみの国の山だ。きみがまず頂上に立ちたまえ。この旗をもって。」バシールは答えた。「それはちがう。君たちのおかげで、はじめてここまで来たのだ。ドクター・斎藤、あなたこそ先に頂上に立ってその旗を私に渡して下さい。」私は、かれの敏速な返答にいささか驚いた。かれも、今までの初登頂のいろんな物語を少しは知っているのかもしれぬ。それにしても、かれがまず頂上に立つことを辞退するのは、や

はりはじめて頂上を踏むことの意義をかれなりに考えているということだ。しかし、Yさんは旗のついたピッケルを静かに手渡した。かれは素直に受けとり、これを捧げもつようにして、8ミリのシネを構えた私の前を通り頂ぎの突起に近づいてピッケルを立てた。シネのファインダーを透してみるかれの顔は厳粛であった。微風にはためく旗を振り終え、静かに左の方へカメラをパンしてゆくとガッシャブルム山群、ブロード・ピーク、そしてK₂が次々と視界にとび込んで来る。まさに息づまるおもいだ。大きな吐息とともに私はシャッターから手をはなし時計をみる。10時45分。ついにわれわれはサルトロ・カンリの頂上に立った。Yさんがゆっくり近づく。特徴のある濃いひげ面が静かに笑っている。しばし無言。そのうちふと思い出して手袋をはめたままの手をさし出す。「握手を忘れていたなあ。」われわれはしっかりと手を握り合った。西の方の雲海の中にひととき高く、白い梯形の姿をみせているのはチョゴリザだ。1958年あの山を訪ずれた仲間のうち4人までが、またサルトロにやって来ている。チョゴリザとサルトロを結ぶ線は地理的にはこんなにも短かいのに、実際は迂余曲折、いつ果てるとも知れない長いみちのりであった。眼の前にチョゴリザの姿を眺めていると彼我をつなぐ見えない糸をたどることに山岳会をあげて専念して来た年月がまさに今、終りを告げるのだという淋しい思いすら湧いて来る。この糸を私たちはこれからどこにつなごうとするのか。一種虚脱状態の頭の中を、ここから先はもう一歩も登るところがないのだという思いが通り過ぎる。満足と不満がとなり合ってやって来ることを私は実感した。頂上は東西に細長く、約3mばかり。南側は傾斜ゆるく、われわれはそこに立っているが5mほど先で切れおちて、コンダス側の大岩壁となる。北側は雪庇状をなしている。クラストした雪におおわれ、周囲に岩は見あたらない。

バシールは無言である。われわれはカメラをかまえて手当り次第に周囲の情景を写しとる。眼下に拡がりつづくPK 36氷河は、短い、上流に広大なスノー・フィールドをもつ。幅広く、白一色で巨大な滑走路のようにシアチェン氷河へと流れ下っている。その合流点にはわれわれのアドヴァンス・ベースキャンプがあるはずだが遠すぎて、どのあたりか見当もつかぬ。サルトロの取りつきにある第2キャンプも、そのほかのキャンプもひとつとしてここからはみえない。地形の関係から、頂上にいる3人の姿は下の人たちにはみえていないだろうとおもう。すこし雲は多くなった。しかしいづれも低くたぐい、8000mのジャイアントたちはもとより7000m以上の山々もすべて雲の上に頭をつき出している。K₂、ブロード・ピーク(Broad Peak)、ガッシャブルム(Gasherbrum)とつ

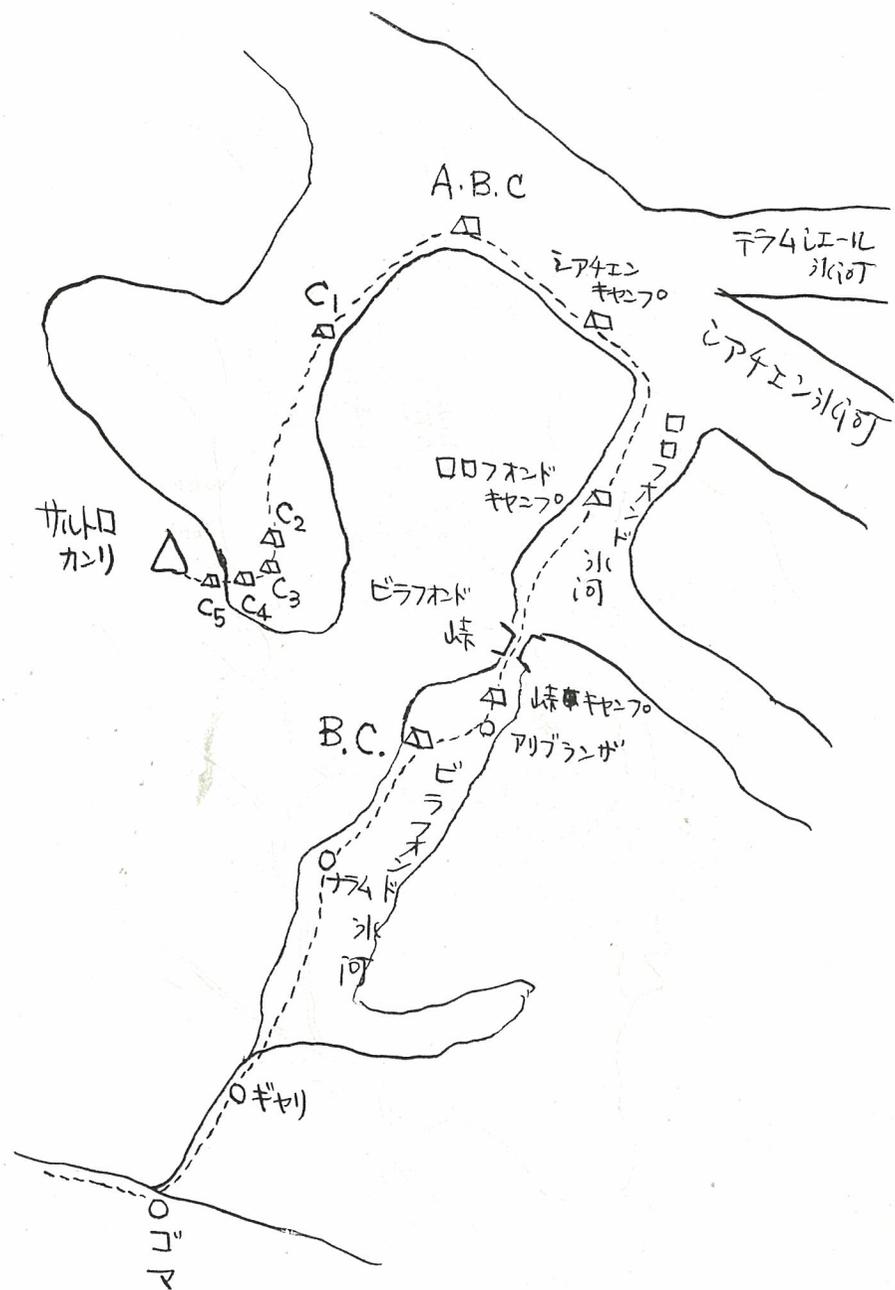
づく山塊はひときわ高く抜き出ているし、遠くのマッシュブルムはまるで純白の入道雲だ。チョゴリザはドーム裏のスノー・レークをはじめ、その東面が手にとるようにみえている。未踏であるがゆえに興味をひくのは K₁₂ だ。7400 m ながしにしては、実に大きな山容。西に張り出した山稜は岩もありそうだが7000 m まではさして困難もあるまい。それから上、少し壁のように見える氷の部分が気がかりで、そこを突破するのがこの山の鍵のようだ。そして、なによりも魅力的なのは、この山がいずれの側も外壁をなす尾根にとりかこまれ、その内濠に相当広大なスノー・フィールド若しくは巨大な氷河をもっているということだ。内院のはるか上部に君臨する王城の風格がある。探検的興味を感じるのは北の方だ。アプサラサス山群、テラムカンリ・グループ、いずれも高さこそ少しおとるとはいえ、山登りの興味もあるし、テラムシェール氷河からリモ氷河、さらにはカラコラム峠とたどってヤルカンド河に出るか、シャクスガム河ぞいに北に廻り込むことが出来れば、と遠い北の地平線をにらんで考える。

一時間はまたたくうちにすぎ、はやくも正午。トランシーバーのアンテナをひっぱり出すのもどかし、Yさんが各キャンプあてに送信する。第5キャンプの上尾がこれをキャッチし応答してきた。「10時45分、サルトロ頂上に立ちました。」Yさんの声が喜びにふるえている。かれこそは、この3人の登頂隊員の中では勿論のこと、遠征隊全員の中で、つねにあらゆる事態に動ぜず、ユーモアを忘れず、全幅の信頼を一身に集めて来た人だ。それだけにその責任ははなはだ重かったにちがいない。いま頂上からの登頂報告をするかれの顔は、頂上にはじめて足をおいたそのとき以上に明るく輝いているようだ。登頂の成否と、登頂隊の安否を下で気づかっておられる四手井隊長、第3キャンプまで上って指揮をとった加藤副隊長、アタック・キャンプ建設まで陣頭に立ってわれわれをひきいてくれた林登攀隊長、仲間のだれかれに無事登頂のしらせを頂上から送ることができたわれわれのしあわせ。携帯用ヨーカンひとつ、3人でわけて食べる。勝利のタバコは残っていた最後の1本だ。Yさんが、ポケットから1枚の写真をとり出し、スリーファイブの平たい箱に収めて頂上の雪に埋めた。最近日本から送られてきた四手井隊長夫人以下隊員の奥さんたちが集ったときの記念写真が入っているという。その心情については私は想像することしかできないけれどもわかるような気がした。バシールも私も頂上には何も残さなかった。

12時すぎ下山にかかる。ビバーク地点までわずか30分で到着。誰かサポート隊が来たらしく、われわれ以外の足跡があるような気がする。第2次登頂隊が

で行動を開始し、近くまで来ているのだろうと考えわれわれの使ったツェルトやストーヴ類をそのままに置いて下る。ときどきふり返ると、われわれにとっていい目標でもあったが、なかなか近づけずいぶん悩まされもしたあのジャンダルムが、逆光の中を少しずつ遠のいてゆく。くだるにつれて疲れは激しく、ピッチがおそくなる。リカ渓谷上部の斜面をまきおえ、第5キャンプ上部の大斜面に移ると、すでに雪面は堅くなり、ときおりスカブラが足元からザラザラとくだけ落ちる。雲は多くなったようである。今日一日天候が安定していたのは幸いだ。急傾斜の雪面に3人の影はだんだん長くなる。午後3時、昨日サブザックを落した地点にさしかかる。よろめきながらつづける下降はなかなかはかどらない。第5キャンプ直上の大斜面にかかる。突如、斜面の下に2人の人影がみえた。われわれの方をむいて2人が横に並び、しきりに両手を挙げて呼んでいるようすだ。まだ高度差は200mもあろうか。斜面のずっと下の方には、すでに夕べの影がひろがりはじめており、まるで奈落に向かって下降しているよう。下で待ってくれているのが誰であるのか一寸みわけがつかない。気はせくが足が進まぬ。傾斜はきつい。テルモスが赤旗のところに転がっている。われわれはこれがサポート隊の好意ある暖かい紅茶の差し入れと気づかぬままむきもせず下ってしまった。再びコールがきこえる。林さんと岩坪だ。かれらがみえはじめてからすでに1時間は経過している。その間、かれらはわれわれをじっと見守ってくれていたのだ。かれらに一歩一歩と近づく。両手を挙げて万才している。林さんが近づいてくる。「おかげで登って来ましたよ。」「よくやった。ありがとう！」Yさんと抱きあって、林さんが「よかった、よかった」と涙。Yさんも鼻をすすっている。バシールにはちょっと不慣れな光景のはずだったがこの気持は通じたのであろう。林さんの手を握りしきりに感謝のこぼれを述べている。私は岩坪に「ひと足先きに登らせてもらったぞ。」という。かれもここまで来ているからには、上まで突っ走りたいにちがいない。われわれの荷はぜんぶ林さんたち2人がとってくれたので、から身になって第5キャンプへ。岩坪はこの高度で、荷をかついでいるのにギャロップでとんでゆく。

テントでは、茶をつくりながら上尾が待っていてくれた。早速第2次アタックの計画はときくが、今日加藤さんと相談の上、すでに放棄と決定したとのこと。それでは上の方についていたトレスはときくが誰もそこまでは行ってないという。Yさんと一寸顔を見合わせる。第II峰までの縦走は少し無理としても、われわれのトレスをつかってもうひとパーティくらい頂上に行つてはどうかと思う。しかしこの山の斜面はそんなに長期間へばりついているところではな



B.C. 詳図

なくとも山登り技術やマナーにおいてパキスタンのどんな登山団体よりも優れていると思う。トレイニングをうけたいなら、バスールにしても、ペルベツ(Pervez)にしても、いまがチャンスではないか。シアチェン氷河を溯ることはベグ教授の願いの一つだといっていたのに、これは一体どういうことなのだろうか。あたりまえなら、英語しか通じない、気ごころの知りあいにパキスタン・メンバーから早く無関係になりたいと思うのに、さっさと降っていくかれらにこのときは無闇に腹が立った。自分の身のまわりのことも召使いによってしか整理できないような、英国流のマナーになれてしまったパキスタン学生が、どうして近代的な、アルピニズムを体得できるだろう。近代的登山は個人主義のうえに立って始めて成立するはずのものだ。パキスタンで登山は、当分のあいだ成長しはしないだろう。こんな理屈を自分ででっちあげて、わたくしはむしろくしゃした。カラコラム・クラブと一緒にあれば、ひょっとしたら、許可のおりたルート以外、テラム・カンリの偵察など比較的自由な行動が可能になるかもしれぬ。そんな望みをもっていたからである。その望みがカラコラム・クラブの下山とともにうすれ、「政府の許可がおりない以上許可されたルートから1mたりともはずれてはならん」とがんばっている連絡将校だけが残ったとき、その抑圧が、こんなカラコラム・クラブへの憤りの感情となったのもまあ致し方なかった。連絡将校もこういったわれわれの気持ちを察したらしく、この日、かれとのあいだに、ちょっとした口論がおこった。かれが、高所人夫にサボタージュを扇動したのである。権威ある軍人と、備い主の外人との間にはさまれた高所人夫のそのときの悲しそうな顔。まあいい。カラコラム・クラブが去って日本人だけにはじめてなれたのだ。ひさしぶりに成功のあとのゆとりをゆっくり味わおうではないか。各自テントに、キャンピング・ギヤズ(Camping Gaz)のパートナーを持ちこみ、茶を沸かしたり、乾燥リンゴを煮たり、自由の時間をたのしんだ。四手井、加藤、林、齊藤は朝日新聞社に送る原稿の執筆に専念。完成は翌未明の午前3時頃であった。

28日、連絡将校は下山のためのクーリーを呼びに降る。朝日新聞、AACK宛の原稿を託す。

29日、骨休め。食べることにいやに熱心になった。

30日、くもりのち晴。高所人夫がまずC₁へ先行。今日でC₂も撤収である。スキーを二台使ってソリをつくる。C₂の残った荷物を全部つんで軟かくなりはじめた雪面を降る。早朝の堅い雪ならすべりもするが遅出の犬ぞりの犬の肩にひもがくいこんで痛い。二台のそりは、やれこっちは日通だ丸通だといってぬきつぬかれつ競争する。極地風のボーデンをすぎてしまうと、下の方でパドルが出てきて、難行する。そのパド

ル帯をすぎてクレバスの縦横に走る氷河面が現われてくるようになると前進不能。ソリは解体された。

C₁はテントの下だけ氷がとけず、一ヶ月の留守のあいだに高床式テントになっていた。翌日はABCまで。ピーク36氷河もここまでくるともう完全に夏の様相を示している。表面の雪が全くとけてしまっている。とけるだけでなく、昇華したところ、雪はソーダまんじゅうの牛皮をはいだあとのように、多孔質になっている。その穴に泥がたまる。ほんの小さな水の流れが溝を掘り、それがキャナルのように成長し、ついに深いクレバスの中にどっとおちこんで、吸いこまれてしまう。その音はまるで発電所のダムの放水音のようである。そのキャナルに沿って、下った。もう両側の山々の斜面も雪が溶けて、表面の瓦礫が、石なだれになってしきりにおちている。ABCの背後にそびえ立つ岩峰は、垂直にきれ、そこにヒマラヤ巒が何段にもついている。背後はぬけるような青空。また石なだれの音。氷河上のモレーンを横切ってABCに帰る。モレーンは堆石の多いところ、少ないところ、波うっているその波の周期がちょうど、氷河の一年間に動く距離ではないかと上尾が説を立てた。夏になると石なだれの落下が盛んになる。ベルト・コンベヤーのように氷河が動けば、石の落下がはげしい夏には山になるというのだ。案外正しいのかもしれない。モレーンの上からコックのタキが、ざんばら髪をふりみだし、ここにきて迎えにきてくれる。握手。

氷河湖が大きくなってボートが浮かべられそうになっている。といってゴム・ボートを出そうというものもない。それほど元の元気もないのだ。8月1日から3日、ABCに滞在。荷物の整理。みんな植物採集用にもってきた1年前の古新聞を読みふけている。林は上尾に隊員の顔写真をとったかとせついている。「へえ」ようやくかれは全隊員の顔写真をとりおわった。報告書にのせるためのものである。

3日、下から連絡将校が集めにいったクーリーがあがってくる。高所人夫は、シアチェン氷河のモレーンの中にけしつぶのように小さい影をも見分けて、クーリーが来たと報告してくれる。33人。既婚者にはまずお手紙。「勝手にしやがれ。おっとおれにも来た」。卵、あんず、野菜。ニワトリ三羽。そして小さく束ねた花をわれわれの胸に、帽子につけてくれる。ギャリはもう花で一杯だという。それをつんできてくれたクーリーの心情が思いがけずうれしかった。ここで一ヶ月ほど前に別れたクーリーたちも、ビラフォンド越えはいやだといってB.C.から帰ってしまったクーリーもいる。ほとんどが顔みしりばかりだ。2人だけ青目、白肌の男がいた。あんずは水々しくてうまい。モヘメッド・アリがあんまりくうとよくないというのに、うまいのでくいすぎる。夜中から腹が張る、下痢はする。

翌朝は半数以上の隊員がABCの撤退日だというのにかぬ顔をしている。足に力が入らない。だるい。ロフォンド・キャンプまでの途中、モレーンの背後、テラム・シェール氷河を前にして巾広いシアチェン氷河の真中に何度かしゃがみこんだ。プロモントリー(Promontory)は、アイベックス(Ibex、ヒマラヤ地方の野生の山羊の1種)がいて、木も生えているという記述があったが、ほんのり緑づいているだけである。北は新疆、東はインド。テラム・カンリは奥行きのない山だ。ここで今度いくなら、K₁₂だな。立ちあがるとだるい脚をひきずるようにまた隊列に加わる。

高村はロフォンド氷河とシアチェン氷河の合流点あたりで、これが最後だと360°パノラマ写真を三脚を立ててとっていた。赤いセーターを着こんだ林も芸術写真をとるんだと右に左にルートはずしながら、ゆっくりロフォンド氷河をのぼる。昼すぎになると暑い。ロフォンド・キャンプに着くとコックのタキにアイスクリームを作れと命ずる。忠実な名コックはかしこまりましたとばかりひきさがる。アイスクリームを待つ間向いの岩壁にもえはじめた緑の草を採集する。だのに仲々アイスクリームがこない。陽がおちる。陽がかけると急に気温がさがる。ついに夕めし。チャパティとスープ。そしてもう暗くなってから食後のアイスクリーム。西洋人じゃないんだぞと試してみても仕方がない。あればたべろ。下痢のことも忘れてたべた。

8月5日、ロフォンド・キャンプからビラフォンド・ラをこえてBCまで。峠からサルトロ・カンリをみる。大分上部雪原にしわが増えたようである。6日サルトロ・カンリもみおさめ。クーリーはハイ・ポーターに引率されながらどんどん降っていく。えらく早い。われわれは石のごろごろしたモレーン上を、おくれながら下る。四手井隊長は案外足早で元気があった。遠い遠い。チュミク(Chumik)氷河出合の近く、左岸、灌木の生えているところで、遅めの昼めし。クーリーは暑いのでブッシュの中に入り込んで、ハッタイ粉を指でねってたべている。われわれは卵焼とノン。蝶々を採る。シジミ系統しかみかけない。くま蜂一匹。瓶の中におさめる。さあまたひと下り。柳蘭がでてる。エーデル・ワイスもある。にせ物のエーデル・ワイスをつんで喜んでるものもいる。よもぎ風の芳香性のある菊が咲いている。ふうろうの類。

氷河のツングにきておどろいた。濁流が大きな川になって流れている。ジュニパー、各種の柳、バラ、タマリスクも満開である。往路でたくさんみかけた放牧の羊は今はいない。石小屋はからっぽになっている。ここで花にかこまれて骨休めだ。初夏の感じである。岩壁にかこまれた花園での休養はわれわれだけの享受できる第一級のぜいたくであった。

7日、ギャリに滞在。ガガルの村までニワトリや卵を買いにやらせる。「葉、葉」といってやってくるうさぎ村人もいない。ここで、下から食糧をあげて二三日滞在すれば最高である。床屋が開業する。加藤副隊長はタンポポの根をほりおこしている。油のためのキンピラにするのだという。平井は拾った籠をもってお供をする。

アブドゥル・ラヒムがニワトリをもって帰ってくる。連絡将校からの手紙でファイバートランクが盗難にあったという。手紙によると大金の入ったトランクの可能性が濃いという。会計の谷と前小屋とは至急ガガルにおいて調べることになる。せっかくの「ギャリの休日」もつまらない事故で台なしになってしまった。仕方がない。大金のことであれば、暑い午後の石ころ道をかけおねばなるまい。増水した濁流のうえにかかった細い橋を渡ってガガルにつくと、連絡将校は、やや興奮した面持ちだ。このハッサン・ジュウがぼけとしていたから、盗まれたりしたのだと、高所人夫の一人を足でけったりする。なくなったのは大金の入ったトランクではなく、四手井さんのであった。

ギャリでは、夜キャンプ・ファイア。高村はAACK宛の登頂記書きで徹夜をしたという。

翌日はガガルまで。増水で目がまわるように早い濁流の上にかかった細い木橋。これでは羊は通れまい。ギャリで放牧していない理由がわかった。盗難事件のためギャリでのんびり滞っておれなくなったわれわれは、あとはもう、ギャリを一気に下ってしまうことになった。もともと、連絡将校は教養ある者は無駄に金を浪費しないという考えをもっていた。これがかれの家風か、軍人仲間の立て前かそれは知らない。ただ毎日クーリー賃を安あがりにするため、ピッチをあげることは、すさまじいものがあった。たしかに1日日程が短縮できればクーリー60人として600ルピー、42000円の節約になるのだから、大きい。われわれにとってもありがたい。しかし、そのかわりに、われわれとしてゆっくりみとどけておきたいものも十分にみることができなかった。かれには、平凡な田舎をあるいているにすぎないのだろうが、われわれ日本人には、十分好奇心の対象になるものもかずかずあるのだ。その旅人の気持ちが、かれにはあまりわからないのか。もうがむしやらに歩いた。

9日、マンディクで朝食。現地食費を往きに節約したので案内食費が潤沢である。今回は食糧はヴァラエティもとんでいたし、うまいものも多かったのに、ほとんどの隊員がやせた。持ち帰ってもしようのない金である。財布のひもをゆるめて体重をとりもどそう。毎日一人当卵10個あまり。にわとりは一人当半匹。

バラオ(Parao)に着く。アンズの木にかこまれた木蔭にテントする。えらく村人が多勢集っているの何

だという祭りだという。寺院から村人がぞろぞろと出てくる。お布施を出してほしいというので出すと、おさがりが来た。土地の地主が粉を出して、祭りの終りに村人に配るのだという。一種の団子である。神像もなにもない寺院でまさか神さんのお供えでもあるまい。それともアラーの神でも人間の食べ物をたべたりするのもかもしれない。そこらあたりがどうも解らない。甘味のない団子であった。翌日フルディ (Huldi) へ。村はずれまで道々アンズの実をとってはたべた。高まきの道。はるか下ショーク川の河床に雪溶け水が渦まいている。途中の岩にアイベックスを簡略に図案化した線画が刻んである。フルディ 2 時着。11 日バレゴン (Baregon) でニワトリや卵を買い入れる。マルチガン (Maltigaon) 着 4 時。村人が花を皿にのせて迎えてくれる。矢車草、マーガレット、スイトピー、ダリア、けしなど。

翌日はカパル (Khapalu) まで。晴れあがったマッジャブルムをふりかえりふりかえり、カラコラムにまた来たくなってしまった自分を見出した。

マチュリでおせい朝食をとったとき、チョゴリザ隊の泣虫のベアラがピカピカの皮靴、すばらしい洋服であられた。平井が彼を発見した。チョゴリザのハイ

・ポータ、モーハメッド・アリーは突然彼にだきつかれて目を白黒。そのこっけいな様子に一同腹をかかえる。

サリン着 12 時。長いトラベルは終わった。支払いをしてクーリーを解散させることにした。荷物を運ぶザークを待ちながら、砂嵐の吹きはじめたショーク川の広い河原の真中で金を数えた。ファイバー・トランクを机がわりにおいて、青いビニロンの金入れ袋から、ホッチキスでとめた札束を出して数える。連絡将校は杖をふってクーリーを並ばせる。56 ルピー、66 ルピー。渡渉のとき流れそうになった中国人風の男。かれは歌がうまかった。メートとして組を統率し、要求するときには正当の給料をあくまで要求した、ハイ・ポーター落第生。ピンディで買ったという色物ハンカチをもっているにやけ男……。番号札を返しては一人一人金をうけとっていく。吹きはじめた砂嵐に、金とびそうになる。1 組、2 組、3 組。しゃがんだクーリーの列が一つ一つ減っていく。支払い終了。荷物にかけてあった紐をほどいて帰りはじめる。「さよなら」と挨拶していくもの。「またくるから会おうぜ」。三々五々砂嵐にぼろ服をなびかせながらクーリー達は消えていった。

こうして長いトラベルは終わった。

大阪 A. A. C. K. 会員の集い

主として大阪在住の会員相互の連絡をはかるため、有志が集まり毎月第一火曜日夕方に集会を持つこととなりました。もしこの集会に興味をお持ちの方はぜひ御参加下さい。歓迎いたします。詳細は

谷 口 朗

大阪市東区本町 3 の 3 丸紅飯田株式会社木材部
電話 大阪 271-2231

まで。

装備・食糧その他に関する覚え書

1. 装備について
2. 無線機について
3. 食糧について
4. 写真について

装備について

平 井 一 正

遠征が終わった今、反省してみると、今回のサルトロ隊の装備はある一面では非常に満足すべきものであったが、他の面ではまだまだ考えねばならぬ点を多く含んでいる。前者にはテントをはじめ衣類関係、無線機等、後者にはたとえば炊事具、登攀具等である。

準備状況からいえば、全体的にみて前回までの経験と、準備期間が長かったことは、準備をする上に非常に好都合であった。しかし、今回の遠征がパキスタンとの合同であることは、ある意味からいえば準備をすすめる上で大きな障害となった。ことに出発まぎわまでパ側隊員が決定しなかったことでサイズを必要とする個人装備の準備は大いにやりにくかった。実際パキスタン側メンバーの人数が正式に決定したのは船が出たあとの 4 月の中旬、しかもそのうちの若手の二人については我々がパキスタンについてからはじめて決定したという状況である。この若手二人の足のサイズはまた馬鹿に大きく、見はからって持参した靴が小さすぎてその調整には可なり苦労した。

さて次に各細目につき代表的なものをとりあげて説明する。

1. 高処用個人装備

防寒服・寝袋 従来羽毛を使用していたが今回は羽毛の代りに化繊綿（主にテトロン綿、一部カネカロン綿）を使用した。性能は羽毛に劣るというデータはあるが、実際使用した感じでは羽毛に比してことに保温性が悪いという事はなく、また破れた時にも簡単に修理でき、価格も安いという利点をもつ。布地は日本レーヨンに依頼して 30 デニールのナイロンタフタをクリスタル加工した完全防風の軽い布を作り、また裏地は 12 匁絹羽二重とし、吸湿性をよくし、肌ざわりをよくした。いずれも結果は好評であった。

ヤッケ・オーバズボン “テトずれ”ということで、チョゴリザ以来余り好評でなかったが、その防風性、軽量を考えて再びテトロン地を採用した。使用布はテトロンカラコラム。使用した結果“テトずれ”以外に欠点は考えられない優秀性を示した。

カッターシャツ・ズボン チョゴリザの時、共に悪評フンブンだったが、今回、カッターシャツは各自で準備してもらい、ズボンだけを係が調達した。カッターシャツは各自好みの柄をえらんで作ったので問題はなかった。ズボンは兼松羊毛から提供を受けた厚手のウール地の丈夫なものであったが、布地が厚すぎたきらいはあった。C₃ 以上の高所ではこの重いズボンの代りに羽毛ズボンを着用した方が動作し易かったという結果が一部隊員からでているが、羽毛ズボンとズボンのコンビネーションも今後考える必要がある。

下着・セータ類 アミシャツ、カシミロン肌着、カシミヤラクダシャツ、エクスランのヘチマエリセータ等、下着、セータ類は鐘淵化学工業、レナウン商事、東洋紡等の提供を受けて潤沢であった。

登山靴 キャラバンのときは、キャラバンシューズ（藤倉ゴム（山晴社）、オニツカ KK より提供）、長い氷河上のトラベルは低所靴（普通の登山靴、各自準備）、高所では特別製の高処靴の三段階を考えた。この三種の靴を準備することについては、いろいろと批判も多かったが結果的にみるとキャラバンシューズは別として、パドルの多い長い氷河のトラベルに用いる靴は高処で用いる登山靴とはやはり区別した方がよかった。

高処靴は秀山荘製で、外側の甲皮にはドイツ製防水皮、その内側はマイラーのフィルム、羊毛の皮という三層であって、足にあたる所は羊毛で接触している。また底はサラインソールの敷皮、中底、フェルト、相底を経てビブラムソールといった構造である。行動中オーバーシューズの使用と相まって寒さはかなり防げたものと思われる。

低所靴としては普通我々が内地の山で使っている茶利皮を用いたビブラム登山靴を用いた。

我々が ABC に到着した頃、氷河は午後になるとどろどろのパドルになり我々をなやませた。高処用の靴を使用したのでは羊毛が水を含んでなかなか乾かぬうえいたみが激しい。このために低所用登山靴は大いに役に立った。しかし今後の問題としてこのようなパドル地帯を行進するときの靴は完全防水性のものを考える必要がある。これは湿潤ヒマラヤ遠征のときにも問題となるであろう。

キャラバンシューズではチョゴリザのときマメを作って全員藤平氏より手痛いお叱言をいただいた思い出

があるが、今回はその後いろいろとメーカーの方でも研究をして改良した結果足のしまり具合もよくマメも出来なかった。

手袋・靴下 問題がないようで案外問題があるのがこの手袋、靴下である。チョゴリザのときはスウェーデンやノルウェーから輸入した脱脂していない羊毛の毛糸から作ったものを持参した。脱脂している毛糸の多くは一度使用したら縮んで始末に困った。今回は東洋紡、東亜紡より提供をうけた毛糸を大阪ソウラスポーツ店の好意で津沢メリヤスで加工した。結果は非常に良好で、スベアの靴下、手袋が使われずにすんだ。

キャラバン中はカネカロンのパイルソックスを利用したが、少々足がむれること以外は丈夫ではき心地も良い。

帽子 内地から高処帽、ジャージ帽、キンキラ帽を持参し、カラチでつば広のカウボーイハットを購入した。山に入るまでの帽子としてはこのカウボーイハットと、山晴社から提供をうけたテトロンにアルミを蒸着したものを巻いた壁糸を織った所謂キンキラ帽を使用した。ことにこのキンキラ帽は隊員に愛好され C₂ まで使用した。

高処帽は内面をカネカロンボア、外側をテトロンで作り、パイロット帽の形式にした。保温性に優れ、非常に優秀であった。

ピッケル・アイゼン ピッケルは各自が準備し、アイゼンは門田の特殊鋼、八本爪を使用した。

2. テント類

低所用テント 使用した布はビニロン 8100 番 60 番 2 糸、エクスタンポプリンテント地の二種類で、それぞれ倉敷レーヨン、東洋紡より提供いただいた。とくにエクスタン布地はヒマラヤで使うのははじめての事でもあり、現在テスト中の結果がわかればいろいろと興味あるデータが得られよう。

ビニロン、エクスタン共に褪色はひどかったが使用に差支えることはなかった。隊長、副隊長等のための個人テント、六人用、八人用を準備した。ドクターのための大きい診療テントを特に作らなかったが、小さいのはだめで大きいのが絶対必要である。

高処用テント 使用した布はテトロン、長繊維ビニロンの二種類である。ただしテトロンは、テトロンを鐘紡の研究所に依頼してタテ糸とヨコ糸の本数を揃えて織った特別製の 2/2 テトロンツイルと、帝人に依頼して試織した 1/2 テトロンツイルの二種類である。チョゴリザの時はテトロンを大幅にとり入れたが、いずれも平織(タフタ)で、これは縫製のとときに布の糸の密度が大のため縫糸がとけるといふ欠点があった。今回はすべて綾織(ツイル)とし、縫糸の熔断という欠点をなくし、且強度をふやすようにしたものである。

ビニロンの長繊維のテントは倉敷レーヨンに依頼して特別に試作してもらったものだが、この布で作ったテントはヒマラヤでは勿論のこと内地の山でも使ったことはなく、強度その他多くの興味あるデータが得られると思う。

以上三種類のテント布地をとりまぜて、四人用、三人用、それからアタック用二人用を東京細野テント店で製作した。形はいずれも外側吊下げ式ウインパー、内張は絹を使い、四人用には二本、三人用には一本のバンパーフレームを入れて居住性をよくした。

色は赤、橙色の二色としたが透光性もよく、居住性は優秀であり、強度の不安は全然なく、縫製の点で二三不満な所もあるが、重量の点を除いて高処用テントに関してはほぼ完成の域に達したのではないかと思われた。

ツェルト・シート ツェルトは日本レーヨンのナイロンタフタ(キャンパー)を使用した。軽量且完全防水で本来の目的の外に C₂ で天日による水作りにも用いた。

シートについては、すべてのグランドシートとフライシートの一部をビニロンで作し、一部テントのフライシートにエクスタンおよびテトロンを用いた。さらに紫外線の影響をしらべるために暴露用テストピースとして種々の布を短冊形に縫い合せたものを作り、テントのフライシートとして使用した。

3. 登攀用具

ロープ 梱包用、テントはりづな、フィックスロープ、縄ばしごのロープ等すべてビニロンの、所謂クレモナコードを使用した。登攀用のロープはすべてナイロン 10 ミリを使用した。

ビニロンについては倉敷レーヨン、ナイロンについては東洋レーヨンよりフィラメントを提供していただき大阪芦森工業で製品化した。

なわばしご 今度の山で非常に役立ったものの一つである。8 ミリのクレモナコードを使用し、30 cm 間隔に、コの字形に曲げた厚さ 2 ミリのアルミ合金板をとりつけた。欠点はロープの作るキンクである。

フィックスバー・ショイコ 神戸製鋼、浪速金属等の御好意により共にユニークなものを作ることができた。フィックスバーは軟雪に固定ロープ又はなわばしごを固定するとき必須のものであった。厚さ 1.4 ミリの硬質アルミ板を M 字形に曲げ、長さ 1 m の坑状にした。カラビナを通す穴を細工してあるので取扱いは便利であった。

つぎにショイコについてであるが、チョゴリザのときはパイプでフレームを作ったが、幾分弱いという批判があり、今回はコの字形アングルでフレームを作

た。材は 1.4 ミリの硬質アルミ合金で重量 1.2 kg。非常に軽便である。

捲上機 ビラフォン峠から ピーク 36 氷河源頭へのショートカットのルートが見つかった時に備えて約 4 キロの捲上機を東京好日山荘の協力で作案した。結果は捲上げ用に使わず、C₃ からの撤収の際、捲おろしに使用したが、今後の問題としてさらに軽量簡便なものを試作研究する必要がある。

4. 炊事具・その他

ケロシンストーブ ノズル調整器つきプリムスケロシンストーブを香港で購入して持参した。高所キャンプでは専らプロパンを用いたので高所での性能はともかくとして 6000 米までの使用では快調であった。

プロパンストーブ チョゴリザの時好評だったプリムスプロパンストーブを今回も高処キャンプで主に使用した。5 キロ入りボンベ 4 個、10 キロ入りボンベ 13 個を持参し、これから 1 キロ入り小ボンベに入れかえて高所キャンプで使用した。その他 B.C. 等でこの大ボンベよりガス管を引っぱってプロパンコンロを使用して快適な調理ができた。

プリムスプロパンストーブの欠点はボンベの重量と中味すなわち残量がわからないことである。この欠点を一挙に解決するものとして硬質ナイロン製のボンベがある。浜松の高木鉄工 KK が製作しており、市販されているものは内容積 100cc 程度の小さなものしかなく、これを利用したバーナーを試作して持参した。ボンベは素材としてのナイロンには問題がなかったが口金部分からガスがもれるのもあり、信頼性の点から BC のみで使用した。さらに 1 キロ程度のナイロンボンベの試作を依頼したが、試作期間が短く充分信頼のおけるものが作れなかったため今回は見送ったが、これは口金の改良とともに今後の研究課題となろう。

燃料用ではないが 100cc のボンベを使ったランタンは軽量でその明るさは、すばらしかった。

ブタンストーブ ノジャックに行った岩坪が感激して報告したポーランド隊のブタンストーブと同じで、キャンピングガスの商品名で市販されているものである。非常に軽く操作が簡単でアタック隊がビバーク地点で暖がとれたのもこのストーブのおかげである。欠点はプロパンに比して幾分火力がおちること、構造上安定性を欠くこと等であるが、今後もその軽量、簡便さから大いに利用されるものと思われる。ただこれだけに頼るのは火力の点から問題があり、プロパンと併用の形がいいと思う。

無線機 サルトロが成功した 1 つの原因として無線機がとりあげられる程、今回の山では 100% 利用できた。ことに頂上から登頂成功の無電が成功したことは古今例をみないところである。

高所キャンプではすべてナショナルの T-1 型トランシーバー(27.112MC)を使用した。他に PRC-6(51.5MC)、富士通トランシーバーも持参したが、これらはキャラバンあるいは峠からの輸送のときに使用した。無線が成功した原因の 1 つには地形的な関係もあるが、軽量(600gr)で操作が簡単なことも原因の 1 つであろう。

発電機 心電計の電源として、また積算照度計の電源として簡単な発電機を作り持参した。これはモータバイクエンジンで直流 12V を発生させ、バイブレータで直流を交流 100V に変換するものである。急造のせいで余りすっきりしたものではなく、重量も 40 キロという重いものになってしまったが、現地で 2 回心電図をとることに成功した。ただ 5000 m の ABC では酸素ボンベから O₂ を補給してやらないと発火が困難であった。

5. ポーターおよびクーリー用装備について

ポーター用装備 チョゴリザのときと同じ程度の個人装備(アメリカ中古品)を準備したが、彼等はチョゴリザ以後各国遠征隊に参加し、かなりぜいたくになっており、たとえばチョゴリザの時の中古の羽毛服には内心大いに不満だったらしい。マッシュャブルムのアメリカ隊はサブもポータも同じだったとくりかえしいていたが、彼等の質が向上したのと同様、彼等にもいいものを与えてやらねばならない。ただ彼等は質よりも見栄えのするものの方をよろこぶ傾向にある。

ポータ用キャラバンテントは青色のビニロンで作ったが、透光性がわるかった。コックテントは別に赤色ビニロンで作った。

クーリー用装備 ビラフォン峠越えに必要にして最低限のクーリーに与える装備については何回となく討論したが、結局結論はでなかった。クーリー達が何を要求するかがわからなかったのである。

準備したものは B.C. から峠へ往復する 70 人の人夫に対して雪めがね、ジャングルブーツ(ビブラム底のズック靴)、ソックス、手袋を与え、峠をこえてシアチェン氷河における人夫に対しては以上の他に毛布、毛の靴下、ヤッケさらにパッチ(約 15 人)を与えた。

さらに彼等に夏用テント 3 張(このうち 2 張は大グラランをひもでしばった簡易型のもの)、ケロシンストーブ 2 台(灯心式)を準備した。結果的にみてクーリーに対する装備はおおむね良かったように考える。

6. 終りに

最後に美的観点から今度の装備を検討すると、隊員のスタイルはやはり良いとはいえないようである。これは同じものを着てもバ側隊員はスカッとして見えるのを考えてみるとどうやら日本人個々のものらしい。

スタイルはどうも胴長の日本隊員はよくない。
カラーコンディションはテント関係はおおむね良好
だったが、個人装備ではもう少し研究の余地がある。
たとえば寝袋、防寒服等、寒色系が多、赤のよう

な暖色系が少なかった等である。
最後に御援助賜った各関係会社、また準備に献身的
努力をして下さった会員安田武氏に厚くお礼申しあげ
ます。

サルトロカンリ遠征装備表

A. 個人装備 (日10人, パ5人分)

1) 隊員用

品 名	数 量	単 重 (gr)	材 質 お よ び そ の 購 入 先 或 は 提 供 先 (*: 寄贈, **: 値段割引)	製 作 所 又 は 購 入 先 (*: 寄贈)	備 考
防寒服上,下	15	1,500	日レ(ナイロンタフタ)*, 帝人(テトロン綿)*, 絹業協会(絹羽二重)*	大阪好日山荘	羽毛服に代るもの, 裏地は絹
ウインドヤッケ	15	450	帝人(テトロン・カラコルム)*	一沢製作所	
ズボン	15	300	"	"	
オーバーシューズ	2×15	500	倉レ(ビニロン8100番)*	"	
寝 袋	15	2,000	日レ(ナイロンタフタ)*, 帝人(テトロン綿)*, 絹業協会(絹羽二重)*	大阪好日山荘	
テントシューズ	15	800	日レ(ナイロンウインコル)*, 底はナイロンソール, うらははカネカロンポア**	"	
アイゼン	15	900	ニッケルクローム, 8本爪	門 田	個人負担
ピッケル	15	950	ニッケルクローム	"	
登山靴(高所用)	15	2,500	ドイツ製防水皮, マイラーフィルム, 羊毛の皮	秀 山 荘	
" (低所用)	15	2,500	チャリ皮	一 部 秀 山 荘	個人負担
キャラバンシューズ	15	1,500		オ ニ ツ カ* フ シ ク ラ*	
手袋 5本指(絹)	2×15	100	日本製糸協会(絹トリコット)*	大阪好日山荘	
5本指(毛)	3×15	120	東洋紡および東亜紡(それぞれ並太, 中細毛糸)*	シウラススポーツ店をへて津沢メリヤス	
3本指(毛)	2×15	120	"	"	
皮オーバー	15	200	羊皮	秀 山 荘	
靴下薄手	4×15	120	東亜紡(中細毛糸)*	シウラススポーツ店をへて津沢メリヤス	
厚手	4×15	140	東洋紡(並太毛糸)*	"	
パイルソックス	2×15	100		旭化成(カシミロン靴下)*	
セータ(ヘチマエリ)	15	500	東洋紡(エクスラン毛糸)*	東 洋 紡*	ナイロンファスナー各種色柄
セータ(前開き)	10	630		シウラススポーツ店*	
アミシャツ 上,下	15	100	カネカロン*, パネロン*	パネロンは津沢メリヤスより寄贈	
帽子(毛糸)	15	100	東洋紡, 東亜紡より毛糸*	武庫川女子大	
(ジャージ)	15	50		シウラススポーツ店	
(高処用)	15	100	日レ(ナイロンウインコル)*, 三菱レーヨン(ポア)*	大阪好日山荘	
ゴーグル	15	100		"	
雪めがね(水中めがね型)	15	70		"	
登山用ズボン	15	1,200	兼松羊毛*, 池田商店*		
ラクダシャツ(カシミヤシャツ)	15	600		レナウン商事*	
肌着(カシミロン)	15	400		旭化成工業*	
(レナウン)	15	400		レナウン商事*	
絹マフラー	15	30	絹業協会*		

品 名	数 量	単 重 (gr)	材 質 お よ び そ の 購 入 先 或 は 提 供 先 (*: 寄贈, **: 値段割引)	製 作 所 又 は 購 入 先 (*: 寄贈)	備 考
アイゼンバンド	15	100		大阪好日山荘	
ピッケルバンド	15	100		京都一沢製作所	
サブザック	15	800	倉レ(ビニロン8100番)*	"	
物入れ袋	2×15	100	日レ(ナイロンタフタ)*	"	赤色
懐中電燈(棒状)	15	200		松下電器産業*	
" (ヘッドライト)	15	250		"	
電 球 3.8V	40	10		"	
2.5V	20	10		"	
水筒(ハイゼックス)	15	150	三井化学*		
テルモス(1l入り)	16	400	イーグルマホービン*		
キャンバスバッグ	15	200	倉レ(ビニロン8100番)*	京都一沢製作所	
調査かばん	15	150	"	"	
スパッツ	15	100		大阪好日山荘	
エヤマット大	15	1,200		山晴社を通して藤倉	
作業衣上,下	15	800	日本エクスラン工業*	浪速実業	個人負担
カッターシャツ	15	600			
ヒヤケドメクリーム	15	150		資 生 堂*	
リップクリーム	15	100		"	
チリガミ等雑品					

(以上の他, 牧内氏に対し若干の準備をした。)

2) 高処用ポータ (10人)

品 名	数 量	単 重 (gr)	材 質 お よ び そ の 購 入 先 或 は 提 供 先 (*: 寄贈, **: 値段割引)	製 作 所 又 は 購 入 先 (*: 寄贈)	備 考
羽 毛 服 上	10	1,000			アンナプルナ、チヨゴリザのもの
ウインドヤッケ	10	450	日レ(ナイロンウインコル)*	一 沢 製 作 所	赤色
" ズボン	10	300	日レ(ナイロンウインコル)*	"	灰色
オーバーシューズ	10	500	倉レ(ビニロン8100番)*	"	
手 袋 5本指	20	120		秀 山 荘	米軍放出品
3本指	20	120		"	"
オーバー	10	150		"	"
靴 下 薄手	20	120		"	"
厚手	20	140		"	"
パイル	10	100	カネカロン(パイルソックス)*		
寝 袋	10	2,000		秀 山 荘	カネカ綿
ピッケル	10	1,000		大阪好日山荘*	
アイゼン	10	900		大阪好日山荘	
登山靴	10	2,500		秀 山 荘	
ズボン	10	800		"	
カッターシャツ	10	500		"	米軍放出品
厚手 下 着	10	500		レナウン商事*	"
肌着(カシミロン)	10	300		旭化成工業*	
帽 子 (防寒)	10	200		秀 山 荘	米軍放出品
" (ジャージ)	10	50		シウラススポーツ店	
雪めがね(水中めがね式)	10	70		大阪好日山荘	
水筒(ハイゼックス)	10	150	三井化学*		
エアマット	10	800		山晴社を経て藤倉	
セータ(Vエリ)	10	200		レナウン*	サブ用として準備したもの

3) クーリー用

雪めがね(サングラス式)	250	50		京大北門前 岩崎めがね店	
--------------	-----	----	--	-----------------	--

品 名	数 量	単 重 (gr)	材 質 お よ び そ の 購 入 先 或 は 提 供 先 (*:寄贈, **:値段割引)	製 作 所 又 は 購 入 先 (*寄贈)	備 考
キャラバンシューズ	70	1,500		山晴社を経て、藤倉	ジャングルブーツとも言う(輸出入)
毛 布	30	800		北野神社内の古着店	
ソ ッ ク ス	30	100			
手 袋	30	50		旭化成(カンミロン手袋)*	
ヤ ッ ケ 上	30	500	倉レ(ビニロン8100番)*	京都一沢製作所	
バ ッ ケ	100	50			

B. 共同 装 備

1) 露 営 用 具

品 名	数 量	単 重 (gr)	材 質 お よ び そ の 購 入 先 或 は 提 供 先 (*:寄贈, **:値段割引)	製 作 所 又 は 購 入 先 (*寄贈)	備 考
高 処 テ ン ト 2 人 用	2	5,000	帝人(テトロンフィラメント)* 鐘紡紡織研究所(試織布)*	東京 好日山荘 (細野テント店)	タテ:テトロン 150d 103本/in ヨコ:テトロン 150d 105本/in 組織2/2ツイル, 赤色
3 人 用 (テトロンツイル)	4	6,000	帝人(テトロンツイル)* 鐘紡紡織研究所(試織布)*	全上	帝人テトロンツ イルは タテ:テトロン 100d 82本/cm ヨコ:テトロン 150d 38本/cm 2/1ツイル,オレ ンジ色バンブー 入り
3 人 用 (ビニロン長繊維)	1	6,000	倉レ(ビニロン長繊維)*	京都一沢製作所	タテ:ビニロン 長セイン 70d 118本/in ヨコ:ビニロン 長セイン 70d 102本/in 組織2/2ツイル, オレンジ色
3 人 用 (カラコルム)	3	5,500	帝人(テトロンカラコルム)*	中野テント店	橙色, 1961年ビ ルマ用に試作し たもの
4 人 用 (テトロンツイル)	3	6,500	帝人(テトロンツイル)* 鐘紡紡織研究所(試織布)*	東京 好日山荘 (細野テント店)	バンブー2組入 り
4 人 用 (ビニロン長繊維)	1	6,500	倉レ(ビニロン長繊維)*	京都一沢製作所	橙色, バンブー 入り
キャラバン用テント 1人用(ビニロン)	3	4,500	倉レ(ビニロン8100番)*	全上	"
1人用(エクスラン)	3	4,000	東洋紡(エクスランポプリン テント地)*	"	"
6人用(ビニロン)	1	7,000	倉レ(ビニロン8100番)*	"	"
"(エクスラン)	1	6,000	東洋紡(エクスランポプリン 地)*	"	"
8人用(ビニロン)	1	8,000	倉レ(ビニロン8100番)*	"	"、のちにクー リー用テントと なる
ポータ用 8人用 (ビニロン)	1	8,000	倉レ(ビニロン8110番)*	"	青色
コックテント6人用	1	7,000	倉レ(ビニロン8100番)*	"	赤色
ツェルト	4	800	(日レナイロンタフタ)*	"	青色(キャンパ ーと云ふ) 青色, クーリー 用テントに改造
グランドシート 2.7×2.7m	10	1,300	倉レ(ビニロン8110番)*	"	赤色
" 1.8×1.8m	35	1,000	倉レ(ビニロン8100番)*	"	1961年ビルマの 時のもの
フライシート3人用 試験用	3	1,400	帝人(テトロンカラコルム)*	中野テント	
	2	1,500	東洋紡研究所*	京都一沢製作所	テトロン, エク スラン等試験用 布を短冊型につ なぐ

品 名	数 量	単 重 (gr)	材 質 お よ び そ の 購 入 先 或 は 提 供 先 (*:寄贈, **:値段割引)	製 作 所 又 は 購 入 先 (*寄贈)	備 考
キャンバスバッグ大	20	300	倉レビニロン8100番*	京都一沢製作所	
" 小	30	200	"	"	
ベ グ	150	200		東京 好日山荘	
シ ャ ベ ル	4	1,500			
ノコギリ 雪用	1	800			
普通	3	800			

2) 登 攀 用 具

品 名	数 量	単 重 (gr)	材 質 お よ び そ の 購 入 先 或 は 提 供 先 (*:寄贈, **:値段割引)	製 作 所 又 は 購 入 先 (*寄贈)	備 考
ビトン (アイス大)	25	200			チョコリザ残品
(アイス小)	25	150			"
(マウエル)	10	100			"
アイスバイル	2	700			"
ハンマー	3	450			"
カラビナ(普通)	50	120			"
(リング付)	50	120			"
ストック	10	700		芳賀スキー*	
ザイルナイロン30m	5	2,100	東洋レーヨンナイロン原糸*	芦森工業	11ミリ
40m	4	2,700	"	"	"
フィックスロープ (クレモナ)6ミリ	200m×3		倉レビニロン原糸*	"	
9ミリ	200m×2		"	"	
3ミリ	200m×10		"	"	梱包に役立つ
ナワバシゴ 10m	5	3,000	倉レクレモナコード(8ミリ)* 踏板は神戸製鋼*	大阪 好日山荘	2本はチョコリ ザの残品
ア ブ ミ	4	300			チョコリザ残品
キスリング	5	1,200	倉レ(ビニロン8100番)*	京都一沢製作所	
シ ョ イ コ	20	2,000	神戸製鋼(1.4ミリ硬質アルミ)*	浪速金属*,大阪好日 山荘	
赤 旗	1000	20		一沢製作所	
赤 テ ー プ	5	50			
フィックス用棒	5	900	神戸製鋼1.4ミリ硬質アルミ*	浪速金属*	5本は不足
捲 上 機	1	10,000		東京 好日山荘	
滑 車	4	1,000		"	
ワ カ ン	10	1,000		大阪 好日山荘	
細 竹	1000	10		東山二条上ル 竹屋	
ス キ ー	4	5,500		芳賀スキー*	
シ ー ル	4	300		大阪 好日山荘	

3) 炊 事 具, 燃 料

品 名	数 量	単 重 (gr)	材 質 お よ び そ の 購 入 先 或 は 提 供 先 (*:寄贈, **:値段割引)	製 作 所 又 は 購 入 先 (*寄贈)	備 考
ブリムス ケロシンストーブ	10	1,450		ホンコンで購入	ノズル調整器つ き
ブリムスプロパンボン ベ (1kg入り)	5	1,500		岩谷産業*	
" バーナー	5	800		"	
プロパンボンベ (5kg入り)	4	10,000		"	}プロパンの量は 充分であった
" (10kg入り)	13	25,000		"	
プロパン流量調整器	2	500		"	
" 充填器	3	540		"	
プロパンコンロ	2	5,000		"	
圧力ナベ	8	1,000		大阪 ガス*	4ケはチョコリ ザ残品

品 名	数 量	単 重 (gr)	材 質 お よ び そ の 先 購 入 先 或 は 提 供 先 (*:寄贈, **:値段引き)	製 作 所 又 は 購 入 先 (*寄贈)	備 考
コップ	5	1,000		秀山荘	
ナベ大 (32cm)	2	1,000		昭和アルミ*	
中 (26cm)	2	800		"	
ヤカン大 (5l)	2	550		"	
中 (2l)	2	300		"	
クッキングホイール	25cm 10ヶ	100		"	
バケツ (ポリエチ)	2	800	三井化学*		
ジョウゴ (ポリエチ)	20	10	"		
ボトル (1l入り 2l入り)	30	100	"		
布バケツ	4	800		大阪好日山荘	
ケロシンポンプ	5	30			
ブタンバーナー (キャンピングガス)	3			シウラススポーツ店	
ブタンボンベ	50			"	
メ	100C/S	300		秀山荘	
ケロシン (4l入り缶)	96缶	4,000		丸善石油*	
マッチ (寸六型)	2,000	20		京都兵庫燐工*	
ローソク (50号)	100	200		東洋ロソク**	
(30号)	200	300		"	
プロパンナイロンボンベ (100c.c.)	250	100		高木鉄工*	
プロパンナイロンボンベ用ランタン	5	1,000		"	好評
ボンベ充填器	8	400		"	
特製バーナー	10	1,000		"	

4) 雑 品

品 名	数 量	単 重 (gr)	材 質 お よ び そ の 先 購 入 先 或 は 提 供 先 (*:寄贈, **:値段引き)	製 作 所 又 は 購 入 先 (*寄贈)	備 考
バネバカリ (50kg)	2	1,200			
" (20kg)	1	900			
石けん各種				資生堂*	
錠前と鍵	300	50			福井亀之助氏の御好意で1ヶ20円
無線機 PRC-6	3	1,600		松下電器産業*	チョコリザ残品 T-1型
" ナショナル T-1	8	600		富士通信機*	F-100p型
富士通	3	600		松下電器産業*	耐寒用
乾電池単一	300	200		"	"
単二	40	150		"	"
単三	100	100		"	"
携帯用テープレコーダ	1	1,500		"	PQ-114型
ラジオ8石2バンド	3	1,000		"	T-67型
6石(ポケットブル)	5	500		"	T-53型
双眼鏡	2	1,000		千代田光学	
大工道具	1式	4,000			
番号札	300	10			
文房具	1式	2,000			有用, アタを入
布	100	100			れる
食器カゴ	1	300			有用
スポーツシューズ	10	800		オニツカ*	
目覚時計	3	500		大丸	

品 名	数 量	単 重 (gr)	材 質 お よ び そ の 先 購 入 先 或 は 提 供 先 (*:寄贈, **:値段引き)	製 作 所 又 は 購 入 先 (*寄贈)	備 考
酸素ボンベ	10	3,200			チョコリザ残品
隊旗, 国旗	10	30			医療用
発電機	1	40,000		日本電機	日本, パキスタン, AACK, バイクエンジン直結

無線機関係について

平井一正

1. 無線機

ヒマラヤ登山に無線機を使用することにより、各キャンプ間の連絡は完全になり、ひいては登頂の成否をも左右し、時に人命を救うこともできる。それだけに無線機の高信頼性、小型軽量、取扱いの簡単さ等が要求されるのである。

近年の主要なヒマラヤ登山隊は殆んど無線機を携行している。その1例を第1表に示した。このうち1956

年のマナスル隊は過去3年の経験から、マナスル氷河に固定通信網を設定し、これと移動局を組み合わせた通信網によって連絡を完全なものとした。地形からわかりだして完全な通信網を設定したのはこの隊がはじめてであるが、これは特殊なケースであり、はじめての山には一般に通用しない方式である。また1954年のデシオに率えられるイタリア隊はその豊富な遠征隊費用を無線機の方にも注いだ。すなわち、全世界と交信できる強力な固定局をアスコレに置き、K₂のふもと、それから中間ベースキャンプになる第4キャンプの固定局と連絡をとった。そして隊員相互およびキャンプ間の連絡には出力0.25ワットの移動局 (PRC-6) を使った。これもほぼ完全な通信網を山に設定した例で

各国登山隊使用主無線機¹⁾

年度	山 名	登山隊国籍	使用機名	周波数	使用最高々度(m)	重量(電池共)	登頂成否	無線機使用状態
1953	エベレスト (8888m)	英	パ イ 社 PTC-122	72	7,320	3kg	成功	おおむね良好, サウスコルから通信不良
"	ナンガパルバット (8125m)	ドイツ・オーストリア合同	テレフォン社 TELEPORT-II	150	6,000*	不明	成功	おおむね良好だが全体で2台しかなかった
"	マナスル (8125m)	日	NEC社 JSCR-536-F	6	6,500*	2.73		雑音多く不良
"	K ₂ (8611m)	米	レイセオン社 PRC-6	48	7,000*	3		余り使用せず
1954	K ₂ (8611m)	伊	"	48	7,740	3	成功	強力な固定局の使用とともに通信優秀
1955	カンチエンジュンガ (8585m)	英	パ イ 社 PTC-122	71	7,500*	3	"	おおむね良好
"	マカルー (8470m)	仏	レイセオン社 PRC-6	55	7,400	3	"	"
1956	マナスル (8125m)	日	東芝 ZS-1342Aを電気通信大学で改造	43.85	7,200	3.5	"	完全なる通信網で優秀, 登頂隊用無線機は不良
"	エベレスト, ローツエ (8501m)	スイス	陸軍 SE-101型	不明	7,870	不明	"	おおむね良好だがサウスコルからの通信不良
1958	ヒドン・ピーク (8068m)	米	レイセオン社 PRC-6	55	不明	3	"	途中故障しよく使えなかった
"	チョコリザ (7654m)	日	"	"	6,400	3	"	おおむね良好, 20日間で故障
1960	ヒマルチュリ (7864m)	日	"	"	7,200	3	"	おおむね良好
1962	サルトロ・カンリ (7742m)	日・パ合同	松下電器 T-1型	27.112	7,742	0.6	"	優秀, 登頂隊無線機で登頂報告

(註) 1) 登山隊によっては上に記した無線機1種類だけでなく、他に多くの種類をもっていたものもあるが、ここでは主に移動局をとり、そのよく使用されたものをあげた。

2) *印はキャンプ配置より推定したものである。

あるが、強力な財源がなければ不可能であろう。

一般の場合には市販あるいは特注で製作してもらった無線機を持っていくのが普通である。

山岳地帯では短波帯は混信をうけ易く、またアンテナ利得の小さい事等によりあまり用いられず、もっぱら超短波帯が用いられる。第1表でみてもわかるように、大体30ないし70メガサイクルが一番使い易いようである。100メガサイクル以上になると見通しの所以外は電波の回折損が多くて通信がむつかしくなる。ナンガパルバットに挑んだドイツ・オーストリア隊が、150メガサイクルを使っているのはこの山の特殊性、すなわちベースキャンプから各キャンプがすべて見通せるという点を考慮したものであり、一般の山では使えないと思われる。また1953年、マナスル隊は日本からヒマラヤにはじめての隊で、通信機に関する知識が不足で6メガサイクルを使ったが、これは強力なインド放送に妨害されて殆んど使えなかったという。

いかに優秀な無線機でも、ヒマラヤでは重ければ使えないものにならない。"軽い"というのが必要条件である。各国がよく使っているPRC-6型は電池共約3kgであるが、これはサブミニチュア管使用で出力0.25ワット、重量の大半を電池で占めている。3kgというのは、信頼度のある、電池管使用の無線機としては最低限であろうと思われる。しかしトランジスタの発達によって重量の点は解決された。心配された温度特性も、無線機本体を適当な保温材でおおうとかしてその取扱いに注意さえすれば、ある程度心配がないことがわかり、さらに周波数特性のよいトランジスタが開発されて、ここにトランジスタ無線機がヒマラヤに登場してくるのである。

1962年の京大サルトロ・カンリ隊が、ヒマラヤで本格的にトランジスタ無線機を使用し、通信に成功したのはじめての隊であろうと思われる。従来のものに比して約1/5の重量は殆んど重さを感じさせない。無線機はまるでカンバンをもつような気楽さで持てるようになる。世界ではじめて、ヒマラヤの頂上から無線機で登頂を報らせたという快挙は、どうしてもこの"気楽さ"がなければならなかった。従来無線機概念からでは到底考えられないところである。

今回持参したのは次の3種類であった。

ナショナルトランシーバー T-1型	
(27.112MC)	8台(4対)
富士通信機トランシーバー F-100p型	
(27.040MC)	3台
PRC-6	(55MC) 3台

(トランシーバーとは Transmitter と Receiver をくみ合わせたもの)

富士通のトランシーバーはナショナルに比して性能は劣ったが、キャラバン中に使用した。PRC-6は

ABC から C₂ までナショナル T-1 型と併せ使用したが、出力が大きい割には T-1 型と同程度の感度しかなく、C₂ より上ではすべて T-1 型を使用した。

ナショナル T-1 型の最大到達距離

ABC(5000)—C₁(5,200)

直線距離 約6km

感度やや不明瞭

(頂上(7742)—C₂(5500) 間は直線距離にすると約5km あるが感度明瞭であった。)

2. ラジオ, テープレコーダ

ラジオはパキスタン要人に対する贈物用と、実際山でニュースをキャッチするための2種類もっていった。前者はナショナル T-53 型6石のトランジスタラジオ、後者はナショナル T-67 型8石2バンドのオールウェーブラジオである。

T-67 型の感度はよく、日本の短波放送もキャッチできたし、またラジオパキスタンが報ずるサルトロ隊向けの天気予報は感度明瞭でよく聞くことができた。

つぎにテープレコーダは松下電器製 PQ-114 型を使用し、現住民の民謡、言語の採取等に大いに役立ったが、サンドストームのために往路半ばにしてモータ部分に故障を生じたことはその取扱いが不十分であったことによるだけに一層悔やまれる。

以上簡単ながら、無線機、ラジオ、テープレコーダについて記した。提供をうけた松下電器産業 K. K.、富士通信機 K. K. にお礼申しあげる。

食糧について

齊 藤 惇 生

AACK の遠征が度を重ねる毎に食糧も改善されて来た。ことが食物となると文句や苦情も極めて直接的である。いつも各食糧担当者の血と涙の歴史が綴られる。

エクスペディションはその国の産業の発達におうところが非常に大きい。ここ数年の日本の食糧産業の発達は著しい。特に時流に乗った、いわゆるインスタント食品の数多い出現は驚くほどである。

今度の食糧は、これまでの経験に基づき、今までに失敗した点を改め、そして食糧産業の発達を積極的にとり入れ、更に二、三の栄養学的な新しい試みを行なってみた。

食糧計画の基本は、これまでの遠征と若干異なっていた。ビラフォンド・ラ越えの長大な輸送があり、それ

に応じた柔軟な食糧計画を必要とした。そのために

- ① 低地食 i) スカルド〜ゴマ間
- ii) ゴマ〜B.C間(峠越えを含む)
- ② 高地食 i) ベース・キャンプ食
- ii) 高地食(攻撃食を含む)
- iii) 予備食

の5つに分けた。

パキスタン側は彼等が独自の用意をするということになっていたが、殆んど考えなかった。ハイポーターに対してはキャラバン中のために、砂糖、ミルク(粉)、紅茶、高地のためにはその他、アルファ米、乾パン、ジャム、バター、餡、肉類(羊のベーコン)を準備した。クーリーにはゴマより上で支給する砂糖、ミルク、茶、を準備した。これ等の他にポーター、クーリーに与えるようにパキスタン政府により規定されている、ダル(豆)、ギー(油脂)、インド米、岩塩、唐辛子、タバコ、マッチはラワルピンディで購入して空輸した。これはスカルドの F. S. D. (軍食糧供給所)で購入出来るかはっきりしなかったことと、スカルドの物価はビンディの数倍することが分っていたからである。アタ(小麦粉)は、サリンとゴマで買入れた。なお F. S. D. では良質のアタを100kg、乾燥玉葱若干買った。

結局日本より持参した食糧の総計は酒、タバコを含めて約1.5トン、ゴマ出発の時の食糧重量(遠征中最大)は約3.3トン、A. B. C. に集積した量は約1.1トンとなった

1) スカルド〜ゴマ間の食糧

この間は現地食を主体にした。三食ともチャパティのことが多い。チョゴリザと違って辛い良質のアタが村々で手に入った。焼いたチャパティも油で揚げたプラタも美味しかった。ただゴマで買った(実際はガガルから)のはフスマが多く質はうんと落ちた。おかずは卵、鶏、羊の料理が多い。肉は固いが、まあまあ食える。山羊乳、粗製ヨーグルトのラシーなど、よくベースの空缶と交換して飲んだ。

往きは果物はなく干杏だけ、野菜も少ない。加藤さんの指導で、菜の花を摘んで一夜漬にしたり、大根の間引菜、野生の葱を漬物にして食べた。これは好評で保存もきき、A. B. C. まで持って行って食べた。その他タンポポの根、行者葱、葱坊主など野生のもの、いろいろな食べ方を教えて貰った。こういったことは若い吾々には、殆んど欠けていることだ。今後大いに学び実行す可きことだろう。スカルドで、加藤さんの釣った魚は干して持って行った。

現地食の是非は随分論じられてきた。今度の現地食では、多分反対意見は出ないと思う。割合良質のものが手に入り、手に入りにくいと考えられるものは準備をし(良質のアタ、ギーなど)、それに、コックのタキが熱心で上手だったからである。

ただ、どうしても往きは経費節約の点から、卵や肉類を充分に買わない傾向がある。高度も低く、身体の調子も良い時に出来るだけ栄養を摂っておいたがよい。山に入ってから体力に大いに関係するからである。キャラバン中に消耗することぐらい馬鹿なことではない。金額もしれている。キャラバン中はうんと御馳走を!! これは私の得た平凡な結論の一つだ。

とるに足らぬことだが、現地食にも欠点がある。日頃慣れてないものを食べるために、腸内細菌が適応せず、放屁が多くなる。これが実に臭い。パキスタン人が殆んどやらないのは不思議なぐらいだった。

2) ゴマ〜B.C.間

ゴマからビラフォンド下の B. C. まで部落がないためにクーリーの食糧は与えねばならないと考えていた。ところがこの3日間の行程はクーリーの自分持ちということになり、食糧、経費の面で大助かりだった。クーリー用に用意した、ミルク、茶、砂糖はサブとポーターに廻した。実際これらの飲料の消費は物凄く。サブ、ポーターも B. C. までは現地食でまかされた。

ついでにクーリーの食事を述べてみたい。アタを薄焼のチャパティ、厚焼のノン、又ギーを混ぜて炊いたり、水と塩で煮て固いのりのようにしたりして食べる。また麦こがしを水で練ってツアンバ風にして食べているものもいた。ギーを持っている者は上等の方だ。部落にいれば山羊乳や、ラシーというヨーグルトを飲む。羊や鶏、卵を食べるのは時々らしい。時にはチベット風のバター茶を飲むものもいた。ビラフォンド・ラ越えでは、規定どおりのアタ、ダル、ギー、ミルク、砂糖、茶、タバコを配給した。ダルはギーを混ぜて煮る。時にはアタで、バラエというスイトンを作る。米はギーと塩と唐辛子を混ぜて炊く。日本米でも結構美味そうに食べる。朝飯は普通ミルク・ティー杯のようだ。干杏はたいいて持っている。果肉を食べ、殻を割って種を食べる。これは貴重なビタミン源になっていると思う。実際診療していて、はっきりとした VB₁、VB₂、VC、不足の患者には出合わなかった。アタにフスマが多いのもかえて良いことだ。しかし全体的に驚くほど粗食でそして強く、耐寒性も充分だ。栄養学的に詳しく調べたら面白い結果が出そうな気がする。

3) B.C.食, 高地食, 予備食

隊員用として、B. C. 食、高地食を各300人日準備した。15人日分が完全レーションになって1ケのカートン・ボックスに入っている。1カートンは約15.5kgである。完全レーションの他に B. C. 食には4カートン、高地食には4つのワイヤーバンド・ボックス(各30kg)のサプリメント・ボックスを用意した。この中には、嗜好品、調味料、その他副一的なレーション

に変化とうるおいを与える食品が入っている。B. C. 食を多くしたのは、峠越えの作戦の変化、偵察隊の行動、サルトロ終了後の他所への行動に伴って、直ぐ応じられるようにしたためである。これは内容により二系列に分けてある。

予備食は5カートン・ボックスで、米、ミルク、茶、調味料などが主で、最低生きのびられる線で、アレンジしてある。

B. C. よりピラフォンド・ラ、A. B. C. の間は、トラヴェル食を10カートン用意した。B. C. 食はA. B. C. より上で使用した。

これ等の行動食では次のような点に特徴があった。

i) 出来るだけ無理せず、スムーズに栄養を摂取出来る。

ii) インスタント食品の良い面を活用して、早い調理、美味しい食事が作れる。

iii) 今までのヒマラヤの食糧の既成概念を破って、油類を積極的に使用した。

iv) 蛋白質の食品が多い。

v) 日本の食品も多く用意した。

高所における水分摂取の必要はいうまでもない。紅茶、ミルク、ジュース、ココア、コーヒの需要は驚くほどである。これ等は、量も種類も相当用意したが、まだ不足した。水分摂取と一緒に栄養もとれたら、一番よい。勿論砂糖は1人1日1/4ポンドも準備したが、これも十二分といいにくい。だがカロリー源として砂糖だけを使うと甘味のために限界がある。既にマナスル隊で使われているが、今度はブドウ糖も併用した。最近、良質のくせのないものが出来ている。甘味が少ないので大量に使える。吸収も早く、エネルギー源として最適である。ミルクは完全栄養品だから、どしどし使う可きだ。1人1日30gでは不足した。

インスタント食品としては、アルファー米、寿司米、お茶漬ライス、松茸ライス、ラーメン、マッシュ・ポテト、スープの素(コンソメ、ポタージュ、中華スープ)、凍結乾燥の肉、卵、ホーレン草、葱を使った。アルファー米は味付してないのが飽きがこないでよい。傑作は凍結乾燥食品である。氷結させて真空装置の中で水分を水のまま昇華させたものである。お湯につけると1~5分で完全に元にかえる。栄養も損われていない。真のインスタント食品といえるものである。肉には生肉、煮た肉、味つけしたそばろ肉、があった。肉井、卵井、ベーコン・エッグ、卵焼、ミルク・エッグ等楽しめた。ホーレン草のおしたしも美味しい。葱はその香りが実に新鮮な感じだった。7000mでも生肉の料理、生野菜が食えるのである。マッシュポテトもそのまま食べたり、スープに入れたりして、重宝した。

油脂類は今までカロリー源としての有利性は認めら

れていた。しかしその害の方が強調されることが多かった。ヒマラヤでは特にその燃焼に酸素を沢山要するので、不利ということになっている。だが最近の脂質の生化学的研究が発展するにつれて、不可欠脂酸(必須脂酸、E. F. A.)の持ついろいろな特殊的意義が解明された。生体諸組織の酸素欠乏に対する抵抗性を保持する。心臓の筋肉はE. F. A.を多量に消費する。心筋活動のエネルギー源として大きな意義がある。毛細血管の透過性を正常に保つ、寒冷ストレスに対し抵抗性をます、動脈硬化を防ぐ等である。E. F. A.を摂るには、それを多量に含んだ油を出来るだけ生で食べたがよい。今度はサフラワーという植物の種からとったサラダ油を使用した。野菜にかけたり、チャパティに付けたり、スープに入れたり、キャラバンから高所キャンプまで常時使用した。味も良く、スムーズに摂取出来る。

蛋白質としては、ミルク、凍結乾燥の肉、卵の他にサラミ、コンビーフ、羊のベーコン(豚はパキスタンでは工合が悪い)を用意した。チョゴリザの時のように腐敗せず、好評だった。

高所食の1カートンの1例と最高キャンプのC₅に持っていた内容は次のようである。

高所キャンプ食(種類)	(15人日)(単位量)	数
乾燥米(α米)	180g	15
松茸ランチ	100g	5
鯛茶漬飯	70g	8
五目寿司	540g	1
ラーメン	140g	9
乾パン	120g	12
バター	225g	1
ジャム	150g	1
コンビーフ	80g	1
サラミソーセージ	200g	1
乾燥果物(リンゴ)	200g	2
野菜(熱乾)	40g	4
砂糖	450g	1
ブドウ糖	500g	1
粉ミルク	450g	1
食塩	150g	1
味の素	40g	1
佃煮類	100g	1
餡	100g	1
ココア	75g	1
ジュースの素	110g	1
ヨーカン	90g	1
ビーナツ	60g	1
スープの素(コンソメ)	50g	1
(中華)	5g	9

(ポタージュ)	60g	1
(中華風)	25g	1
粉味噌	20g	1
オイル、ツナ缶	200g	1
マヨネーズ	100g	1
しいたけ	25g	1
兵糧丸	240g	1
マッシュ	若干	
最高キャンプに用意した食品(8人日)		
(種類)	(単位量)	数
乾パン	120g	6
砂糖	450g	2
マッシュ・ポテト	120g	1
アラレ	100g	1
ウエファース	30g	5
干リンゴ	80g	1
トマト・スープ	60g	2
中華風スープ	25g	1
コンソメ	5g	14
味の塩	100g	1
味の素プラス	50g	1
乾燥米	160g	5
アルファー化餅	150g	1
凍結乾燥肉	200g	1
葱	20g	1
ホーレン草	40g	1
カタクリ粉	80g	1
餡	80g	4
羊カン	90g	1
ティー・バック	3g	30
油漬アサリ缶	120g	2
マヨネーズ	100g	1
粉ミルク	450g	1
兵糧丸	240g	2
コンビーフ	80g	1
サラダ・オイル	250g	1
ブドウ糖	200g	1
葉唐辛子	30g	1
乾燥卵	350g	1
隊員の食欲は極めて良好であった。ピラフォンド・ラ越えによる高度順化がよかったせいもあるだろう。ピラフォンド・ラ越えのころは米の規定量の180gは多いような感じがしたが、だんだん、不足するようになっていった。		
あったほうがよかったという食品に、チョコレート、干ブドウがあげられる。老年組からは朝はオートミルのような柔らかいものが欲しいという声が出た。鶏や羊を生きたまま連れて行くという案は、ピラフォンド・ラ越えで不可能だった。しかし、割合便の往		

復があり、殺したものが時々A. B. C. やC₂に届いて食卓がうるおった。

胃腸病の発生は少く、軽度の胃障害、腸内異常発酵が見られたぐらいだった。ただ、A. B. C. に来た杏とリンゴを食べた時、殆ど全員が数回の下痢に悩まされた。熟しすぎたり、日数のたった杏は、病原菌が附着繁殖しているようだ。

ジョイントという点から、パキスタン・メンバーの事も述べてみたい。パキスタン人は一般に食物に関し極めて保守的である。豚肉は勿論食べないし、酒は飲まぬ。新しい食物に余り興味を示さないし、食べようとか、慣れようとかしかない。ベグ教授、バシール大尉はその代表だ。チャパティ、プラタ、鶏のカレー煮、ミルク紅茶、羊肉の米料理を喜ぶ。ミルク紅茶も粉ミルク入りは嫌う。純粋のバルチスタン料理のバラエも好まない。パキスタン側の持って来た食品をA. B. C. で見た。アタ、紅茶、ブラウン・シュガー、エバ・ミルク、ダル、フライしたダル、麦を炊って砂糖でまぶしたもの、干ぶどう、殻つきのままのアーモンド、紫色した生玉葱、植物性のギー、岩塩、ニンニク、唐辛子、その他香辛料が約7種類、オートミル、コーン・フレイク、甘味ビスケット、インド種米、これだけだった。パキスタンの上流の食生活は、朝は英国風で、昼、夜はパキスタン風のようなのだ。

ラヂャ・バシール(R. Bashir)だけは他のパキスタンメンバーと非常に違っていた。ウイスキーも飲む。高所では燃料を食うからチャパティは不適当だという。我々の食事を積極的に食べる。のり、梅干、塩こぶまで食べた。魚類は慣れていない。スープは洋風の方が好きだ。しかし、彼はかなり努力していたに違いない。オートミルを出してやった時に、抱きかかえて喜んでた。そんなだったら、もっと用意しておいてやったらよかったと思った。連絡がうまくいかなかったのだから仕方がない。

最後にコックのことを述べたい。今度のコックは実に拾いものだった。スカルド近くの間で、タキという名である。ピアフォ(Biafo)の探検隊に入って越冬した経験がある。スカルドで庖丁を2本も、羊の骨を切ってボロボロにしてしまった。これは、えらい奴をやとった、チョゴリザの二の舞かとあざらめていた。

ところがこれがなかなかの腕達者で、また仕事に熱心だったのである。アシスタントのハツサンも働き者だった。キャラバン中は朝のお茶、昼はパーティに先行して、火を作り、お茶を湧かし、卵をゆでて待っている。料理は、唐辛子のいれ過ぎさえ注意すれば、美味しいものを作る。新しい食品も、使いこなす頭を持っている。それに彼はコックの仕事に誇りを持っていた。自分の仕事にはポーターも寄せつけない。荷物もサブザックだけしかつかない。火の側に荷物をおく

クーリーをぶんなぐったりまでした。彼の食糧管理はまた完璧で、サーブ用のものを、ポーターにやったりは絶体しない。彼の腕前が本当に分ったのは、帰りのキャラバンだった。アイスクリームを作ったり、お菓子をやいたり、ロースト、チキンを仕上げたりで、これならもっと前からいろいろやらせておいたらよかつたとみな口惜しがった。ただアイスクリームは寒い夜に二晩もつづけて作ったので、評判は悪かった。最後の分配品は彼が一番多かった。炊事道具は殆んど独占したからだ。しかし、彼の作った御馳走を思い出してみな黙認していた。

スカルド——ゴマ間 サーブ用

(ワイヤーバンドボックス 2箱) (計60kg)
ポリ=ポリエチレン ハイ=ハイゼックス

品目	数量	包装形式	N.W. (1ヶ当) (gr)	G.W. (1ヶ当) (gr)
乾燥米	16	ハイゼックス	180	180
バター	6	缶	225	300
チーズ	10	アルミ・箱	170	205
ジャム	3	缶	375	450
マーマレード	3	缶	375	450
オイル・ツナ	6	缶	200	280
マヨネーズ	2	ポリ瓶	200	220
スープの素 (キューブ)	16	ハイ	43	4.3
〃 (中華)	30	ハイ	10	10
〃 (ポタージュ)	6	紙パック	60	65
角砂糖	19	ハイ	450	470
粉ミルク	6	缶	450	600
紅茶	3	缶	450	630
コーナー (インスタント)	2	ガラス瓶	57	220
ココア	16	紙パック	75	85
緑茶	1	缶	400	580
抹茶	1	缶	40	100
レモン・パウダー	1	ポリ瓶	200	340
粉末ジュース	10	セロ・パック	100	110
コブ茶	1	缶	50	120
ヨウカン(塩味)	2	アルミ・パック	650	700
〃 (甘)	1	アルミ・パック	300	340
アラレ	1	ポリ袋(缶)	2,000	2,000
味の素	1	ガラス瓶	100	250
〃	4	ポリ袋	40	45
胡シウ油	2	缶	30	80
山シウ粉	2	缶	30	80
唐辛子(一味)	1	缶	30	80
〃 (七味)	1	缶	30	80
辛子粉	1	缶	30	80
カレー粉	3	缶	30・60	80
ガーリック粉	1	ポリ瓶	125	150

塩	5	ハイ・パック	150	150
味塩	11	ポリ・パック	100	105
シウ油	1	ポリ瓶	350	400
酢	1	ポリ瓶	250	270
リノール油	8	ポリ瓶	1,100	1,200
八丁味噌	1	ハイ・パック	200	200
梅肉	1	曲物	155	175
焼海苔	1	缶	100	210
紅生姜	1	ポリ瓶	120	140
スルメ	3	ハイ・パック	200	205
佃煮	4	ハイ・パック	100	105
ドロップ	46	セロ袋	135	145
乾燥野菜	36	ハイ・パック	25	30
フクラシ粉	1	缶	450	550
片栗粉	1	ハイ・パック	100	110
ベニーポッテ	2	セロ	120	130
ソフナー	2	缶	300	400
トロロコブ	2	ハイ・パック	100	105
理研	1	瓶・箱	180	780
スパイスセット	1	ハイ・パック	150	160
干鱈	1	ハイ・パック	110	120
カレー	1	ハイ・パック	20	25
ワカメ	2	セロ・パック	20	25
うに	1	曲物	150	175

その他、緊急時のために各自以下の内容のものを携帯。(各品1ヶ宛)

ソーレンジ	15		100	
兵糧丸	15		240	
コンデンス	15		130	
羊かん	15		150	

ゴマ——A. B. C. 間

{S. Box × 1ヶ + 150人日(15人日 × 10 Boxes)}

S. Box は supplementary Box
○印は S. B. に入れたもの。

品目	数量	包装形式	N.W. (1ヶ当) (gr)	G.W. (1ヶ当) (gr)
乾燥米	120	ハイ・袋	180	180
鯛飯	80	ポリ	70	80
松タケ飯	50	紙	100	110
ラーメン	90	ハイ・パック	140	150
乾パン	150	〃	120	125
バター	15	缶	225	300
チーズ	10	アルミ紙箱	170	205
ジャム	5	缶	375	450
ママレード	5	缶	375	450
オイル・ツナ	10	缶	200	280
マヨネーズ(小)	10	ポリ瓶	100	120
スープの素 (キューブ)	20	ハイ・パック	50	50

〃 (中華)	90	ハイ・パック	5	5
〃 (ポタージュ)	10	紙パック	60	70
砂糖	30	ハイ・パック	450	450
粉ミルク	10	缶	450	600
ジュースの素	10	セロ・パック	110	110
アラレ	20	ポリ袋	100	100
塩	10	ハイ・パック	150	150
リノール油	5	ポリ瓶	200	220
サラダ煮	10	ハイ・パック	100	100
ドロップ	50	セロ袋	135	140
乾燥野菜	30	ハイ・パック	40	40
カタクリ粉	2	〃	200	210
ベニーポッテ	4	セロ袋	120	130
ソフナー	1	缶	300	400
トロロコブ	2	ハイ・パック	30	30
ガーリック類	2	ポリ瓶	30	50
わかめ	2	セロ・パック	10	10
うに	1	曲物	150	175
コンビーフ	20	ポリ袋	80	85
むぎえび	2	ハイ・パック	200	200
塩ぎけ	1	〃	500	500
紅茶	4	缶	450	640
インスタント コーヒー	3	ガラス瓶	57	230
インスタント ココア	18	紙	75	90
緑茶	2	ポリ瓶	30	50
抹茶	1	缶	30	50
レモンパウダー	2	ポリ瓶	30	50
コブ茶	1	缶	50	100
羊かん(塩)	1	アルミ	650	700
羊かん (スルガヤ)	1	〃	300	340
強味の素(瓶)	2	プラ瓶	40	40
〃 (袋)	10	ポリ	40	40
シウ粉	2	ポリ瓶	30	50
山シウ粉	2	〃	30	50
七味	2	〃	30	50
カレー粉	2	〃	30	50
ガーリックP	2	〃	30	50
味の素	10	ポリ	100	105
シウ油	2	ポリ瓶	350	400
酢	2	〃	350	400
八丁味噌	1	ポリ	200	200
梅肉	1	曲物	155	175
ヤキノリ	1	缶	100	210
シソの粉	3	ポリ瓶	30	50
かんだい	1	ハイ	110	120
ひら	1	〃	150	160
マルボシ	1	〃	130	130
サラミ	10	ポリ	200	200
ソーレンジ	10	ポリ	200	200
チウイム	30	〃	20	20

葉唐カンヅメ	3	缶	170	220
すめるめ	1	ハイ	200	205
乾燥リンゴ	5	〃	200	200
あざりくんせい	10	缶	105	170
ふくしんづけ	1	〃	450	560

B. C. 食

15人日 × 20ボックス(カートン) = 300人日
サプリメント 4カートン・ボックス

品目	数量	包装形式	N.W. (1ヶ当) (gr)	G.W. (1ヶ当) (gr)
乾燥米	240		180	180
松タケ飯	100		100	100
タイ飯	180		70	70
五目ずし	20		540	540
ラーメン	180		140	140
カンパン	168		120	120
スパゲティ	60		250	250
粉もち	30		140	140
バター	40		225	300
チーズ	20		170	200
ジャム	20		150	170
ママレード	20		150	170
コンビーフ	20		80	85
乾燥野菜	80		40	40
乾燥果物	40		200	200
砂糖	80		450	450
塩	20		150	150
味の素	20		100	110
強力味の素	4		25	50
味の素(青袋)	20		40	40
ドロップ	100		100	100
ジュースの素	20		110	110
コンソメ	40		50	50
コンソメ(中華)	108		5	5
ポタージュ	40		60	70
梅肉	3		120	200
コナ味噌	8		20	20
トリオ	4		20	20
鯨肉	20		200	250
ビーフン	10		120	120
オートミール	3		450	600
うどん	3		150	150
そば	12		150	150
サラダ油	6	ポリ瓶	1000	1100
オイルツナ	16	缶	200	280
アサリクンセイ	8	〃	105	170
マヨネーズ	20	ポリ瓶	100	120
サラミ	2	ポリ	200	200
ニシンウマニ	8	ハイ	100	100
カニ	4	缶	220	310

ポーター食

24人日×4カートン=336人日

品 目	数量	包装形式	N.W. (1当) (gr)	G.W. (1当) (gr)
乾パン	336	ハ イ	120	130
ジャム	28	缶	375	450
マレード	14			
砂糖	84	ハ イ	450	470
粉ミルク	14	缶	450	600
コンビーフ	42	ボ リ	80	85
ドロップ	84	セ ロ	135	140
紅茶	7	缶	450	610
乾米	336	ハ イ	180	180
バター	42	缶	225	300
塩	14		150	150

ガガル—B.C. 間

砂糖	16	ハ イ	450	600
紅茶	21	缶	450	630
ミルク	2	リ	450	600
乾パン	32	ハ イ	120	120
ジャム	12	缶	375	450
塩	4	ハ イ	150	150
スキムミルク	4	紙	120	140

クーリー用 (ゴマ~B.C. 間)

2Boxes 270人日×3日=810人日

品 目	数量	包装形式	N.W. (1当) (gr)	G.W. (1当) (gr)
砂糖	30	ボ リ	500	500
紅茶	11	缶	450	630
スキムミルク	20	紙 箱	200	240

(実際は食糧は支給せず、一箱は盗難(?)一箱は隊員用として消費した。)

クーリー用 (B.C.—A.B.C. 間)

4Boxes 30人×30日=900人日

砂糖	76	ボ リ	500	500
紅茶	14	缶	450	640
スキムミルク	30	紙 箱	200	240

写真について

上尾庄一郎

今回遠征の写真係として、あるいは後刻参考になるかと思われる点を、覚え書としてここに付記する。

(A) 写真に関する基本方針

- オフィシャルレポーターには林・平井・高村・上尾がこれに当り、写真に関しては他隊員に優先する事。
- 8mm映画は登攀に入るまでは林、上尾が撮影し、以後は全隊員で撮る事。
- オフィシャルレポーターは全期間を通じて同一種フィルムで撮り、他隊員もなるべくこれにならう事。
- カラーフィルムはネガカラーを主力とするが、オフィシャルレポーター一人分だけカラー・リバーサルを用意する事。
- カメラは原則として各自所有しているカメラをオーバホールして持って行く、ただし会社より貸与されたカメラに関してはオフィシャルレポーターを優先的に使用させる事。
- スカルドにて各隊員に各自全期間を通じ必要と思われるフィルムを分配し、各人の責任において保管せしめ、分配後残るフィルムは、サルトロ・カンリ登頂後他の山へ転進出来る場合にそなえる事。

(7) 頂上でのカラー撮影はコダクロームでおこなう事。

(8) 現地での現像はおこなわない事。

(9) パキスタン側隊員のためには特にカメラ、フィルムとも用意しないこと。

(10) フィルム、特にカラーフィルムはチョコゴリザの時に比べて節約する事。

(11) 黑白フィルムは Fuji Neopan SS (ASA 100) に統一する事。ただし Neopan SSS (ASA 200) も少量持って行く事。

(12) フィルターは全カメラに Y₂, UV を隊で用意する事。

(B) 遠征を終った反省

a) フィルムの登録、検閲に関して

- 以後の遠征隊ではフィルムの種類を出来るだけ限定する事。
- 入国時、登録するフィルム数にサバを読むなら全種類のフィルムについて行なう事。
- 検閲のため提出するフィルムは撮影者別にせず種類別にすること。

- 出来るだけ現地(相手国内)で現像処理する事。
- 検閲方法は入国時にくわしく具体的に聞いておく事。

b) 撮影結果に関して

- ネガカラーは紙プリントをする時には黑白、カラー両用出来て便利であるが、スライドを作成した時、発色がカラーリバーサルに比べて相当落ちる事。(コダカラーでも同様)
- 国産(富士)のカラーリバーサルはコダクロームに比べ決定的な欠点はない事。
- カメラは出発前にあらかじめ撮影し良好な結果をたしかめてから持って行く事。今回はニコレックス8がピンボケ、露出ムラのため貴重なシーンを失敗した。これは当然の事だが出発前は忙しさにまぎれて等閑にする事が多い。特に注意すること。

にまぎれて等閑にする事が多い。特に注意すること。

(4) 高所では撮影者(特に映画の)に労力がかかりすぎるから、出来るだけ多くの隊員で多くの場面の撮影をする必要がある事。

(5) 合同遠征隊の場合、相手側から要求がなくてもカメラ、フィルムは相手方の分も用意しておく事。

(6) ボラロイドカメラを持って行くと偵察、新聞社への現地報告などのため有効だと思われる事。

以上で今回の遠征の写真に関する覚え書を終るが、最後に今回使用したカメラ機材、材量等の一覧表を付しておく。

隊員別写真機材一覧表

隊員名	カメラ	レンズ	その他機材	使用フィルム				備考
				カラー	数量	黒	白	
四手井	キャノン7	35mm 50 135	双眼鏡 (キャラバン中)	FCN35	16	FNSS35	8	
加藤	マミヤフレックス35	35 50	双眼鏡			FNSS35	5	
林	ローライフレックス	75 75	双眼鏡 ストロボ 脚	FCN120 KCN120 FC8	19 8 39	FNSS120	35	
斉藤	キャノンP オリパスペンS (頂上用)	50		FCN35	11	FNSS35	6	
平井	キャノンRP オリパスペンS ミノルタA ₂	50 135 45		FCN35 KCN35 FCR35	26 4 1	FNSS35	16	ミノルタA ₂ 故障
谷	ミノルタA ₂	45 75		FCN35 ACN35 FC8	17 1 1	FNSS35	21	
高村	キャノンP オリパスペンS (一部) ニコレックス8	50 135		FCR35 KCR35 FC8	29 5 8	FNSS35	11	ニコレックス 8不調
岩坪	オリパスワイド	35				FNSS35	3	オリパスワ イド故障
前小屋	オリパスワイド オリパスペン (一部)	35				FNSS35	6	
上尾	キャノン7 ビスカワイド16 キャノンズーム8II	35 50 100	三脚	ACN35 FCN35 FC8	36 1 43	FNSS35 FNSS35 FNSS16 FNSS35	2 2 21 1	ビスカワイド キャノンズ ーム各2台

FCN35 : Fuji Colour Negative Film 35mm (12EX) FNSS35 : Fuji Neopan SS35mm (36EX)
 KCN35 : Kodacolor Film 35mm (20EX) FNSS16 : Fuji Neopan SS16mm (15EX)
 ACN35 : Agfa colour Negative Film 35 (12EX) 以下これに従う

遠 征 隊 用 フ ィ ル ム 数 量 一 覧 表

フィルム種類	総数(本)	使用数	備 考	フィルム種類	総数(本)	使用数	備 考	
								フィルム種類
黒 白 フ ィ ル ム	FNSS35	230	101	カ ラ コ ラ ム 側 1 本	FCN35	100	このうちパキスタン側1本	
	FNSS35	10	2		FCN120	20	19	
	FNSS120	60	48		FCR35	30	30	このうちパキスタン側1本
	FNSS16	50	21		KCN35	10	4	
	FNSS8	3	1		KCN120	10	8	
					KCR120	10	8	
			FC8	100	91			

サルトロ・カンリ遠征雑感

——カミシモをぬいだ話——

1. サルトロ 雑 感
2. サルトロコボレ話
3. サルトロの反省
4. サルトロ新兵の言

サルトロ 雑 感

—パキスタンの人々—

四 手 井 綱 彦

今度の遠征隊は日パ合同隊であった。ジョイントの相手はカラコラム・クラブ (Karakoram Club) である。パキスタンの登山人口は大きい山があることに逆比例して少ない。登山はマイナースポーツである。最近軍隊が登山やスキーの訓練を始めているそうである。今まで他の国の遠征隊がジョイントをやっている相手は主として軍人である。最近市民の登山団体としてラホール (Lahore) にクライマーズクラブ (Climbers Club) というのがあるが、カラコラム・クラブの連中にいわすと、あれはハイカーのクラブだという。パキスタンでは登山というよりハイキングに類するものが盛んになりつつあるようである。一日に何哩を歩いたとか、何哩の行程を何日で通ったというレコードがスワトー辺りの峠越えの道で行なわれている。

とにかく、カラコラム・クラブはこの国最古の最大のクラブであることに間違いはない。アヌブ・カーン大統領が最高のパトロンであり、フンザのミール等もパトロンとして名前をつらねている。副会長が二人おり、一人は K₂ ヘルエズンとして行ったアタ・ウラ (Ata-Ula) であり、もう一人が今度パキスタン側のリーダーとして参加したベグ (Beg) 教授である。会長は昨年の夏行ったときのミーティングでも会えなかったが、西パキスタンの教育長をしている人で、若い時はクリケットの選手だったという。登山家ではないがスポーツの世話をよくやくし、ベグさんにたのまれて会長をやっているといっていた。帰路ラホールでお茶に招かれたが、立派な屋敷で、庭内に果樹が沢山あり水牛の親子がかわれていた。

ベグ教授はパンジャブ (Punjab) 大学のイスラミヤカレッジ (Islamia college) の副学長というような地位にいる物理学の老先生である。イスラミヤカレッジは数あるカレッジの中でも古い有力なカレッジで、彼の教え子はいたるところにおり、なかなかの有名である。飛行場のロビー等で、ベグを知っているとい

う人々に度々出会った。帰路訪問した原子力センターでも、所長はじめ所員は殆んど彼のお弟子さんか、孫弟子であった。ラワルピンディで挨拶にいった文部次官も彼の教え子で、登山学校に財政的援助をするといっているが、一寸も具体的に進まないの、よく話しておいてほしいと依頼されたりした。ハンターから山登りに入ったと自分で話してくれたが、小がらであるが仲々達者な老人である。AACK とも古くから接触があり、今西錦司君がはじめてカラコラムに入った時以来で、スワトの藤田隊、松下隊も彼と同行しており、チョゴリザ隊からも装備をゆずりうけている。

ベグと二人でカラコラム・クラブを動かしているもう一人がある。ゼネラルセクレタリーのハイヤット (Hayat) 氏である。彼は貿易商を営んでいる。日本の商社の代理店をやっていたこともあるらしい。ヨーロッパへも行っており、パキスタン人としては進歩派にぞくする。パキスタンではどの家庭に招待されても奥さんがパーティには顔を出すことはないし、お顔等出さない。ハイヤット夫人は皆といっしょに食事し、食事の前にはカクテルが出た。彼はラホールでは二番目のワルだから注意しなさい、しかし君達はお金もっていないから心配することはないと、ラホール駐在のM商事のS氏がしんらつな批評を話してくれた。なかなか活動家である。一昨年高村君と二人でベグ、ハイヤットを相手に合同登山の打合わせをしていたことである。クーリーが事故死したときの補償金は分担できない、しかし安くなるように交渉すると、思いよらぬことをハイヤットに言われて二人ともア然とした。AACK もこの程度の人物を養成しないと合同登山やるのはむずかしいなと思ったことである。このハイヤット氏を相手に渡り合ってわが隊の会計をあずかる人文科学者は、立換金をとり上げるのに成功したのであるから、そう心配したものではないかもしれない。ハイヤット氏はラホールの旧家であると自称し官筋筋にも知人が多いといっていたが、パキスタン隊がおくられて山へ入ってきた時には、ラワルピンディ (Rawalpindi) から空軍の飛行機を出してもらってスカルド (Skardu) までとんでいる。帰日も彼等は荷物をスカルドに置き放してかえってしまったが、これも空軍の飛行機がとりにきた。丁度その時、私達も飛行

は4月5日の朝6時だった。見送りは平井夫人ひとりだけだった。黒いベレーに白いレインコートの姿が誰もいない埠頭にいつまでも立ちつくしていた。汽笛がまだ肌寒い春の朝もやのなかに、ポーポーと響きわたった。ベベ・ル・モコが波止場に、ギャビイが船の上だったが、ベベは別れの辛さでわが身を刺した。そんな出発だった。

最初の朝食は簡素だった。サロンでボーイにうやうやしく給仕されると、まことにくすぐったかった。「ぼくらで勝手に食います。」と言って彼はニヤニヤしただけだった。朝が余り簡素だったので心配した。1日500円ではこんな調子の飯がつづくだろう。栄養失調になるぞ、港、港で食料を買ひこもう、と相談した。ところが昼、晩ととてつもなく御馳走になった。やっと食べきれぬくらいだ。夜はお茶とケーキが出る。狐につままれた気になった。それから豪勢な毎日がつづく。平井がメニューを発見してサロン士官より一品われわれが多いぞと注進してきた。冷蔵物だからだんだん味は落ちていったのはしかたがないが、こんなにたくさんと思うくらいだった。谷はそれでも全部をきれいに食べ、飯も何杯もおかわりした。育ちのいい上尾はお菜だけ食べて飯は1杯やっとな。平井と私は辛うじて2杯だった。

カラチについてから御馳走を食べられた秘密がわかった。ジョニー・ウォーカーをよく飲ましてくれた機関長が次のように語った。

「司厨長は実際よくやってくれました。あなた方はなんせ1日500円の割でしょう。当たり前だったら何の御馳走も出来ないのです。」

司厨長は、この航海でもう定年で船を降りなければならぬと淋しそうに言っていた。戦時中は数回船が沈んで海に浮かんだそうだ。上陸前に私たちの散髪もしてくれた。白髪まじりの頭をいつもきちんと分けたほんとうに親切的な海軍の男だった。そしてカラチで船の人をパキスタン料理に招待した時、邪魔になりましたから、とどうしても来なかったほど控え目の人だった。

◎船の中で身体を鍛えておけ

印パ航路は太平洋などに比べると余り揺れないそうだ。事実船酔いらしいものを感じたのは、沖繩の沖を通る時ぐらいだった。こんな時は横になって眠っているにかぎる。

門司を出てからトレーニングを始めた。甲板の上で午後三時から体操、縄飛び、腕立伏せ、指のにぎりひらき、ザンパーノと名付けたクレーンの金具の持ち上げ、それに上甲板から後甲板へと駆足。駆足は谷、縄飛びは平井が一番だが、ザンパーノは弱い。ローリングする時に縄飛びするのはなかなかむずかしい。終る

と明治屋のジュースを飲み、海水の風呂に入り汗を流す。

機関部の人が甲板なんかより、エンヂンルームの階段の上り、下りをやったらよいと言ってくれたが、こ

こは40°C以上もある暑さ。のぞいただけで止めた。こうして、カラチにつく頃は心身ともに全く健康になっていた。

◎戦争はいやだね

香港に着くと笹谷が早速ランチで迎えに来てくれた。彼は36年卒のA.A.C.K. 会員。大阪商人のド根性を発揮せんと、ここで独力で商売をやっている。ここを通過するA.A.C.K. 会員はもれなく彼の歓待を受ける。

彼は私たちに広東から上海と、本場の中華料理を御馳走して栄養をつけてくれた。

香港は一日しか停泊しない。もっとこの雑然として金と貧困、悪徳と虚栄が渦巻いている奇怪なこの街を案内してもらいたかったが、食物で終わってしまった。ランチが出る時、彼は大きな声で「A.A.C.K. 万歳」と叫んだ。われわれは「ベベ頑張れ！」と返した。ランチがグラグラと揺れて棧橋を離れた。よき友とうまい食物だった。

翌日出港が少し延びたので、また、上陸して、九龍や、香港に最近建った大丸デパートを見に行ったら。弗が乏しくなりかけたのと、探求心から電車は一階の二等に乗った。肥ったオッサン車掌が「サア、ドウゾノツクダサイ。」と話かけてきた。「入口は混むから奥へ、料金はいくらです」と親切してくれる。切符を切る暇に彼はかなりしっかりした日本語でしゃべる。「香港では大東亞戦争(!!)で30万人死んだね。本当に戦争はいやだね。」

彼はそのことばを怒ったようでもなく、恨むようでもなく、にこにことして、もうあんなことは止めましょうといった調子で話す。私たちはなんだか穴にでもはいりたいような気がした。私は、蒋介石の「暴に報いるに暴を以てせず」ということばを思い出した。中国人の心の大きさの一端にふれたような気がした。ほんとうに戦争はもう止めよう。

◎某月某日

とある所で、とある映画を見る機会があった。フランス映画だった。いちばん純心なAは、なんたる醜悪事、ショックだ、と頭をかかえこんだ。Bは、何かを覚えようと一生懸命見ている。Cは、今まで見たやつよりいちばん見ごたえがあるぞと思った。いちばん若くていちばん反応のありそうなDが、案に相違してフンといった顔をしていた。

BはAの様子を絵入りで日記に書いた。CはAに対

して醜悪事でないかと教えた。Dは何事もなかったように「円月殺法」を読んでいた。

◎明日の夕方

戦後の日本では、バナナは高級果物になってしまった。これを一度腹いっぱい食べてみたいと日本人はみな思っている。

もともとバナナなんかは、南方では極めて大衆的なものだ。シンガポールに着いたら、ある、ある、長いものや、短いモンキーバナナが大きな房のままでもどしりとぶらさがっている。4人の意見は一致した。夜、裏街探訪に行った時、一軒の果物店に立ち寄った。中国人の店だ。100本以上もついた大きな房が900円ぐらい。まだ青い。「いつ頃食べられようになるか。」と聞くと「トゥモロウ・イブニング」と言う。それならというわけで早速買いこむ。船に帰ってから、皆トゥモロウ・イブニングをこどものように待ちかねた。しかし、待望の時刻が来てても少しも、バナナは変化しない。一本むいてみたが、ゴリゴリ。明るる夜も、その明るる夜も、なでても、もんでも固かった。騙された気がついた時は、もう船はインド洋上を走っていた。

一週間もたつて、やっとな2~3本色が変わり、食べられるようになった。そして次から次にどんどん熟した。食べても食べても熟れた。だんだん見るのもいやになってきた。ゴアに着いた頃には、黒く腐ったのが5~6本哀れな格好で残っていた。

◎インディア・ノーグッド

ポルトガル領だったゴアは、今インド領だ。インドが武力解放をしたからだ。鉄鉱石積出しの港であるゴアのモルムガオ港に着いたのは4月27日だった。私たちは、このゴアがどう変わったか、幾分興味を持っていた。植民地が解放されて母国に復帰した時、その人々はどう受け止めているだろうか？

モルムガオの丘には、古いポルトガルの城があった。丘は鉄分を含んでいるためか、赤茶けた色をしている。港の中に白い小さい軍艦が大破して浮かんでいた。ポルトガルのである。邪魔にならぬからおいてあるのか、解放の記念にか分らない。

ここの住民はドラヴィダ系なのだろう、色が黒く、背も鼻も低い。船のワッチマンに来ている若いのに、インドはどうだと聞いてみた。意外に彼の答えはこうだった。

「インディア・ノーグッド」

と言い、私のポケットから取った物を自分のポケットに入れる真似をして、顔をしかめた。

また、私たちはオールド・ゴアのサンフランシスコ・ザヴィエルのお寺を尋ねた。行く道々にいたる所

に、ジャイ・ヒンディ(インド万歳)と書いてある。そして道の要所、要所には必ず十字架が立っていた。新旧の支配者の象徴である。ザヴィエル寺院は褐色の石造りで、大きく、そびえている。案内に出た役僧は、日本人というのにこっくり笑った。彼の息は酒の匂いがしていた。ザヴィエルを埋葬してある所は、彼の像からすべての調度にいたるまで、金泊で塗られている。インド人の老司祭が、ひとり祭壇にぬかずにいた。この寺には今はたったふたりしかいないと役僧は言った。そして、インディア・ノーグッド、ポルトガル・グッドと腹立たしそうに言った。

帰りにゴアの町でアイスクリームを食べた時、その店にふたりの黒い尼僧が、うつろな表情で坐っていたのが、何かいたいたしい感じだった。

結局、私達が聞き集めたところによると、解放時のインド軍のやり方に、ノーグッドの原因の一つがあるようだ。インド軍は戦争につきものの掠奪を見境もなくやたらしい。また、ポルトガル人を三日三晩飲ませず食わせずで閉じこめたりした。他の一つは、今まで自由港的で物資が割合にあったのに、インド領になってからは制限されて、いろいろのものが極端に不足してきている。どうもそのような点にあるらしい。

しかし、私たちの当った連中が、昔ポルトガル人の恩恵を直接受けていたような人たちなので、全部の意見であるとはいいいにくい。堀立小屋に住んで英語もしゃべれない、表情に乏しい住民たちはどう考えているのだろうか。

◎DOSUKEBE!

やはり、モルムガオでの話。ここの港湾労働者は、同じような顔つきをしていても頭の刈り方、ふんどし、腰巻などにいろいろ違いがある。同じカースト同志なのだろうから、部落か、部族の違いを示しているのかもしれない。昼の休憩にはゴロゴロ寝ころんでいるだけで飯は食べない。女の労働者もいる。女を見たら声をかけたくなるのは人情だ。船員のひとりが、オーイZIKIZIKI! と冷やかした。あれのことをこの辺ではこういうらしい。とたんに黒い顔で鼻にアクセサリーをつけたひとりがにこりとせせず、DOSUKEBE! といい返した。これで、この勝負は彼女の勝ちになった。しかし、ドクトル・マンボウの北氏が書いていたが、もうちょっとまじな日本語が世界に広まるように願いたいものだ。

◎サムライ泰安

「二度のつとめの左袂」と心境を句に託して出馬された泰安副隊長は、世が世なら一城の主とのことである。これは、私がこの人にさすががおもかげがあると感じた話である。

ラワルピンディ、スカルド間の飛行機の中で、私たちは右往左往していた。勿論、ハラモシュ、ラカボシを前方に見て、ナンガ・バルバットをすれすれにかすめて飛ぶのだから興奮しない方がおかしい。しかし、加藤さんは浮かぬ顔付きである。昨夜の住商の築山氏の招宴での飲み過ぎがたたっているのである。はき気と心窩部に痛みがあるらしい。一応、ノルモザンとプロパンサインを服用して貰ったが、効果がない。スカルドに着くと、激しく身体を折り曲げての苦しみよう。そして、嘔吐。そこで、ブスコパンの注射を試みたところ、やっと止まった。この間、加藤さんは自分から腹が痛い、なんとかしてくれと言われたい。こちらが尋ねると答えられる。激痛の時もウーンと一声うなって腹を押さえられるだけである。こんなりっぱな態度の患者は、私が医者になって三人目だ。まことにこれこそ武士の我慢のしようだと思った。あとでPK36氷河で、もう一度、腹痛を起こされたが、病気は胆ノウの痛みである。昔、シャクといていたやつだ。願わくば、加藤さんがあの世に行かれる時もさすがは大往生と言われるような最期であってほしい。

◎日本の薬はすばらしい

スカルドは実に快適である。風は涼しく、水もきれいだ。山も近い。ただ、午後、決まって吹くサンドストームだけがいやである。

隊員の中で、平井と私がいちばん最後までここに滞在した。それぞれ装備と食料の係をしていたので、荷物をジープで送り出す役をしたのである。

もう、ここから村人の診療が始まった。スカルドに軍の病院があり、軍医が二人いる。どうしてあの病院に行かぬかと聞くと、薬がぜんぜん効かぬと言う。よく調べてみると、治療代は無料だが薬品が不足しているのか、治療はその場の一回かぎりとのことである。それならなかなか治らぬはずだ。

ある日、レストハウスのコックのロジーが、ドクター、レディの診察をたのむと言って来た。レディとあらば行かずばなるまいと、たくさんのお迎えに連れられて出かけた。入口の道がポプラ並木になっている、大きい二階建のしっかりした家だ。スカルドの旧家なのだろう。

どんなレディかと待っていると、やせて大分くたびれた40過ぎのご婦人だ。なるほどレディには違いない。3年前、腰がギックリとなり、それから歩けないという。裸にして見てもよいかと言うと、まわりがどうぞと言う。しかし、そのご婦人にとっては一大決心を要することだ。異教徒の男の前に顔だけでなく、裸身をさらすのだから。赤ん坊のように身体をちぢめ、手足を固く緊張させている。診察しにくいことおびた

だし。病気は根性坐骨神経痛だ。一人かと思ったら今度は18歳の娘さん。顔が青く、発育が悪い。オッパイが小さく、いたいたい感じだ。これは十二指腸虫による高度の貧血だ。もう一人、20歳の娘、重症トラコーマで手がつけられぬ。

干ぶどう、杏の種、卵、粗朴なケーキにお茶を御馳走になる。神経痛のレディにミオセタンというのを1週間分授与した。3日位して、ロチーが「ドクター、ヴェリグッド」と言ってくる。なんだと聞くと、もうあのレディは歩き出したと言う。これにはこちらが驚いてしまった。前から、こんなところでは薬がよく効く話は聞いていたが、本当にそのようだ。

◎パキスタン人と賭をするなかれ

インド商人がえぐいことは定評がある。さすがの華僑も太刀打ち出来ないとのことである。中国人は面子を重んじ約束を守るのに対し、インド商人はそういうことがない聞いた。前小屋のパンジャブ大学での経験によると、賭でも同様に汚いそうだ。負けてもなんとかかんとかいて余り払わないらしい。その賭をやって、私達にずいぶんわずらわしい思いをさせたのは平井だった。

スカルドの最後の数日は、隊長と牧内さん(大使館)、平井と私、それにリエゾンのバシール大尉と過した。牧内さん持参のジョニー・ウォーカーで夕食時、いい御気嫌になるのが常だった。頑固なイスラム教徒のバシール大尉にとってそれはかなり不愉快な刺激的なことだった。ある晩、大尉は平井と論争を始めた。婦人は酒呑みの夫を愛するか否か、ということだ。そして結局、平井夫人にそれを手紙で聞き、その返事に対し、お互いの1ヶ月分の収入を賭けようということになった。平井の収入は520ルピー(奥さんと合せて)、大尉もそれ位(パキスタンは役人と軍人の月給はいい)。勿論、平井は愛すると賭け、大尉は否に賭けている。その返事の手紙に対し、大尉は英文で、そして直接自分宛に来るという条件をつけた。平井は自信満々で大尉の文を同封して奥さんに手紙を出した。判定は四手井・加藤・牧内の三人としたが、牧内さんはカラチに帰るので、加藤さんに決定を委任するということになった。

A.B.C. に大尉が来た時、問題の手紙が平井宛に到着した。平井夫人はこう書いていた。酒呑みの夫といえど愛する、酒臭くてもキスも辞せず。ただ面倒なので日本語であなたに出すが、その旨を大尉に伝えてくれ。しかし、大尉は内容はともかくとして、英文で自分宛に直接来なかったから自分の勝だと主張して判定を求めた。加藤さんは話を聞いてから、平井の負だと宣告した。それで大尉は鬼の首でもとったように大喜び。平井の顔を見ては520ルピー払えと言ひ、他の隊員にも彼に払うようにいってくれと言う。平井は、自

分の方が本当は勝だからといって、判定がどうあろうと払わないと頑張る。

このため、隊員の間でも大尉の勝、平井の勝、いや勝負無しとずいぶん議論がつづいた。スカルドに帰ってからも、大尉はこのことをすぐ話題に持出す。英語の議論となると平井がいく頑張っても途中でつまる。大尉は日本人に対して唯一の優越感をもたらず語学的優位を思う存分楽しんでいよいよしゃべる。そしてこういうことになった。カラチで牧内さんの判定を求める。但しそれで平井が負けたら1000ルピー払え、大尉が負けたら100ルピー払う。ぎょうぎょうしく文書を作って両者のサイン。私まで立会いとしてサインをした。

1000ルピーと100ルピーの差の根拠が面白い。平井は一度負けたのに大尉が特に再審査を認めてやったのだから、もし平井が負けたら520ルピーの2倍。大尉は一度勝ったのだから今度負けたとしても100ルピーでよいというのだ。平井に負けたら本当に払うのかと聞くと誰が払うものかと、こっちもこっちである。

結局カラチでは牧内さんの作戦が効を奏し、うやむやのうちにさようならになってしまった。打明け話になるが、平井夫人よりのあとからの手紙によると、前の手紙とちがって、本当は酒呑みは大嫌いなのだそう。私は平井夫人の本心のためにも金を払えといって平井を困らせた組だった。

◎女は子供でも側によって来ない

バルチスタンぐらゐの山奥になると、イスラムのきびしい掟もかなりルーズになる。顔もかくしていない。頭の毛は幾つかに分けて、細かく編んでいる。頭には赤いモヘヤ風の布地で作った浅い帽子を被っている。チベットに近い風俗なのだろうが、薄汚ないので余り頂けぬ。

女がわれわれの直ぐ側に寄って来るのは、薬貰いか、重症人の診察以外は絶対ない。サリンのキャンプ地で男はすぐ横に来て、ボヤーとして坐って見ているが、女は100mほど離れた家々の屋根やら二階から見物している。双眼鏡を持ち出してのぞくと、すぐバタバタと蔭にかくれる。動作は男よりずっといきいきしている。みなほっそりしていて、栄養過多のデブデブの女なんかいないので、そう見えるのかもしれない。そのうち、いたずらして、両手を握って目に当てて双眼鏡の真似をしても逃げることを見つけた。みな面白がって何度もやっては笑いこけた。

帰りにパラゴンの村で子供達が例によって、見物に来ていた。その中に一人、大そうかわいい子がいた。きれいな帽子を被り、身体にはバルチスタン風に布を巻きつけている。余りにかわいらしいので、あれは女の子でないかということになった。そこで1人ビール

1本で賭が始まった。みなぼちぼち女っ気が恋しくなっていたのだろう。女というのが多く、男というのが少なかった。サーダーに聞くと言下に男だといって、その子の帽子をとった。やはり男だった。子供達も事情を知って笑った。遠征四回のベテラン岩坪が、この辺では子供でも女は側に寄って来ませんよ、と説明した。勿論、彼は男と賭けていた。

◎4人のおちごさん

サリンでクーリーを選考した時、約4~5倍の志望者があつた。減多にない現金収入にありつこうとみな必死だ。リエゾンとハイポーターが、声を枯らし棒を振り廻して選り出した。私達は彼等のおかげで、この光景を写真に撮ろうと、走り廻っているだけでよかった。この時、隊長達の小間使いを連れて行くということになった。見物の中に、カバルーのハイ・スクールの生徒がいた。その連中にあたると、是非行きたいというのが数人いた。選択の結果、色の白いやせた背の高い兄と、やはり色白の背の低い弟の双児の兄弟、その友人のゴマ出身の色黒い丸顔のヘダールというのがまず採用された。ヘダールの顔付が阿修羅に似ているのでアジュラと仇名がついた。また一人チヨタ・ワラ(小さい奴)が加藤さんのところに来て、I shall go with you といった。加藤さんは、熱心さと英語が出来そうなのに惚れこんで、これも採用に決った。このチヨタはシェラリーという名前だが加藤さん、双児の兄貴は四手井さんのおつき、弟は林さんの三脚とカメラ持ち、アジュラは上尾の写真道具と救急薬箱持ちになった。

隊員の中には、装備、食糧、賃金の問題がうるさいからと反対の声もあった。しかし、まあまあ、これ位の余裕あってもよからうということになった。彼等はついて行く間学校はサボル訳だ。行くと決っても別段、対岸のカバルーまで荷物を取りに行きもしない。着のみ着のまま、裸足で一緒に歩き出した。

出発して間もなくすると、彼等はタバコをねだりだした。12から16位の年の連中だ。日本国の刑法や生理学、はてはコーラン、アラヤマホメットを提出して説教しても効果がない。バシールは、俺もその頃から吸っていたよと笑う。その次に足が痛いから靴、しかたないので村で買ってやった。次は靴下、装備の平井はシブイ顔だ。靴も半額は賃金引きとなった。実際何も持っていないのだから、何でも欲しいものばかりだ。ドロップの配給も始まった。タバコも時々ありつきだした。

親方によって扱ひも大分違う。四手井さんはいてもいなくてもいいよ、という顔。加藤さんは食糧係に飴の特配を要求して甘いオヤヂぶり。林さんもやさしい。タバコを一日3本やると約束する。上尾は何を要

求されても、ナヒン・ハイ(あらへんで!)と搾取型。彼等の学校での勉強は一応、一通りあるが、英語、ウルドゥ、ペルシア、アラビアと語学が圧倒的に多い。ウルドゥはペラペラだが、たのみにしていた英語はみな余り知らない。結局双児の兄弟はゴマまで、ヘダールとシェラリーは B.C. まで来た。シェラリーは数日 B.C. にいたが、寒くもなり、一人になって心細くなったのだろう。元気が無くなったのでクーリー達と一緒にかえした。

帰りは丁度彼等の夏休みになっていた。ヘダールはギャリに待っており、シェラリーもガガルに来てわれわれを待っていた。今度はみな成功に気をよくしていたのか、情が移っていたのか、文句も出ず、彼等は雇われた。ヘダールは帰りは何もねだらず、快活にケックとよく笑い、よく歌い、時に踊った。歌はメンドクというバルティ語で花の意味の言葉が出てくるのが多い。手をなよやかに動かし、優美にステップを踏んで踊る。

パキスタンに標準語としてウルドゥ語の教育に力を入れているようだ。彼等を見ていると、文字のないバルティ語など教育が普及するにつれて、だんだん失われて行くのではないかという気がした。

◎成長したハイポーター

チョゴリザの時は、ハイポーターが何も出来なくて随分苦労したと聞いている。テントの張り方、アイゼンの結び方まで指導せねばならなかったらしい。それに比べて今度はあらゆる点で、彼等の活躍に助けられた。

ハイポーターでもよく気のつく働き者、ポヤーとしている者、忠実な者、こすい者、いろいろいる。日本人の義理人情が顔を出しているときみな笑ったのだが、チョゴリザ組の四人は全員採用された。

われわれは平素、人を使用人として扱いつけていないので、使い方は全く下手糞だ。慣れてくるとどうしても友達扱いになる。しかし、パキスタン・メンバーは絶体一線を劃して、扱いもうまい。ポーター・テントに出かけるなど絶対にしない。ポーターも、パキスタン隊員の荷物の世話をしたり、アイゼンの紐をほどこいてやったりはするが、われわれにはめったにしない。こっちはされると、くすぐったい思いをするので要求しない。マホメッド・アリは平井を、オラムは高村をパイ(兄弟)と称していた。これはチョゴリザ以来の関係からだ。パキスタン・サーブと兄弟なんかいたら怒鳴りつけられることだろう。われわれも一線を劃した方がよいと思うのだが、つい向かい合うとニヤニヤしてしまう。英国人など、こんな時には、全く当り前に、勿体ぶった顔をして扱い、使うことだろう。どちらがよいかという問題だが、日本人は多分この

態度を変えることは困難だろう。無理にえらそうにしても、第二次大戦の二の舞になるのがおちだ。このままで行った方が、時には工合が悪くても長い目で見たらいいのではないかと思う。

ポーターのなかで、ジャイヨークの奥のチョルバット出身のイスマイル、アブドラヒム、タゴール、は極めて忠実で、蔭日向がない。スカルドの近くのサトバラ出身のオラム、マホメッド・アリ、マホメッド・フセインは一寸ずるいところがある。サトバラ村ではバルティでなくナギール地方の言葉である、シナウ語を使っている。移住して来たものらしい。なかでもフセインは身体も大きく、容貌魁偉で、いかにも強そうなので、初めみな期待が大きかった。しかしそのうちボロが出て、文句が多く、臆病なことが分り、余り相手にされなくなった。そうすると、タバコのボックス(チップ)も少なくなるのである。

チョルバット組の物の考え方、反応の仕方が、かなり仏教教的だとわれわれ、仏教徒の間で話題になった。チベットに近く、ラマの影響が強いのではないかということになったが、どうだろうか。チョルバットはラダクの近くである。イスマイルは若い時、チャンタン高原を越え、ネパールのカトマンズまで行ったと話をしてきた。加藤さんなんかその話を聞いた夜、一晩寝れぬぐらい興奮されたものだった。

イスマイルの加藤さんに対する献身ぶりは立派なものだった。彼はチョゴリザで、加藤さんからトランクの鍵を預けられた。それが彼の粗朴な心を感動させた。アラールが引合せた偉大なサーブであると信じたのだ。彼はスカルドで加藤さんや平井に会った時、抱きついて涙を流していた。最後の別れの時にもあれこれ欲しいと何もいわなかった。加藤さんに対しても、加藤さんの持っている家族の写真を一枚くれと言っただけそうだった。また、アブドラヒムの林さんに対しての忠誠ぶりも忘れられない。

ハイポーターという職業は、ここではシェルバのようにはっきり分化していない。ハイポーターの経歴を持つ連中が、サリンでふられて、クーリーとしてついて来て、ゴマで雇われたのがある。ゴマでもふられたもので、シアチェンまでクーリーで来たものもいた。

ハイポーターは、バルチスタンではあこがれの職業である。それは勇敢さという点もあるかもしれないが、山から帰って来た時、ちゃんとしたお仕着せで、沢山貰ったものをついでいるというところにあるようだ。まあ一種の凱旋將軍でも見る憧憬の目付で子供達は見ている。おちごのシェラリーに、お前は大きくなったから何になると聞いたら、サーダーになると答えた。そばで聞いていたイスマイルは、何をいうかといった顔をしてきた。しかしこの若い連中が大きくなるころには、カラコラムのハイポーターはまた一段と立派にな

ることは間違いないようだ。今度一緒につれて行ったおちご達が実際ハイポーターにでもなったら、インテリハイポーターが出現することだろう。

◎利口もののサーダー

サーダーのグラム・フッスールは 28 歳、頭が少し禿げかかっている、一見したところ 35 歳には見える。背丈は 165 cm ぐらいで小柄である。出身はバルチスタンでなくラダク地区で、いくなれば他所者だ。7 年間北辺国境守備隊(ノーザン・スカウト)にいて軍曹だったそうだ。スカルドでカシミール・レストランなる食堂兼宿屋を営んでいる。彼の食堂にはナショナルのトランジスターラジオも置いてある。時々行商にも行くらしい。バルティ語は勿論、ウルドゥ語も本格的、そして今英語を勉強していて、一寸はしゃべる。遠征中も、英・ウルドゥの対訳会話の本を持って来て勉強していた。チョゴリザのベースキャンプへアメリカ隊のケロシンをかついで来たのは彼だったらしい。一昨年のゲントにも参加している。

彼は、ハイポーターの中で、ずば抜けてかしこかった。チョゴリザの時は、クーリー、ポーターへの食糧の配給など、みなサーブがやって、キャラバン中苦労した。ところが今度は、殆んどサーダーにまかせても大丈夫だった。勿論、監督に立ち合うのだが、見ていると規定量より少な目に計って、アッチャー(これによし)と片付けている。キャラバンの往復でも、大尉を助けてよくクーリーを統制していた。軽い荷物をかついだ奴も、彼は要領よく摘発した。

こんなに頭が働くので、他のハイポーターがかげでブツブツ言っているが、さっぱり頭が上らない。肉代の金とか、タバコなど、サーダーにまとめて渡すとピンハネすると他のハイポーターがいうので、タバコは各自、肉代は後でまとめて各自渡しにした。最後の物資分けでも、電池やスコップを独占しようとして物議をかました。

私は彼と一緒に、輸送の中心になったロロフォンド氷河のキャンプに 9 日間滞在した。クーリーの差配に彼が必要だった。ある夕方、彼が私のところへ遊びに来た。ジョニー・ウォーカーを試しに出すと、大好きだといって飲む。飲みっぷりも立派だ。コンビーフもアサリの油漬も、おかきも、鯨の大和煮も、ヴォート・アッチャ(大変結構)とむしゃむしゃ食べる。そして帰りに余ったらウィスキーを 1 本くれなさいかという。食べる事に関しては全く頑迷な連中だと思っていたので、一寸彼には驚いた。他のハイポーターは、われわれがわざわざ準備した羊のベーコンでも、コーランの掟に従って首を切って殺したのでないからいやだといって食べなかったものだ。このあとからは、彼だけに時々コンビーフを特配することにした。

6 月 27 日と 28 日は雪だった。27 日の朝は小雪だっ

たので、バシールとサーダーにボックスをはずむからとクーリーを督励して貰ったが動かない。一週間動きづめだったので、丁度休みたいところだったのだ。28 日の朝も雪、9 時頃より晴れた。雪が膝ぐらいまであるので、明日のためにサーダーとフセイン、ハッサンに道つけにやった。道がないとクーリーは動きたがらないのだ。彼等は 10 時半頃出発、少し下流の左岸のモレーンの上で 1 時間位、右、左にもたまたするのが見えている。やっと姿を消して 30 分もするともう帰って来た。どうしたと聞くと、あのモレーンの向うは、ラスタ・アッチャ、バラフ・トラトラハイ(道はいい、雪はほんの少し)と大声でクーリーに聞えるようにいう。そして、明日はクーリー全員テントをたたませてシアチェン・キャンプに送りこみ、明後日からはシアチェンより往復させろという。なるほど、クーリーは道はよいと今の偵察の結果を聞いている。テントを持ってシアチェンへ向ってここを出発してしまえば、途中で少々雪が深くなって引返そうとはいうまい。バシールもグラムはワイズマンだと感心した。この作戦は 29 日に早速実行して成功した。

しかし、智者のサーダーも、古い中耳炎があり、特に右の耳が悪かった。そのためロロフォンドで 3 日間、C₂ で 2 日間、眩暈と嘔吐の発作に襲われ、のびてしまった。幸い治療でよくなったが、山ではそんなに強いという印象は受けなかった。技術の方は割にしっかりしていた。

サルトロが終ってから、私達が C₂ で他の山へ行く行かぬで悶着を起した時、彼は大尉の命を受けてわれわれを見張ったりした。これは彼の立場を考えれば仕方のないことだったと思う。彼は最後に五割増の賃金を貰って、その労を充分ねぎらわれたようだった。

◎ハッサン・シワのこと

サーダーが一番かしこいとすれば、ハッサンは善人だが全く間抜けていた。彼もチョゴリザ組。脇坂が帰路病気になった時、ハッサンが彼をおぶって降った話は有名だ。顔にシワが多いのでこの仇名がついた。彼はウルドゥ語も余り知らない。キャラバンで、大尉はクーリーを数隊に分けて、ハイポーターに統率させた。軍隊の点呼よろしく、大尉はポーター達に、お前のパーティは何人だと聞いた。シワの番になると、シワはチャルソー(400 人)と答えた。みな笑うと。彼はあわてていいなおした。ティンソー(300 人)。さすがの大尉もこれには苦笑するだけだった。

彼はなにかというと、ザッカス・サーブを背負った話をした。B.C. からビラフォンド峠まで 40K ある発電機をかつがせた。これはザッカス・サーブより重たいとフウフウいっていた。

彼は C₂ まで来た。そして隊員には今度余り見られなかったミズブクレ病にかかってしまった。顔もまん

まる足も浮腫がある。危いので、薬を与えて帰すことにした。ところが、ビラフォン峠を越えたら治ってしまつたらしい。

私達がギャリに着いた時、ガガルーに先行した大尉から、トランク1ヶが盗まれたと報告があった。一時、金の入っているトランクでないかと大騒ぎになった。結局四手井先生のがやられていて、金は無事だった。夜、荷物の横にシワとおちごのシェラリーが番をして寝ていたのに盗まれたのだ。大尉は最後になって、自分の仕事にケチがついたと気もどつてしまった。シワのアホー、お前がしっかり番をしてなかったからだ、シワをバンバンしばいたそう。まことに今度のシワはパツとしない存在だった。

◎手紙の枚数は愛情を現わしているか

今度の遠征では、ポスト・ランナーは2回だけ走り予定だった。それで日本へはスカルド以後3回しか出せないとな考えていた。ところがカパルーにも郵便局が出来ていて、そこで一回増えたり、クーリーが途中で帰るのに託したり、パキスタン隊のハイヤット、が先に帰るのに頼んだりして、相当の回数手紙を書く機会があった。勿論、日本からの手紙もその度に運ばれてくる。

今度は内地の留守家族の連絡が緊密だった。それで誰とどこに来たのに私とどこに来ないと大騒ぎになったりまたお互いの亭主の手紙を見せあつたりされたため、誰とどこは何か、私とどこは何時も少ないと叱咤鞭撻が来たり、余りワイ談したりしてはいけないとか、いましめの手紙が来たりした。

最初はこまやかな愛情を示して嬉々と手紙を書いていた連中も、そのうち、義務的、強制的な感じがし出した。行動日でも沈黙日でも、出来るだけ、しなくて済むことは、しない方がへばらぬのだ。しかし、誰か一人出ると、他がさぼったことがすぐ知れ渡るのである。ぶうぶういって書いていたが、中味は、決してそんなには書かなかった筈だ。

平井はメモ魔で、手紙魔だ。本人は気にも止めない放言が、彼の手帳にちゃんとつけられて、そして手紙の種になるのだ。彼が愛妻に出した手紙は、船の上からのを含めて25通になったそう。各々の手紙の枚数もまたずば抜けて多い。

岩坪の新妻よりこんなにいって来た。ポコさんとこは8枚、ワイさんとこは3枚、あなたは1枚、手紙の枚数が愛情を示しているとは思いますが、もう少し書いて下さい。岩坪は少々邪魔臭がり、愛情の表現はペンでよりも、口と手の方が上手なのでこうなのだろう。彼はこのように余り書かぬくせに、奥さんの手紙を最も待ちがれていた。そして、来ると、平井と二人で内容をちびちび披露して、独身の高村、谷

上尾を悩ました。帰りに、カパルーの郵便局に通だけ手紙が来ていると情報が入った。岩坪は固く自分のと信じていたようだった。結局平井夫人のだった。岩坪のがっかりした様子、プラスチックの片耳までおられていた。(彼は交通事故で片耳をなくしている)

このように若いものに手紙が来るのに、泰安オヂサマにはさっぱり来ない。オヂサマはせつせと葉書を出されるのだが、奥様からの返事が来ないのだ。オヂサマは、最初はフンそんなものといった顔だったが、だんだんいらいらして来られた。手紙の来る度にトバッチリが平井と岩坪に来て「オイコラ、茶を沸かせ」になった。

スカルドに着いても加藤夫人の手紙はない。とうとう怒心頭に発したオヂサマは「もう離縁だ」といきまかれた。ところがカラチに着いてみると手紙がどっさり大使館に来ている。宛名が全部大使館付になっている。オヂサマは離縁宣言を取消し、自分が詳しく宛名を知らせなかったことを忘れて、ボケナス野郎と嬉しそうに夫人からの手紙を読んでおられた。

◎セックス・ノイローゼ

診療をしていると、いろいろな患者や、他の人に来ないことを経験する。たとえば、女を裸にしたり、家の中に入りこんだり、人にいえぬ悩みを相談されたりである。

ドンソム村の有力者の家に、バニール大尉と一緒に往診に行ったことがある。大尉も診療には興味を持っていて、通訳したり、時間とみると患者を追払つたりまた簡単な薬を私から貰って、道々施したりしていた。その家に行くと、二階に案内された。そして女房に子供が出来ないから診てくれという。困ったなあと思ったが、他の女は追い出して、大尉と二人で女に向いあつた。大尉は通訳せねばならぬといって、堂々と一緒に入って来たのだ。

型通り胸から腹を診た。腹は格好だけでも丁寧にせねばならぬ。月経は正常だし、どこも悪くなくさうだ。亭主は第一夫人との間に子供があるから大丈夫という。大尉に、この夫人はきっと子宮が悪いのだろうという。それでは子宮も診たらどうだ、とあっさりという。一体、このオッサン子宮の診察はどうするのか知っているのかいな。道具がないから無理だといって、若干のビタミン剤を与えて逃げ出した。下手に医学的良心を満足させて、騒ぎでも持ち上つたらことだ。

村々で必ずといってよいぐらい強精剤を貰いに来るのが二、三人はいた。たいいていものは、異常に真剣な顔付きだ。最初は何をいっているか分らなかったが、ウルドウ語が上手になるにつれて、そんな訴えが直ぐ分るようになった。手のこぼしをにぎり、肘を股

の所にやり、前腕を上下に動かしてこれかと聞くと、そうだという。

バルチスタンでは、男20歳前後、女12歳前後で結婚するようだ。バラオの名家(宗教関係の家)の息子が葉貫いにドンソムからパリットまでついて来た。スカルドのハイスクールの生徒だ。彼は18歳、英語が大分出来る。道々いろいろ話した。彼は12歳の妻を持っている。未だタッチしたことないと顔を赤くしていた。未だ完全な女になっていないのだろう。帰りにその可愛い奥さんを見せろと言ったが、いやだと頭をふる。一夫多妻の許されたイスラムも経済的理由から一夫一妻に変わりつつある。それでも二妻ぐらいはかなりいる。コーランによれば妻はみな平等に愛してやらねばならぬから、精力の増強は重大な関心事だ。このような精力増強派と、折角嫁さんを貰ったのに遂行出来ないとか、生れて一週も勃起しないとかのインポテ派がいた。

セックス・ノイローゼは最近の日本の特徴かと思つたら、バルチスタンでも同じだ。いや世界中そうかも知れぬ。

また、姦通が、時には死で報いられる土地柄でも、性的には相当奔放らしい。メール・ランナーのルスタンから前小屋が聞き出したところによると、彼はランナーの仕事の途中でもチョコチョコつまみ食いしたそう。夜、女に会えば、殆んど話合いが成立する。ただし、他人に見つかると危いと言っていた。当り前の話だ。彼の脛に生傷があった。見つかって逃げる時に出来たものだとこの色男は自慢げだった。

アシスタント・コックのハッサンは増強派だった。彼はがさつだが、力も強くよく働く男だった。帰りのキャラバンで、彼の村も近くなったころ、ドクター、ダワイ・デド(葉下さい)と言って来た。ハハンと思ひ手を例の如く上下させてこれかと言うと、そうです、という。彼は嫁さんは一人、子供は二人だ。お前みたいにタクラ(強い)なのが飲んだら身体に悪いぞと言ったが聞かない。機会がある毎にいう。ルスタンの例も聞いていたので、彼がもっと強くなりたい理由にも充分同情した。カパルーで別れる時、アリナミン30錠程、寝る前に飲めよ、と言ってお土産に渡してやった。

もっと切実な訴えも聞いた。帰りにバラオという村に泊った。村の至る所に、澄み切った冷たい水が流れていて、杏やリンゴの多いきれいな村だった。ここは、小間使いに連れて行った双児の兄弟の村である。兄弟も早速出て来て、通訳や使走りに働いた。夜、次から次に押しかける病人をなんとか片付けてほつしていると二人がやって来た。インジェクションをしてくれという。何のインジェクションかと聞くと、丈夫になる注射をという。この双児は年上の女房がいると言っていた。よく聞きただすと、自分達のペニスが小

さいので大きくしたいと言うのだ。これは新しい訴えだ。女房がそう言ったのかと聞くと、イエス、と答える。こんな子供に、残酷な女房どもだ。お前達は未だ若い、今は小さくともすぐ大きくなる。たとえ小さくとも、技術さえうまくやれば、女性に充分満足を与え得るのだ。こう説明したいのだが、こんなデリケートな問題は、とうていウルドウでいい現わせない。英、ウルドウ、チャンボンで一生懸命説明してやったがなんとしても理解しない。面倒だからペニスに1本注射をぶちこもうかと思つたが止めて、大きくなる秘薬で我慢させた。それでも彼等は出発の朝まで、インジェクションといていた。

◎他人の女房によろしくと言ってはいけない

バラオの村を発つ時、双児の兄弟は村はづれまで見送りに来ていた。二人もわれわれについて行きかけたのだが、余り仕事もないのでヘダールとシェラリーだけで充分というので備わなかった。

別れる時、私は先を一人で歩いていて、弟のマホマッコに別れの挨拶をした。「サラマレクム、トウマリ・ビビコ サラマレクム ボロナ。」(さようなら、お前の奥さんにもよろしくな)私は彼を悩ます奥さんとうまくやりなよという心遣いも含めていった。彼は一瞬妙な顔をしたが、サラマレクムと手を振った。

少し離れて上尾が、ヘダールを連れて歩いていた。上尾もこの若い亭主をいたわった。日本人としては極く普通のことだ。「トウマリ・ビビコ サラマレクム ボロ。」これを聞いたヘダールが手を打って笑い出した。「ウエオサーブ マホマッコキ ビビコ サラマレクム ボラ。」(上尾サーブがマホマッコの嫁さんによろしくといったぞ)そして他のハイポーター達にふれまわった。こちらは何のことも分らぬので、マホッド・アリキ ビビコ サラーム、とかいうとみな声を立てて笑う。サーダーに聞くと、苦笑いしてこれは悪い言葉だからいってはいけないという。理由は詳しく説明しない。どうもこの言葉は、女房を寝取つた挨拶ではないかということになった。それから冗談に使って、ハイポーターやクーリーと笑いあつた。パキスタン全般にこうなのか分らぬが、奥様によろしくとは余り使わぬ方がよいようだ。

◎酒に恨みはかずかずござる

準備の時、食糧に関するいろいろのアンケートを取った。その中に、「あなたは酒類をどれだけ飲めるか」という項目があった。その答によると、最高は一週にウィスキー1本、最低は全行程で1本だった。当然最高の人間は非難された。いろいろ検討して、結局、サントリー1打、ドライジン1打を準備した。サントリーもジンも各一本を残して他は全部ポリエチ

レンの瓶にうつしかえた。泰安副隊長は南極の残りのポリエチレン入ウィスキーを飲んだ時、味が変わってたと反対された。ガラス瓶の重量がおしかったので黙って強行した。食卓に出す時、ガラス瓶にうつしかえたら分るまいという腹だった。この外に船組が小遣いを節約して、ジョニー・ウォーカーを1打、ペナンより買って来た。それに、カラチの大使館より、林ドクターの診察代にもらった缶ビール2打が加わった。出発前に岩坪が忠告した。"飲み助は何かかんと理由をつけて飲みたがる。無制限に出していたら、たちまち無くなる。テーブルには瓶に7分目位入れて出したがよい。"と。

成程、実際理由がいろいろつくものである。それに思わぬ事が起こった。こちらは泰安、高村、四手井の順にビッグスリーをマークしていたのだが、谷、それに上尾が、実によく飲む。岩坪と私がひやひやしているのを尻目に、出しただけは無くなる。それでも、ジョニー・ウォーカーを飲んでいる間は、こちらも、準備外のものを使っている気であったので、余り心配しなかった。

ところがゴマで荷物をあけて、ジンと、ウィスキーを試して驚いた。ジンの2/3、ウィスキーの1/2が臭くて飲めないのである。ポリエチレンの瓶に何らかの欠点があったのだ。さすがの谷、高村も飲めぬという。泣く泣くすててしまった。これから後は食糧係は、お祝いの度に顔は微苦笑に変わった。

ピラフォンド・ラ輸送の時、先行の加藤隊に対し、私が最初失敗して、食糧、タバコ、酒に不自由をかけた時期があった。それで連絡に来た上尾に、特に、タバコとジョニー・ウォーカー1本(実はサントリー)、ジン1本をロフォンドからシアチェンに持って行って貰った。ところがどうした事か、上尾がシアチェンに着いた時、ジョニー・ウォーカーはほとんど空になっていた。私は、2本送ったから大丈夫と信じていた。あとでA.B.C.でこの話を聞き、また、ジンも一晩で飲んでしまった話を聞いて唖然としてしまった。泰安は10日も酒無しだったのは、生れて始めてだぞと恐い顔である。

A.B.C.に全員揃ってお祝いの乾杯という事になった。私はサントリーを半分より少し多い目に入れて出して来た。皆に配られた。副隊長の音頭で乾杯。ところが、みな、これはなんだとロクに言い出した。私ものんでみると甘い。しまった。梅酒だった。私が自家製のを少し暑さ負けした時に飲もうとポリエチレンに入れたのを持って来ていた。それを間違えてガラス瓶に入れてしまったのだ。副隊長は10日も酒なしの上に乾杯に梅酒とは何事ぞ、冷酷無情な食糧係とぼやかれる。恐縮の至りである。しかし、こんな時、心から恐縮してはいけない。恐縮の仕通しでは食糧係はつと

まらない。

登頂が成功してA.B.C.に引揚げて来た時ビールで乾杯という事になった。このビールも反対の声の蔭にかくされて、何時の間にかにA.B.C.に来ていた。缶切りで、ボンと一つ穴を開けると勢いよく吹き出して、空になった。これではならじと次のは下に鍋を置いて開けた途端に逆にして、鍋に吹きこみました。これも泡だらけで飲めたものでない。遂に智者の飲んべえが名案を考えついた。缶切二つで穴を同時に二つあけるとほとんど吹き出さない。次々全部あけられた。正面のシアチェン氷河、テラムシエール氷河、テラム・カンリをながめて乾杯。5000mの高度では、気圧の低さに反比例して酔いはよく廻るようだ、なんともいえないうまいビールだった。

イスラム教徒は勿論禁酒だ。フンザのイスマイリ派は果実酒を飲むらしい。これを、フンザ・パニ(フンザ水)という。ハンニヤ湯とでもいうところか。パルザスタンにも、スカルドにはあるような話を聞いたが手に入れるのはむづかしい。三人寄ればイスラム教徒の諺のように実に他人の事を気にするのだ。帰路、杏がワンサとなっていて私達を楽しませた。フンザ・パニを作ってやろうということになった。ポリエチレン瓶に、副隊長と、谷、齊藤が杏の実を入れた。谷が最初だった。一日もするとどんどん発酵する。蓋を開けると吹き出す。蓋をしめておいた谷のポリエチレン瓶が接着面から割れてしまった。副隊長はガラス瓶に入れて栓が飛ばぬように針金で巻けばよいといい、手はずからジョニー・ウォーカーの空びんに移して、ぐるぐる巻きに瓶をしばった。カパルである夜突然爆発音があった。何か分らなかつた。翌朝、谷が杏を入れたジョニー・ウォーカーの瓶がグシャグシャになっているのを見つけた。苦心が炭酸ガスの泡になってしまったのだ。これを見てから、副隊長と私は1日3回蓋をあけてガスを抜くことにした。それもそろそろとである。スカルド、ピンデイ、カラチとガス抜きはつづいた。帰りの飛行機の中では、副隊長はジョニー・ウォーカーの瓶につめかえて、紙の栓をして、手にぶら下げ私は相変わらず、シューシューとポリエチ瓶のガス抜きをやっていた。

羽田の税関で酒類でやられたらほかすつもりだったが無事通過した。このようにして作り、持って来た、世界の珍酒は2人の家で静かに熟成しつつある。左右田農学博士より聞いたところによると、果実酒を作る時は瓶の口をわらで栓をしておいたらよいとのことである。将来フンザ・パニを作る人は、そうしたらよいだろう。味は勿論格別である。

サルトロの反省

一三連戦の兵卒として一

岩坪 五郎

いつも事なかれ主義で、おこられん程度に、ちょっとほめられる程度に仕事して、三連戦した。こういう者にとって、隊の批判を書くのは、実に損な役割である。しかしまあ書きましょ。それがせめてもの罪滅ぼしになるかもしれない。おこられてもともと。ほめられてまいたくことになればもっけのさいわい。

サルトロ隊のAACKにおける位置。熱風吹きすぎぶ西パキスタンの大沙漠で、チェナブ(Chenab)急行の窓をあけはなし、からだ中の水けをとられて、半ミイラ化したのはチョゴリザの話。こんどは全隊員10名中始めて熱帯へきたのはわずか3名。しかし彼らと乾燥熱帯では毛布にくるまっているのが、いちばん涼しいことなど常識中の常識と、身につけている。

1955年、日本最初のカラコラム隊は、探検の第一歩としてすすんでかわったものを食べたり、経験したりした。58年チョゴリザ隊は、全精力を山登りにつぎこむため危険性のあるかもしれぬことはすべて禁じた。露店のカバーツを食べたり、賃貸しのラクダに乗ったりすること。

しかし今回、英語は相かわらずへたとしても、ほんどうの外国へ来たとの感じは、全員に見あたらぬ。せいぜい準外国である。してもよいこと、わるいこと、みな分っているのだ。始めての人もいるが、AACKそのものがすでにパキスタン-カラコラムには、なれてしまった。

富士山に何度登ってもそれぞれおもしろい。しかし最初のときとすこし違うことはたしかだ。チョゴリザの次に、もしK₂に、あるいはナンガ・パルバット(Nanga Parbat)、クンヤン・キッシュ(Kunyan Kish)でもよい。そうしたら、気分はだいぶ違ったろう。傾斜は急、峠越え、シアチェン氷河、いろいろ相異はある。しかし高さはほぼ同じで、雪は深く、山容はキレイ、メンバー構成もほとんど変わらない。サルトロ登頂はチョゴリザ、ノジャックに続くダメ押しのとどめの一刺しというべきだろう。もちろん外部から、または歴史的にみれば素晴らしい戦果だろう。しかし一兵卒としては、北支にいたが中支へ移動したようなものだ。

[ジョイントについて]

目的のためには手段をえらばず。ジョイントのつまらなかつたことだけが、頭にあるがこのたびのことはお国を憂う一兵卒として賛成である。ただ今後、少しでもより快適にするために反省し、策を練るのは必要

だ。今回はむこうは完全にしろとだった。それでもあれだけなまいきで、あつかましくて、強引だった。こんど、さらにどこかとジョイントして経験をつけてきたら実力は余り進歩しないだろうが、どうなるかと、おもうと空恐ろしい。彼らは口を揃えて、日本隊はすばらしい、優秀だ、しんせつだ、とほめちぎる。それはぬけさくで、お人よして、あまちょろくて、御しやすい、ととるのはひがみだろうか。彼らはイギリス人を余りよくいわない。しかし、彼らがイギリス人の前にてたときの態度、イギリス人が今までその植民政策で示した実績を考えると、やはりこのようにひがまざるをえないのではなからうか。

それでは、どうすればよいか。ジョイントなどしないにこしたことはない。しかし、今後ジョイントでなければ行けないあいがますますふえてくるだろう。まず、英語に強くなることである。もちろん、いくら練習しても、半分英語で生活している彼らよりうまくなることはむりである。しかし、自分の主張は通さねばならない。エクスペディションにおける、沈黙は生きていることを放棄するにひとしい。ことばが通じないのはわれわれだけでなく、彼らにとってもお互いに不愉快である。意思の疎通がなくて、片方がかたくな行動をしてもそれをせめることはむづかしい。誠意をもって接すれば相手もよく感応するだろうが、そんなことで相手を屈服させるのは手間がかかってしかたがない。そのうえ、そうなるまでにこちらがひっかぶる損害は甚大なものである。

つぎに、われわれがとるべき態度について。どうもわれわれはウエットすぎる。むちゃにしんせつにしたり、フンガイして、そっぽをむいたり。いいかえれば大人げない。それから気が弱い。人の顔を見、自分を犠牲にして他人にしんせつにすることが多すぎる。日本人は感情がこまやかだからかもしれないが、全体をよんだり、計算をしたりが不得手なようだ。キゼンとし、サツソウたるところをみせて相手を感心させねばならない。チギシユンジュンし、いつまでも、相手をまたすようでは、人を指揮指導することはできない。

日本人同志は団結すべきである。われわれが彼らを扱いやすかつた最大の点は、彼らどうしの分裂がはげしかつたからである。したがって、ジョイントの隊はこちら側のチームワームをしんけん考える必要がある。相手側をやっつけることばかり書いたが、ウエットで、ソフトで、しんせつな日本人にとってはこれくらい心がけてまだたらぬくらいだからいいだろう。

[メンバー]

メンバー構成は、残念ながら、進歩も変化もないチョゴリザと全く同じである。一人一人、誰の役を誰がすると、あてはめることさえできる。時はたち、それぞれ年をとりAACKもノジャックなどの経験を経て

発展したはずだ。それなのに、何らの変化がないのは、現状維持というより、むしろ後退であるかもしれない。こんなことを書けば、そんなら五郎など当然はずすべきであった、ということになって損だが AACK のためとおもって書いているのだからしかたがない。隊員一人一人をとってみればそれぞれみな持味を活かして活躍し、もしいかなかったら困るといふ人たちがかりである。しかし、いなければ成功しなかったとはいえない。

前述したように、サルトロ遠征に新鮮味がなかった理由のひとつは、この 10 名という人数と、チョゴリザと同じ構成にある。これだけ人数がいるとどうしても仕事が多くなり、粗雑になり、かつ、人のやることに批判的になる。私のようにサボリとして定評をもっているものでさえ、ノジャックのときは、これを自分しなければ誰もしないので隊全体が困るのだとおもった。若い隊員が、自負と責任をもって、仕事をできるように隊の構成をもっていく。それは隊行動にとっても、また、各隊員の楽しみを増すためにも、重要なことである。

この点、今回も三人もの上層部がいたことはざんねんだ。文珠の智恵と反対の現象がしばしば起こる。私にいわせれば、指揮者はたいいのばあいどちらに進むべきか、箸を倒す役をしてくれればよいものと、おもっている。AACK の兵隊どもはそうとう優秀だから最重要のことがい、たいいそうとんでもないまちがいはしない。つぎつぎと多くの経験をうるにしたがって、皆がそれぞれの意見をもち隊のためにしんげんに、たたかす。たいへんよいことであるが、どちらでもよいことも多い。また、そのために混乱や、不快感をもよおすことも多いことを考えるべきである。

チョゴリザのばあい、今川氏がやってくれた日本人の連絡将校の役を誰がするかが問題であった。しかし前年、許可をとるために活躍した高村がかちえた実力はたいしたものであった。パキスタン側とこちらの間に、はさまれたり、彼のおかれていた特殊な立場のために、苦勞することが多かったが、実際称賛すべき働きを示した。「かわいい子には旅をさせ」とはよくいったものである。皆それぞれ、自分の立場で、よくがんばり彼だけをほめるのはやや八百長であるが、一応、彼の活躍は特筆すべきである。やや酒を飲みすぎるきらいはあるが。

連絡将校は、私個人的には決して好感を抱いていないが、有能であったといえるだろう。彼のとったクーリー達の統率方法など、今後参考にすべきことが多い。

「山」自身の性格、タクティックスに対する批判などは、それぞれ書かれるから省略する。簡単にいえばサルトロは登はん技術的にはチョゴリザ、ノジャックに

くらべ、傾斜はもっとも急で、積雪も深く、いちばんむつかしい。しかし、作戦的には殆んど頂上まで一直線でルートもだいたい一定しており、用兵もたやすかったとおもう。問題はキャラバン、とくにピラフォンド峠越えである。ピラフォンド・ウォールを越すルートはなかったから問題はなかった。しかし、やや難かしいとしても近道があったらいい、さらに、隊がもっと小規模で機動性にとんでいたばあい、サルトロの登はん史は大きくぬりかえられていただろう。

さっと登ってさっと降った今回のタクティックスに私は大賛成である。あんな大人数のばあい 2 回も 3 回もアタック隊をだす必要はあるまい。どうしても頂上に登りたいならまた別の山をやればよい。

ただあのばあい、天候が悪かったのと食料など日数の関係でしかたなかったとしても、第三、第四キャンプの間は短かすぎた。ラッシュ戦法の要諦は、キャンプ間を大きく伸ばすことにあるとおもう。

高度順応のために、どんなにスピードを要求されるラッシュ・タクティックスでも、一度くだることがぞましい。7000 m までは一挙に登ってもよいから、アタックの前に 6000 m でもよいおりに、たいへん楽になる。平井と私が CIII から CIV へ、翌朝 3 時におきて、CV へいったとき、二人は、他の連中に較べ疲勞はそうとうはげしかった。もし第 I、第 II アタック隊ともに失敗し、CIII から直接アタックにいったとしたら、その成功はちょっと疑わしい。できるだけ、第二次高度影響のおこる高さに少し突込んでくだり、一挙にアタックという方法をとりたい。

〔装備について〕

さすが経験をほこるわが装備係は、ごくスムーズに装備をととのえた。チョゴリザのときのような取りこし苦勞や、ひとつのものにのみ深入りして他がお留守になることなく、全体をみながら、準備をしたのは優秀であった。

ただあまり今までの経験をたのんで、おちつきすぎた結果、不親切または誠意がないとおもわれるものが少し目についた。たとえば布張りの分厚くて重いエアマットレス。キャラバン用のテントなど、人夫がかがづくのだから、10 回程遠征に使えそうな重いものでもよい。しかしマットレスは最後まで隊員が背中にかがいで運ぶものだ。紐でしばるヤッケの首周り。チョゴリザのときのペンリな締具がつぶれやすかったからといって手で結ばせる手はあるまい。素人がへたにテントの設計などに介入せず、テント屋にまかせて急所だけをおさえ、装備係は細かい点の改良に力を入れてほしい。装備に限らず、何にでもいえることだが、粗いネジと細いネジをうまく使いわけるようにしたい。チョゴリザのときは、細いネジばかり使って精力消耗し、ノジャック、サルトロでは細いネジを使い忘れた

感がある。チョゴリザのときは何もかも始めてだったからたいへんだったが、もうこのふたつのネジを使いわけられるはずだ。

ぜひ改良、発展させてほしい装備類。いつものことながら、氷河上のテントは熱くてたまらない。アルミ箔を使ったフライシートがほしい。ジュラルミン製の長い軟雪用のベグ。たいへんよろしい。オーバ・シュウズ、ずらないように頼みます。氷河上の輸送人夫の足ぬれを予防する簡単な靴カバー。品質の安定した合成樹脂製ブタンガスボトル。

それから、できあがったものはかならず一回装備係が使用または着用してみしてほしい。

〔食料〕

私は食料係でありましたから、批判はやりにくい。大綱はチョゴリザ、ノジャックと同じであるが、斎藤が食料係長となったのでだいぶまいものがふえた。

とくに冷凍真空乾燥による、卵・ネギなどは、特筆すべきである。その他全体的にうまくなった。食料係は、どんどん新しい感覚をもった人が代るべきで、同じのがやっていると定期的な発展はのぞみにくい。主観的なものが食料では支配的だから。カンバンは相かわらず。カンバンをもっと添え物のようにしないかぎり、カンバンだけをうまくすることは無理だろう。チョゴリザのとき、ラーメンとビーフンを朝食で交代につかい、前者が好評だった。しかし、こんどは乾燥米におされ、悪評ふんぶん。乾燥米は味のついていないのがよい。味つきは日がたつにつれて評判がわるくなる。

〔これからの遠征について〕

AACK は、ヒマラヤ経験者数十人をようする大クラブである。これがいちいち挙会一致態勢で準備をし一遠征隊を送りだすのはよほどの遠征だけにしたらどうだろうか。これからは、せいぜい 5、6 人集ってさささとでていけるようにしたい。それも京都だけでなく、東京在住の、または大阪在住の AACK パーティというのがとてもよいだろう。京都の若手横暴の声をきく。就職好調で、若手の新入り少く京都では同じ顔ぶれが行く行かぬにかかわらず、落第の危険にさらされながらやっている。この状態が続けば AACK は多くのルンペンを抱え、だんだんガラが悪くなり、初めの A の字が肩身せまくなるかもしれない。それを知らながらも、なおまたいざたくさせるのが AACK の長所だろうか。

× × ×
× × ×

サルトロ新兵の言

上尾庄 一郎

昨年のサルトロ・カンリ遠征隊に参加して、ヒマラヤ未経験でかつ最若輩の隊員としての自分の経験を反省して書いてみる事にする。

私はこの遠征隊の隊員に選ばれた時、私が AACK の最も若い世代、山岳部により近い世代の代表として選ばれたであろうことはすぐ理解出来た。特に同時に隊員に選ばれた同輩の前小屋はパキスタン留学中であり、かつ、確実に遠征に参加出来るかどうかは不明であったので、私には何か代表としての使命感のようなものさえあった。

その結果、遠征中の基本方針として、登攀に入ってから、特に 7000m 近くの高所で、絶対にバテないようにしよう。仮に頂上に行けなくてももしチャンスが与えられれば十分行けるだけの余裕を残して帰ってこようと決心した。

というのは過去二回の学生遠征隊での登頂の失敗やチョゴリザの経験からヒマラヤでは 30 歳前後が最も強く若いのはダメだということに AACK では決りかかってきていたようで、もし今回、私がバテればそういう結論になり、以後山岳部出たての若い会員は遠征隊に参加出来なくなってしまうと思ったからで、逆に私に高所でも十分の働きが出来れば同世代の若い会員にもより多く遠征隊参加のチャンスが与えられるだろうから、今度の遠征に協力してくれた若い会員や山岳部員に報いる事になると考えた。そしてそのために経験者の話をもととして

- (1) 出来るだけ気苦勞はしないこと。
- (2) 出来るだけ不要の仕事はしないこと。
- (3) 出来るだけ日本の山におけると同じようにすること。

この三点に留意することにした。若い者が弱いといわれる原因が主に以上のような点を守らないことから来ると思ったからだ。

以上は隊員になった時から出発までの考えだったが結局遠征中も変わらず努めて実行に移した。例えば(1)に関してはつまらぬことから怒られても、最初のうちは自分の正当性ばかりに気がつき、しゃくにさわっていつまでも気になるものだったが、次第に馴れて適度に聞き流すことも出来るようになり、たまには怒られるのを期待して話をするようにもなった。(2)に関しては人間は自分が仕事では他人が何もしていないとしゃくにさわり、どうしてもよい仕事でも命令したくなるものなのでそういう場合、先手を打って自分で何か仕事をする事にした。幸い私は写真係だったのでそれを利

用した。また休養は体の調子が良い時でも出来るだけとるように努めた。例えば C₂ を作った日、さらに先への偵察隊に参加しなかったことについて帰国後、谷さんから批判を受けたが、もし偵察隊が二隊に分れ別々のルートを見に行くのだったら私も当然参加したがあの場合全員で一つのルートの偵察は不要と考えあえてテントに残った。

(8)については使命感のようなものを持つこととすでに矛盾しているが、とにかく海外遠征ということ意識しすぎて能力以上のことまで手を出さないように努めた。町では出る幕がないのでその分を山で取り返そうなどと思わないようにした。

結果的には最終キャンプまで行き、かつ十分元気だったので、もし許可が得られれば頂上まで行けたと思う。その点初めの基本方針は達したことになる。しかしそれは上記の結果がもたらしたというよりは、もっと別の理由によるというよりよいだろう。

まず第一にすでにいわれている如く、高度順応が完全に行なわれたこと。これは 5500m の峠を越え、更に 5000m 近くで一月近く生活したあとで登攀にかかったためだ。

次に高所の滞在日数が割合少なかったことで、急峻な地型と登山法による。

更に隊の行動が計画通りに運び、余裕をもって登攀に当ることが出来たための心理的な余裕と自信。また同輩の前小屋が病後のため十分な活動が出来ないのでそれを補おうとする気持が働いたこと。またチョゴリザでは最若輩であった高村、岩坪両隊員が今回では隊

運営の中心となって活動しているので隊の重要事項も耳に入り、それから来る責任感、更に全隊員が最も若輩である私をかばうようにしてくれたこと、特に林登攀隊長はかつての自分の経験を考えてかその傾向が強かったと思う。

またパキスタン側隊員の能力がわれわれに比べ数段劣っていたので、それに調子を合わせるために生ずる余裕。以上のような理由をあげることが出来よう。

とにかく今回の遠征では若い者の方が弱いという結果にはならなかったのではあるが、今や山岳部現役のみによるインドラサン (Indrasan) 遠征隊の見事な成功の例が出来たので、今後は高所登攀能力に関して隊員の年齢について以前のような議論はされなくなるだろう。

しかし、遠征全期間を通じての総合的能力という点に関しては話は別ではあるが、今回の遠征では年齢とは関係なしという印象を受けた。

私自身遠征を終って特に反省している点は前記のようなことを気にするあまり、自分で自分の行動を限定し、消極的にしてしまったことで、これは探検隊でなく登山隊の場合におちいりがちだとは思うけれども、今後、もしまた遠征に参加する機会があれば、今度の経験を基にして、もっとのびのびと行動しようと思う。高所影響に対する恐怖心は経験者の話を聞いていただけではとれるものではなく、実際に経験してみてもその程度を知り初めて解消するものであることをつくづく実感した。これがヒマラヤ経験者が未経験者にくらべて持ちうるほとんど唯一の有利なことがらだろう。

木 旺 講 座 —その2—

アッサム・ヒマラヤ入門

高 橋 旨 象

*この講座は毎月一回夜 AACK ルームにおいて、主として若手を相手に講せられた講義に若干手を加えたものである。

I はじめに

アッサム・ヒマラヤ (Assam Himalaya) においては、偵察を含めて登山らしい登山はほとんどおこなわれていない。それはこの地域の苛酷な自然が山への接近を容易に許さないことにもよるが、何よりもこの地域の政治状況の悪さによるものであろう。第二次大戦前に測量や博物学的調査を目的としてアッサム山岳地帯に入りこんだ人々を悩ませた山岳ジャングルと未開民族には、インド政府の辺境統治の強化と3次にわたる5か年計画の施行により、ようやく文明が流れ始めている。しかし、チベット (Tibet) を治下に置いた中国勢力との接触は、多年にわたる国境紛争となって現われ、一向に好転のきざしを見せていない。ブータン (Bhutan) においても事情は同様である。外交権をインドに委譲し、保護国となっているブータンは、インドにとっていわば中国勢力の防波堤であり、他国にふれられたくない存在なのであろう。

アッサム・ヒマラヤの山々が、ブータンにおいてはチベットとの国境線上につらなり、アッサムにおいては中国のマクマホン・ライン (MacMahon Line) 拒否により、チベット領内に引き入れられている現状は、ただちに行動に結びつく対象としてアッサム・ヒマラヤの登山と探検を考えることを不可能にしている。ソ連との対立により、中国がさらに孤立化の道を辿るとすれば、事情はますます悪くなる一方であろう。

だからといって、アッサム・ヒマラヤの登山と探検を全く不可能なものとして、関心を寄せないまま放置しておくべきではない。それに少しでも目を向けていくために、まずここでは、ありふれた教科書的なものではあるが、アッサム・ヒマラヤについての知識を整理することからはじめ、それを今後の研究の第一歩としたい。専門家にとってはまことにチャチなものではあるが、私を含めてあくまで初心者を対象として書いた。その点をご了承願いたい。

アッサム・ヒマラヤは約 290 km にわたってブータンの北限を形成し、さらに約 400 km アッサムの北限を作っている。このように広い範囲に及んでいる

で、便宜上西部アッサム・ヒマラヤ(ブータン)と東部アッサム・ヒマラヤを区別し、章を分けて述べていきたい。

II 西部アッサム・ヒマラヤ(ブータン)

Bhutan という名はブータン人のつけたものではなく、インド人がつけた名を英国人がとったものらしい。インド人はチベットを Bhot といい、チベット人らしい人間を Bhotiya とか Bhutea とか呼んでいるからである。ブータン人は国の名を Druk-yul (Druk は電雷、竜。yul は村、国を指す。)と呼んでいる。

ブータンは面積約 50,000km²(九州は約 42,000km²)、人口 650,000 (北九州市福岡区とほぼ同じ)、したがって 13人/km² の人口密度を有する国で、その広がりには東西約 300 km、南北約 140 km² である。アモ・チュウ (Amo Chu, Chu はチベット語で川の意)、ウオン・チュウ (Wang C.), モ・チュウ (Mo C.), トロンサ・チュウ (Tronsa C.), ブムタン・チュウ (Bumthang C.), クル・チュウ (Kuru C.) のチベットあるいはブータンに水源を發する溪谷が、いずれも南下して中流では小さい河岸段丘を作っている。これらの溪谷は、ヒマラヤ前山地帯を切断してヒンドスタン高原に出、ブラームプトラ河 (Brahmputra R.) に流れこんでいる。この 7000 m にわたる垂直的構造がこの国の性格を規定する重要なものとなっている。

以上は「新世界地理 5」における川喜田氏の記述による。⁽¹⁾ さらに同氏によると、「この地形上の特色は、気候と植生上の性格を加えて、この国の人文的性格と密接な関係を持っている。すなわち、この国はベンガル湾から北上するモンスーンの影響を受け、世界一の多雨地帯たる東ヒマラヤを占める。その多湿な森林におおわれた山地の性格は、この地域にのみ分布するミタン (Mithan) という変った牛が、またブータンにみられることにもうかがわれる。……山地がヒンドスタン平原にのぞむ山麓地帯はデュアル (Duar) と呼ばれる。そこは熱帯性の高温に加えるに、高温期の夏半年はまた雨期でもある。低湿と相まって、インド中でも不健康なおそるべき悪疫流行地帯である。……熱帯